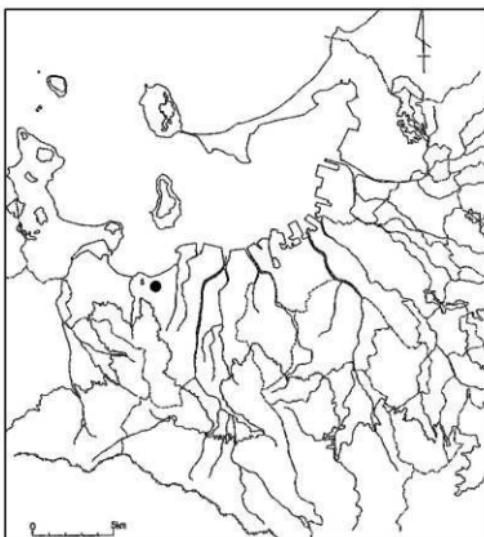


NANAME GA URA KAWARAGAMAATO

斜ヶ浦瓦窯跡 2

— 斜ヶ浦瓦窯跡第2・3次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1233集



調査番号 9650・9760
調査略号 NNG-2・NNG-3

2014

福岡市教育委員会



1. SX04窯体（西から）



2. SX07窯体（西から）



1. SX04焚口（南から）



2. SX08物原（西から）



3. SX08物原（南から）



4. SX02断面（北西から）



5. SX03断面（南から）



6. 丹塗瓦

序

大陸と一衣帶水の間にある福岡市は、古来より大陸文化との交流交易の拠点として発展してまいりました。昭和62年に中央区旧平和台球場で発見されました国史跡鴻臚館跡は、まさしく古代日本の交流交易の拠点である「客館」として設けられた建物であり、整備公開にむけ現在も確認調査が実施されております。

今回報告いたします西区生の松原所在の斜ヶ浦瓦窯跡は、以前よりここで平安時代の瓦が表採されており、昭和27年には発掘調査が実施され3基の瓦窯を確認、この瓦が鴻臚館跡出土の瓦と同種であることが指摘され、鴻臚館跡関連の瓦窯跡であることが知られておりました。

平成7年、この瓦窯跡が立地する範囲もふくめて公園整備が計画され、鴻臚館跡に関連する重要な遺跡であることから、これに先だって平成8・9年度の2カ年にわたって瓦窯の範囲確認、遺存状況、窯構造を確認するため発掘調査を実施いたしました。本書はその成果を報告するものであります。

調査の結果、7基の瓦窯の存在と、窯内部等から出土した瓦が鴻臚館跡の発掘調査出土の瓦と同種であることを再確認し、鴻臚館の瓦を焼いた瓦窯である可能性が高まりました。

この重要度から、窯跡部分での公園整備は中止して、遺構は慎重に埋め戻して保存され、将来に託されることとなりました。

調査に際し快くご理解とご協力をいただきました関係部局には心よりお礼申し上げます。また、ご協力をいただきました関係者各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝致します。

この報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献する事ができましたなら幸いに存じます。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 津井龍彦

例　　言

1. 本書は西区生の松原4丁目2番地内において、平成7年西区土木農林課(当時)による斜ヶ浦池整備計画での公園整備計画に先立つ確認調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課第1係(当時)が平成8・9年度に実施した斜ヶ浦瓦窯跡第2次・第3次調査の調査報告書である。調査当時、事前審査で先行して行った確認調査を第2次調査としたため、本市年報10・11では第3次・第4次調査となっているが、本報告で訂正するもの。
2. 発掘調査と整理報告書作成は、埋蔵文化財国庫補助金要項にある、遺跡範囲確認調査に該当する補助事業として行った。
3. 本書で用いる方位は磁北で、座標北はこれに6° 0' 西偏する。
4. 調査区は、現況の地形を基軸として任意の10m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は南西交点とした。
5. 遺構の呼称は略号化し、窯関係→S X・土壤→S K・柱穴→S Pとし、試掘トレンチはT-で表記した。
6. 本書に使用した遺構実測図は第2次調査は屋山洋、第3次調査は加藤良彦・大塚拓史による。
7. 本書に使用した遺物実測図は上角智希・相原聰子・平川啓治による。
8. 製図は相原聰子・井上加代子・大庭友子・米倉法子による。
9. 本書で用いた瓦文様分類は『鴻臚館12』福岡市埋蔵文化財調査報告書第733集2002による。
10. 本書に用いた写真は第2次調査は屋山、第3次調査は加藤による。
11. 本書のI-1は屋山が、他の執筆・編集は加藤が行った。
12. 本書にかかわる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

調査番号	9650	遺跡略号	NNG-2
調査地地籍	西区生の松原4丁目2番	分布地図番号	103(長垂)0515
開発面積	1800m ²	調査実施面積	310m ²
調査期間	961108~961227	事前審査番号	9-1-138

調査番号	9760	遺跡略号	NNG-3
調査地地籍	西区生の松原4丁目2番	分布地図番号	103(長垂)0515
開発面積	1800m ²	調査実施面積	90m ²
調査期間	971218~980325	事前審査番号	9-1-138

本文目次

I.	はじめに	1
1.	第2次調査に至る経緯と経過	1
2.	第2次調査の組織	1
3.	第3次調査に至る経緯と経過	2
4.	第3次調査の組織	2
II.	調査区の立地と環境	3
III.	調査・研究の歴史	6
IV.	調査の記録	7
1.	調査の概要	7
2.	SX01 (T-10・24・1・2) の調査	8
3.	SX02・03 (T-10・3) の調査	11
4.	SX04 (T-20・14・23) の調査	20
5.	SX05・09 (T-11・21・22) の調査	27
6.	SX06 (T-12・26) の調査	43
7.	SX07・08 (T-16・25・6・4・27・28・29) の調査	48
8.	T-15の調査	67
9.	その他の出土遺物	67
V.	小結	72

挿図目次

Fig.1	関連遺跡分布図(1/200,000)	4
Fig.2	周辺遺跡分布図(1/40,000)	4
Fig.3	調査区位置図(1/1,000)	5
Fig.4	遺構全体図(1/100)	折込
Fig.5	SX01(T-10)土層断面図(1/50)	8
Fig.6	SX01出土遺物実測図(1/4・6=1/3)	9
Fig.7	SX01(T-24)前庭部実測図(1/50)	10
Fig.8	SX01周辺出土遺物実測図.1(1/4・15=1/3)	10
Fig.9	SX01周辺出土遺物実測図.2(1/4)	11
Fig.10	SX02・03(T-10)実測図(1/50)	12
Fig.11	SX02出土遺物実測図.1(1/4)	13
Fig.12	SX02出土遺物実測図.2(1/4)	14
Fig.13	SX02出土遺物実測図.3(1/4)	15
Fig.14	SX02出土遺物実測図.4(1/4)	16
Fig.15	SX02出土遺物実測図.5(1/4)	17
Fig.16	SX02出土遺物実測図.6(1/4)	18
Fig.17	SX02出土遺物実測図.7(1/4)	19
Fig.18	SX02出土遺物実測図.8(1/4)	20
Fig.19	SX02周辺出土遺物実測図(1/4)	21
Fig.20	SX04(T-20)実測図(1/50)	22
Fig.21	20トレンチ(SX04)東・西土層断面図(1/50)	23
Fig.22	SX04.6層下部出土遺物実測図.1(1/4)	24
Fig.23	SX04.6層下部出土遺物実測図.2(1/4)	25
Fig.24	SX04.6層中部出土遺物実測図.3(1/4・95=1/3)	26
Fig.25	SX04周辺出土遺物実測図.1(1/4・98.103=1/3)	27
Fig.26	SX04周辺出土遺物実測図.2(1/4)	28
Fig.27	SX04前庭部(T-23)実測図(1/50)	29
Fig.28	SX04周辺出土遺物実測図.3(1/4・121.122.124.125=1/3)	30
Fig.29	SX04周辺出土遺物実測図.4(1/4)	31
Fig.30	SX05(T-11)実測図(1/50)	32
Fig.31	SX05出土遺物実測図.1(1/4)	33
Fig.32	SX05出土遺物実測図.2(1/4)	34
Fig.33	SX05出土遺物実測図.3(1/4)	35
Fig.34	SX05前庭部(T-21・22)実測図(1/50)	37
Fig.35	SX05周辺出土遺物実測図.1(1/4)	38
Fig.36	SX05周辺出土遺物実測図.2(1/4)	39
Fig.37	SX09(T-21上部物原)出土遺物実測図.1(1/4)	40
Fig.38	SX09(T-21上部物原)出土遺物実測図.2(1/4)	41
Fig.39	SX09(T-21上部物原)出土遺物実測図.3(1/4)	42

Fig.40	SX09(T-21上部物原)出土遺物実測図.4(1/4)	43
Fig.41	22トレンチ出土遺物実測図(1/4・208~210=1/3)	44
Fig.42	SX06(T-21)実測図(1/50)	45
Fig.43	SX06出土遺物実測図.1(1/4)	46
Fig.44	SX06出土遺物実測図.2(1/4・219~221=1/3)	47
Fig.45	SX06前底部(T-26)実測図(1/50)	48
Fig.46	SX06周辺出土遺物実測図.1(1/4)	49
Fig.47	SX06周辺出土遺物実測図.2(1/4)	50
Fig.48	SX06周辺出土遺物実測図.3(1/4・248~249=1/3)	51
Fig.49	SX07・08(T-6・16・25・27~29)実測図(1/50)	52
Fig.50	SX07・08(T-25他)土層断面図(1/50)	53
Fig.51	SX07出土遺物実測図.1(1/4)	54
Fig.52	SX07出土遺物実測図.2(1/4)	55
Fig.53	16トレンチ出土遺物実測図(1/3)	55
Fig.54	25トレンチ下位物原出土遺物実測図(1/4)	56
Fig.55	25トレンチ中位物原(SX08)出土遺物実測図.1(1/4)	57
Fig.56	25トレンチ中位物原(SX08)出土遺物実測図.2(1/4)	58
Fig.57	25トレンチ中位物原(SX08)出土遺物実測図.3(1/4)	59
Fig.58	25トレンチ上位物原(SX08)出土遺物実測図.1(1/4)	61
Fig.59	25トレンチ中位物原(SX08)出土遺物実測図.2(1/4)	62
Fig.60	25・27・29トレンチ中層出土遺物実測図(1/4・329・330=1/3)	64
Fig.61	25・27・29トレンチ上層出土遺物実測図(1/4)	65
Fig.62	25・27・29トレンチ上層出土遺物実測図.2(1/4)	66
Fig.63	15トレンチ土層断面図(1/50)	67
Fig.64	15トレンチ出土遺物実測図(1/4)	68
Fig.65	5・7・13トレンチ出土遺物実測図(1/4)	69
Fig.66	表探その他の出土遺物実測図.1(1/4)	70
Fig.67	表探その他の出土遺物実測図.2(1/4・384~387=1/3)	71
Fig.68	瓦叩き目文様分類基準	74
Fig.69	各窯跡実測図(1/100)	75

図版目次

卷頭.1	1. SX04窓体（西から）	2. SX07窓体（西から）
卷頭.2	1. SX04焚口（南から）	2. SX08物原（西から）
	3. SX08物原（南から）	4. SX02断面（北西から）
	5. SX03断面（南から）	6. 丹塗瓦
PL.1	1. 調査区遠景（南東から）	2. 池と調査区段差（南東から） 76
	3. T-17・25調査前現況（南西から）	4. T-9～13調査前現況（北東から）
	5. T-23～8調査前現況（南西から）	
PL.2	1. SX01（北東から）	2. T-24（南東から） 77
	3. T-2（南から）	
PL.3	1. SX02検出状況（北から）	2. SX02検出状況（西から） 78
PL.4	1. SX02断面（北西から）	2. SX03断面（北東から） 79
PL.5	1. SX04窓体（西から）	2. SX04窓体（南西から） 80
PL.6	1. SX04北半縦断土層（東から）	2. SX04焚口横断土層（南から） 81
	3. T-20（南東から）	
PL.7	1. T-20・23調査前現況（東から）	2. T-20西壁（東から） 82
	3. T-20東壁（西から）	4. T-23（西から）
	5. T-23（南から）	6. T-23前庭部（南から）
PL.8	1. SX05（東から）	2. T-21（SX09）（南西から） 83
PL.9	1. T-21・22調査前現況（西から）	2. T-22（南から） 84
	3. T-21下位造成面（西から）	
PL.10	1. T-12・26調査前現況（東から）	2. T-12（SX06）（南から） 85
	3. SX06断面（南から）	
PL.11	1. T-26（南から）	2. T-26東壁（南東から） 86
	3. T-26前庭部（南から）	
PL.12	1. T-25調査前現況（東から）	2. SX07北半縦断土層（西から） 87
	3. SX07窓体内検出状況（南から）	
PL.13	1. SX07窓体内検出状況（西から）	2. SX07瓦出土状況（西から） 88
	3. SX07「伊貴作瓦」検出状況（南から）	
PL.14	1. T-25物原（SX08）検出状況（西から） 89
	2. T-25物原（SX08）検出状況（南から）	
	3. T-25物原（SX08）上面土層（西から）	
	4. T-25物原下面土層（南東から）	
	5. T-25物原（SX08）「今行」瓦（南から）	
	6. T-25物原（SX08）軒丸瓦当（南東から）	
PL.15	出土遺物.1 90
PL.16	出土遺物.2 91

I. はじめに

1. 第2次調査に至る経緯と経過

平成7年（1995年）11月に西区農林水産局西農業土木課（当時）より西区生の松原4丁目に位置する斜ヶ浦池の公園整備事業に伴い、瓦窯跡を施設として取り込んだ整備をするための資料提出の依頼があった。斜ヶ浦瓦窯跡は昭和47年（1972年）の宅地造成に伴って1次調査が行われたが、その後の宅地化により窯の位置なども不明になっていたため後日確認調査を行うこととなった。平成8年3月に一部確認調査を行ったが十分な成果を得ることができなかつたため、秋口以降に池の水を抜いて再度確認調査を行うこととなり、平成8年11月7日から、12月27日にかけて調査をおこなった。

2次調査の調査対象地は斜ヶ浦池の北側に位置する下山門西公園に接した堤防から湖底にかけての部分と池南西側に岬状に張り出す生の松原縁地に面した湖底部分の2カ所である。当初の工程ではまず湖底部分のトレンチ調査から始める予定であったが、湖底の泥がなかなか乾かないため最初の4日間は池周囲の踏査を行い、その後公園内のトレンチ調査、その後湖底のトレンチ調査を行った。踏査ではパンケース15箱の遺物を採取した。昭和28年に故高野孤鹿氏が瓦を採取したのは池の西～南西側と考えられるが、踏査時には岸はコンクリートブロックで護岸され、池の底も泥で厚く覆われていたため、遺物の採取はできなかった。踏査時の遺物のほとんどは池東側の堤防部分で採取したものである。Fig66の367-368の軒丸・軒平瓦なども堤に半分刺さった状態で発見した。堤を築くための採土時に破壊された窯の遺物と思われる。トレンチは下山門西公園側に18本（T-1～18）、公園下の湖底に1本（T-19）、生の松原縁地側湖底に4本（T-A～D）のトレンチを設定した結果、下山門西公園側に設定したトレンチで7基の瓦窯を確認した。それ以外にT-18では瓦窯から掘き出した焼土が厚さ2m近く堆積しており、その下の旧表土下で1基の炉を確認した。生の松原第2団地側に多くの窯が存在したと考えられる。公園下のトレンチ（T-19）は軟弱な泥が厚く堆積しており、わずかな面積しか調査できなかった。生の松原縁地側のトレンチは岬状の尾根延長上のA・Bのトレンチで直下で花崗岩の岩盤に達したが造構・遺物などは確認できなかった。尾根先端は大規模な削平をうけており堤防築造時に削平された可能性が高いと思われる。C・Dトレンチは突出部の北岸に沿って設定した。Dトレンチは湧水が激しく途中で放棄せざるを得なかつたが、掘り下げ中に瓦片と鉄滓が出土した。トレンチは池の周囲が柵で囲まれていることや高低差があるため、重機等の機械を入れることができずすべて手掘りで行った。

2. 第2次調査の組織

8年度 【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 町田英俊（当時）

【調査総括】文化財部長 平塚克則（当時） 埋蔵文化財課課長 荒巻輝勝（当時）

埋蔵文化財課第1係長 横山邦嗣（当時）

【調査庶務】埋蔵文化財課第1係 小森彰（当時）

【調査担当】埋蔵文化財課第1係 屋山洋（当時）

【発掘作業】坂口雅彦 坂口和子 坂口加代子 柴田勝子 柴田春代

土斐崎初栄 原幸子 平井和子 掘タケ子 宮原邦江

3. 第3次調査に至る経緯と経過

第3次調査は、前年の第2次調査の成果をうけ、平成9年、斜ヶ浦池の整備工事で水位が低下する冬期に確認調査を実施することとし、今回は第2次調査で主に堰堤北側で確認された7基の窯跡群の、南斜面への広がりの確認と、窯構造の確認を目的に計画された。

平成9年12月18日、窯構造の確認を遺存状態が良好と判断された中央部のSX04と東端のSX07に定め、南斜面への広がりの確認を西からSX06、05、04、01、07の延長線上に前回より幅を1.5m以上に広げたグリッドを6箇所設定し、人力での下草刈り、掘削を開始した。調査は国庫補助金を適用して実施した。

確認調査であるため、将来の整備を期して遺構掘削、遺物の取り上げは最低限にとどめ、現況保存を優先とし、窯体の断ち割りは実施しておらず、瓦の出土状況の良好なものは大部分を検出までにとどめている。

また、調査成果の目処がついた段階で、普及啓発活動の一環として、平成10年3月6日現地で調査成果の記者発表を実施している。

調査の結果、7基の窯が広範囲に広がり全体の窯構造が推定できるほど遺存状況が良好であること、窯の構造・瓦の文様から、平安時代の大宰府周辺の窯跡群との密接な関係が伺われること、表採ではなく、窯内部から出土した瓦が鴻臚館跡の発掘調査出土の瓦と同種であり、鴻臚館使用の瓦を焼成していた可能性が高まつたこと、10世紀後半の土器をはさんで、上下の2時期に瓦の編年が可能であることなどが確認された。この範囲と重要な成果から、協議の結果、窯跡部分での公園整備は中止し、窯跡部分は現状で保存することとなり、所管も都市整備局・土木局・教育委員会の三者から教育委員会に一元化されることとなった。よって遺構は慎重に埋め戻して保存し、将来に託されることとなり、発掘調査終了後は、窯体と瓦出土状態は上面をビニールで保護し、マサ土で丁寧に埋め戻しを行い、確認調査は平成10年3月25日に全ての工程を終了した。

4. 第3次調査の組織

9年度 【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 町田英俊（当時）

【調査総括】文化財部長 平塚克則（当時） 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝（当時）
調査第1係長 二宮忠司（当時）

【調査庶務】文化財整備課管理係 木原淳二（当時）

【発掘調査】埋蔵文化財課第1係 加藤良彦（当時）

【発掘作業】加島定次郎 徳永洋二郎 平野義光 阿比留治 坂本隆二 西畠盛行
永井大志 大塚拓史 辻節子 三谷朗子 杉村文子 吉岡員代

25年度 【整理主体】福岡市教育委員会 教育長 酒井龍彦

【整理総括】経済観光文化局文化財部長 西島裕二 埋蔵文化財調査課長 宮井善朗
調査第1係長 常松幹雄

【整理庶務】埋蔵文化財審査課管理係 横田忍

【整理担当】埋蔵文化財審査課事前審査係長 加藤良彦

【整理作業】国武真理子

II. 調査区の立地と環境

本調査区は、早良平野の西際、福岡市の都心部より西へ6km、博多湾岸より0.7kmの地点、今宿平野と東西に分かつ背振山から飯盛山・叶岳・長垂山へと連なる花崗岩の山塊から、平野に向かっていくつも延びる小支丘間に築堤された斜ヶ浦池の北側斜面に立地する。現況は標高で10~14mを測り、調査区は北側を昭和47年の大規模造成で1.5m程切り下げられ、南側は明治以前の溜池築堤時に5m程大規模に切り下げられ、東西約100m幅10m程の堤となっている。

周辺の歴史を概観すると、旧石器・縄文早期の遺跡は山麓部と洪積台地上・海岸古砂丘上に点在し、羽根戸原遺跡・吉武遺跡群・有田遺跡群でナイフ形石器・細石器が、姪浜遺跡で剥片が、羽根戸遺跡・広石遺跡で土壙・集石炉・押型文・撲糸文土器等が検出されている。前期は沖積地の微高地まで遺跡が進出し、四箇遺跡・湯納遺跡・田村遺跡で竪穴・ドングリピット・轟B式土器・曾畠式土器等が検出されている。中・後期では吉武遺跡群でドングリピット50数基、有田遺跡群で貯蔵穴様ピット群60数基、四箇遺跡で埋甕・竪穴・竪穴住居・特殊泥炭（堅果類果皮の多量堆積・ヒヨウタン・リョクトウ出土）が出土。突蒂文から板付式土器を出土する時期には海岸平野部で遺跡が増大し、有田遺跡群・十郎川遺跡・拾六町ツイジ遺跡・橋本一丁田遺跡・福重稻木遺跡・石丸古川遺跡等で初期農耕遺跡が分布する。有田遺跡群では大規模な環濠が出現し、藤崎遺跡では土壙墓群がみられる。前期後半からは内陸平野部にも集落が展開し、吉武遺跡群では多数の青銅器を副葬した木棺・甕棺墓群が検出され、中期には内陸奥部まで広がる。吉武遺跡群は拠点集落としてさらに発展し、甕棺墓は1000基以上、墳丘墓も出現する。東入部遺跡・岸田遺跡でも青銅器の大量副葬が始まる。海岸砂丘上には生ノ松原遺跡・姪浜遺跡・藤崎遺跡・西新町遺跡で半島系土器・鉄器・ガラスなど広範な交流をしめす集落と墓群が広がる。終末から古墳時代前期にかけては野方中原・野方塚原・野方勘進原・羽根戸南・飯盛谷・宮ノ前C・重留・五島山・藤崎・西新町・有田の各遺跡で集落・石棺墓・方形周溝墓・墳丘墓・前方後円墳等が検出され、半島系土器・後漢鏡・三角縁鏡などが出土している。中期では吉武遺跡群で円墳20数基・帆立貝式古墳・方墳・大形建物群と集落が出現し多量の半島系遺物が検出され、重留では70m級の前方後円墳（拌塚－重留1号墳）・方墳（重留2号墳）が、梅林では27mの小形の前方後円墳が築造されている。後期に金武・羽根戸南・羽根戸・野方・広石・コノリ・高崎・草場古墳群等、平野西山麓部でにわかに古墳群が増大する。鉄滓副葬が多数行われ、広石南古墳群では鍛冶道具が副葬されている。また、広石遺跡では7世紀にかけ桁行4間以上の大型建物9棟を含む26棟・竪穴住居42棟の大規模集落が出現している。古代では海岸部の生ノ松原遺跡で瓦の集積が、本遺跡から600m程南東には塔芯礎が残る城の原廃寺が、吉武遺跡群では方形区画溝内から一部本遺跡の瓦と思われる瓦葺建物が出現する。中世には海岸部の興雲寺山上に九州探題渋川氏の城址、愛宕山には鎮西探題、海岸部の生ノ松原・西新には元寇防里があり、中世史上の重要な遺跡が分布する。近世には海岸砂丘の姪浜遺跡に、長崎・平戸へと通じる唐津街道の筑前二十一宿の一つに数えられ、宿代官が置かれた。また、茶屋・本陣と称した藩主の別館が置かれ、お茶屋奉行が置かれている。製塙も盛んで、元禄年間には塙浜奉行が置かれ、慶長年間には酒造が始まり、芦屋から鈎物師が移り住んで鋳造業も始まる、漁業・廻船・製塙・産業・交通で栄えた地城であった。

平安時代の瓦を出土する本遺跡との関連遺跡としては（Fig.1）、西から元岡・桑原遺跡群瓦窯跡（2）、女原瓦窯跡（3）、本遺跡（1）、生ノ松原遺跡（4）、城の原廃寺（5）、吉武遺跡群（6）、鴻臚館跡（7）、博多遺跡群（8）、箱崎遺跡（9）、香椎宮・香椎B遺跡（10）、新宮町相島沖（11）がある。

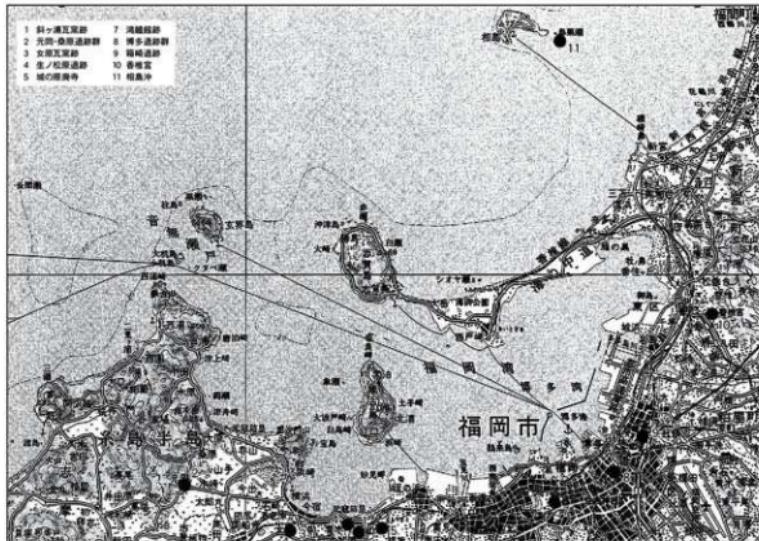


Fig.1 関連遺跡分布図 (1/200,000)

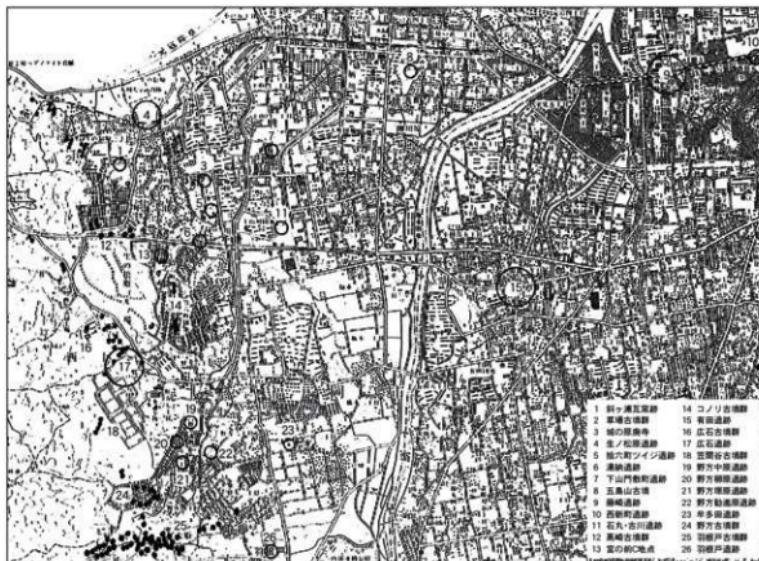


Fig.2 周辺遺跡分布図 (1/40,000)

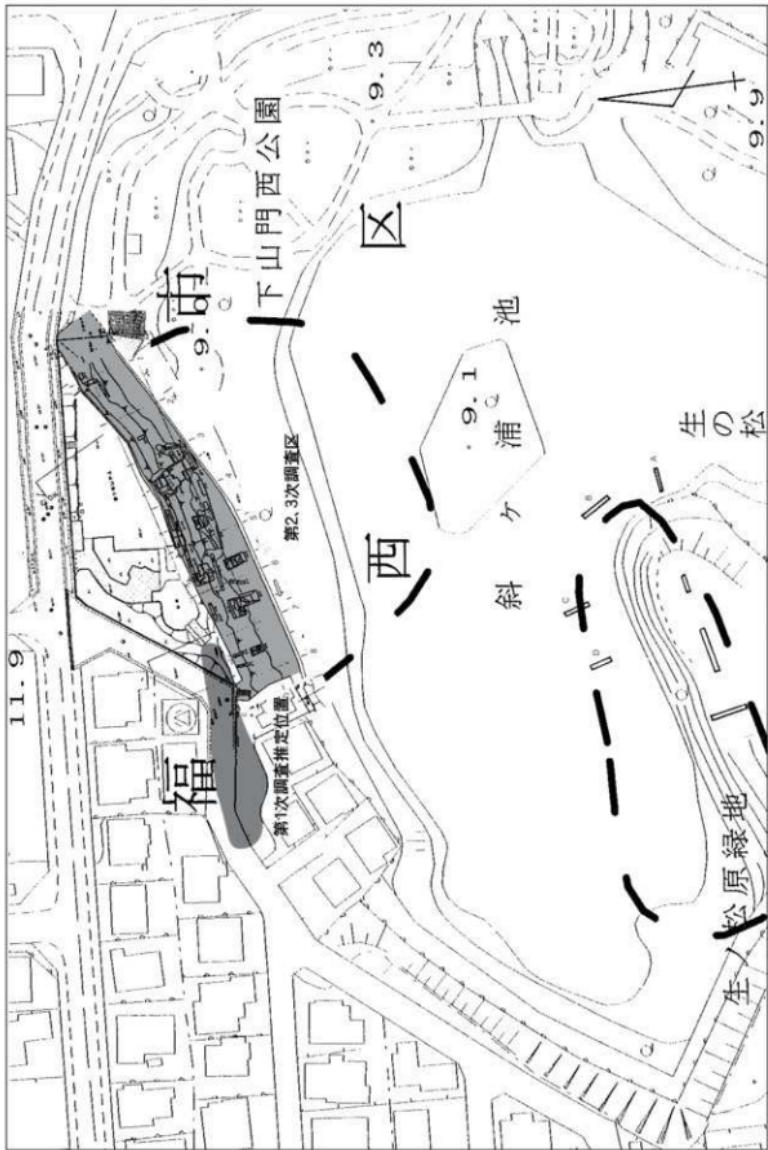


Fig.3 調査区位置図 (1/1,000)

III. 調査・研究の歴史

斜ヶ浦瓦窯跡の瓦を最初にとりあげたのは、故九州大学名誉教授中山平次郎博士である。大正4年（1915）3月発行の考古学雑誌第5巻第7号に「貞觀年間設置の警固所の所在」、同8月発行の同巻第12号に「警の一文字を有せる古瓦片」と題して、早良郡宍戸村（現福岡市）大字十六町字湯納で表採された「警」字銘瓦を取り上げ、「警固所」の所在に関して論考されている。この現資料は故高野弧鹿氏により旧福岡市歴史資料館（現福岡市博物館）に寄贈された資料にある（『福岡市博物館研究紀要第一号「福岡県新宮町相島沖採集の警固銘瓦』』吉武学2001年）。

ついで昭和4（1929）年9月故福岡女子大学玉泉大梁教授により同村斜ヶ浦池畔で表採され玉泉館に保管されていた「警固」銘瓦を契機に、高野氏が昭和27年（1952）11月と同28年（1953）1月斜ヶ浦池畔で3点の「警」「警固」銘瓦を表採され、論考されている（『「警」および「警固」の銘ある古瓦について』昭和28年1月・『草場古墳群・斜ヶ浦瓦窯址』1974に再録）。これも氏により旧福岡市歴史資料館寄贈資料にある（前掲書・吉武）。氏は池の西岸中央に突き出た小丘（斜ヶ浦製鉄遺跡）の南北池畔でこれらを表採、堤防修理のため減水した池を一周して、土手・池畔の至る所に古瓦片が点在し、西南寄りに最も多く、次に北、東の順で南岸にはほとんど見かけないとされている。また、小丘南の土取り跡でおびただしい古瓦片を見いだし、北岸中央東寄りで窯跡らしき古瓦屑と斜面の上下に三箇の煙道に似た小穴を見いだし融着した古瓦、灰被りの古瓦片を探集したことから、従来の「同出土地附近に警固所関係建造物が曾てあった」との説から「出土地において焼成された」と、初めて瓦窯跡であることを指摘している。

昭和47年（1972）7月10日から同年8月13日にわたり、池北側の大規模造成に伴って緊急発掘調査が本市文化課（当時）により実施され、これが第1次調査となる（前掲書1974松村）。調査時切り土は既に終了し、池傾斜面をわずかに残す状態で、窯跡の存否が危ぶまれ、確認調査が実施された。当時は「警」「警固」「伊貴作瓦」銘の瓦を出土し、平和台（鴻臚館）出土瓦との類似が知られており、当時高野氏がご存命で、調査で確認された窯が27年時の2号窯に相当することが確認されている。調査は地形に沿ってA（1.5×25m）・B（1.5×15m）2本のトレンチを設定し、Aで幅181cm長さ245cm+α傾斜43°の窯焼成室端部を検出、Bでは瓦集積を検出している。瓦は外区を省いた偏行唐草軒平瓦、3Ac類斜格子叩、0類繩目叩、6f斜格子にJ字文瓦を出土している。

昭和54年（1979）、寺島孝一氏の『日本古代学論集「平安京出土の北九州系文字瓦について』』の論考で、「警固」銘瓦が本遺跡と貞觀18年（876）再建の平安京朝堂院のみの出土であり、斜ヶ浦から平安京まで運ばれたものとし、「警固所」として大宰府鴻臚館周辺に所在を想定されながら、1点も出土しない現況に一石を投じることとなった。

平成9年（1997）、福岡市博物館に福岡県新宮町相島南東約500mの海底から、底引き網漁で引き上げられ寄贈された瓦の中にはほぼ完形の「警固」銘平瓦が確認され、3箇所目の出土地となった（前掲書・吉武）。その調査で銘の叩き上部に四つ巴文状の渦巻文スタンプがあることが新たに確認され、側面に截面と押し割りによる破面を有し、厚みが狭・広両端で著しく異なることから、桶巻作りによるとされた。考察として、鴻臚館跡で現在調査されている範囲には「警固所」が含まれていない、もしくは、この瓦が「警固所」を含む鴻臚館に供給するために作られた瓦ではなく、「警固」銘は「伊貴作瓦」と同様、生産者集団や産地に由来する名称で、主に都に運ばれたとしている。

平成14年、西区元岡での九州大学移転事業に伴う緊急発掘調査で平安期の瓦窯が検出された（『元岡・桑原遺跡群17』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1103集 上角智希2010）。この考察の

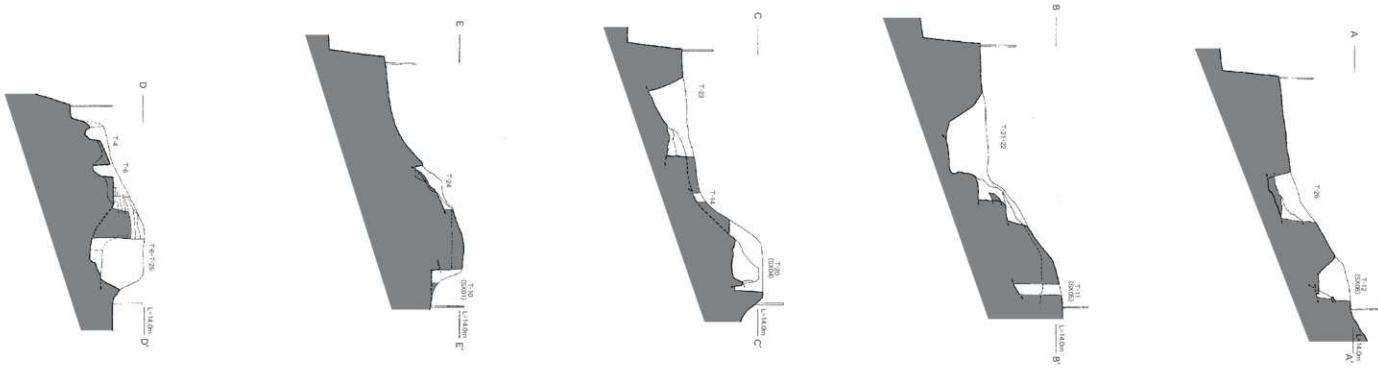
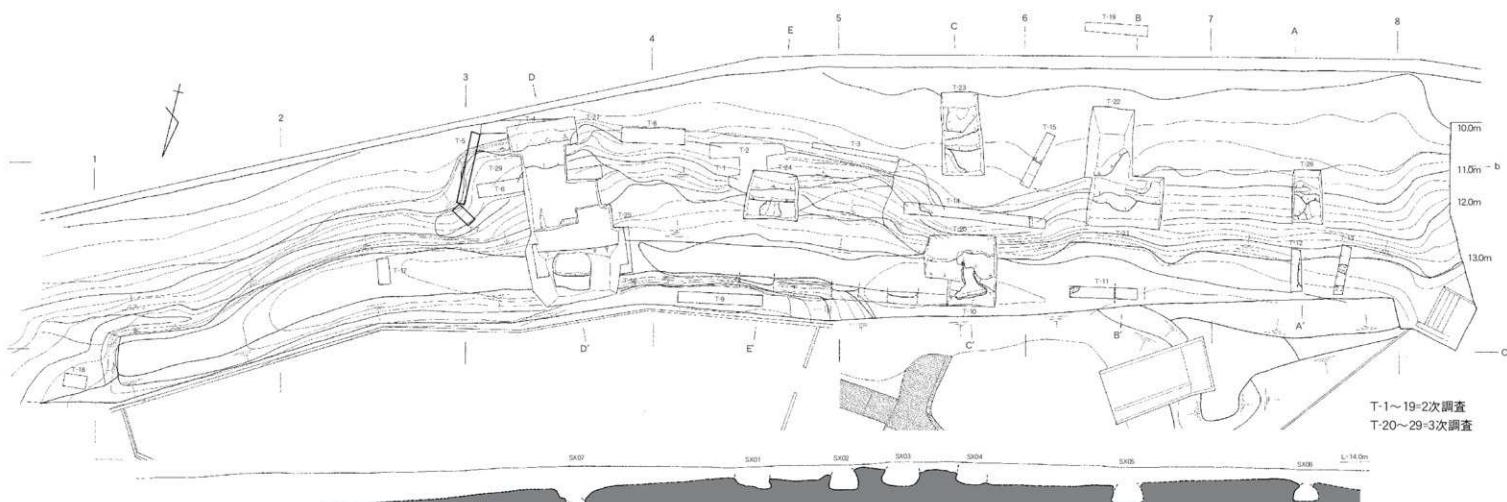


Fig.4 調査区全体図 (1/200)

0 10m

中で平安時代瓦の参考資料として斜ヶ浦瓦窯跡第2・3次調査（報文中では第3・4次調査）の資料を紹介し考察している。これらはすべて円筒桶巻作りで、瓦側面の片方が截面のみ、もう一方が切れ目と破面であることから、瓦円筒を二分した状態で乾燥後分割したとしている。また、「警固」銘瓦破片を合成して叩き板原体を復元し、上端に溝巻文を配し中央高さ7cmの枠内に「警固」銘、この上下に斜格子を配し、下側が縦長の菱形を呈する幅6.0長さ25cm以上としている。平安京のものは叩きが重ならず、斜ヶ浦・相島とは異なり、叩き板または工人の移動も考慮する必要を説いている。さらに、単格子で四角の中に「×」を施したもの平安京でも出土していることを指摘している。

平成24年（2013）、常松幹雄は『季刊考古学123号「相島一福岡間相島海底引き揚げの瓦についてー』』の論考で、吉武と同じく相島沖で近年揚がった丸瓦と、これを契機に2011年アジア水中考古学研究所が実施した海底探査で採集された平瓦を検討し、前述の高野孤鹿資料と同種の（上角が平安京出土と同種と指摘した）単格子で四角の中に「×」を施した瓦であることを確認。「警固」銘瓦とともにこの種の瓦が斜ヶ浦瓦窯から平安京に運ばれたことを更に裏付けた。

IV. 調査の記録

1. 調査の概要

第2次調査では、昭和27年高野孤鹿氏の踏査や昭和47年第1次調査で確認された窯跡の分布範囲を確認するため、窯体が確認された池北斜面と岸に19本（T-1～T-19）、高野氏の踏査で瓦散布の中心地とされた池西岸の、中央小丘陵の北岸に4本（T-A～T-D）のトレーニングを設定し確認調査を実施した（Fig.3・4）。この小丘陵は斜ヶ浦製鉄遺跡に該当し、昭和62年（1987）に土砂投棄を契機に試掘を実施、3本のトレーニングを入れたが、削平後の池の土砂による1～3mに及ぶ盛土中から少量の須恵器・土師器・瓦が検出されたのみで、遺構は検出されていない。北・西岸は削平が著しく、トレーニング内はその上に1m程のシルト、さらに礫・ヘドロが30～50cm堆積し、遺構・遺物とも検出されていない。北斜面は堰堤に沿ってトレーニングを配置し、堰堤の西寄りに窯跡7基（SX01～07・Fig.4の横断面図は各トレーニングを繋いだ概念図である）、瓦溜集積1箇所、炉を1基、柱穴を検出した。また、踏査により、池南斜面で瓦を含む20～50cmの包含層を確認している。遺物はコンテナケース25箱分検出し、SX02・05の窯体内から「警固」銘瓦を検出、窯跡SX07と2m程上方の瓦集積との間に10世紀後半の土器を検出し、窯の時期をしづらりこめる資料を得ている。

第3次調査は、第2次調査の成果をうけ、平成9年、第2次調査で堰堤北側で確認された7基の窯跡群の、南斜面への広がりの確認と、窯構造の確認を目的に実施した。窯構造の確認は遺存状態が良好と判断された中央部のSX04と東端のSX07に定め、南斜面への広がりの確認を西からSX06、05、04、01、07の延長線上に前回より幅を1.5m以上に広げたグリッドを6箇所設定し（T-20～29）、実施した。結果、前庭部の地山成形面の確認と、窯体が堰堤内に焚口・燃焼部が取まり焼成部の大半は削平していることを確認、窯構造が大宰府来木窯に類似する有階無段式登窯で、窯体SX04出土の208C類14弁丸弁軒丸瓦が来木窯・安楽寺・香椎宮出土品と同種であることを確認した。また、2次調査でのSX07内から「伊賀作瓦」銘瓦を、上部の瓦集積から「今行」銘瓦を検出し、鴻臚館供出の瓦の前後関係をとらえることができた。遺物はコンテナケース15箱分である。

以下、窯SX毎に詳述する。

2. SX01 (T-10・24・1・2) の調査 (Fig.5~9 PL-2)

SX01はT-10の東端、SX02~04とともに、北側宅地造成時の崖面で確認された。花崗岩バイ欄の岩盤(54)・バイ欄土の堆積層(52・53)の地山と、東側の客土層(12~29)にまたがって幅1.75m、残存で深さ40cm程掘削し上部は削平される。床の一部と壁に焼土ブロック混じりの粘土を張っているが(16・17・37・46)、焼成の痕跡はない。内部に瓦・焼土粒を含む層(15・19・20・21・44)が堆積し、窯築造途中で廃棄されたものか、窯前庭部と思われる。29層下には以前の造成面がある。

出土遺物 (Fig.6) 1~3は平瓦。すべて凹面は布目压痕。1は上角が「不規則な斜格子で上半は二重格子、下半は単格子。中央（境界）に四角の枠を作り」としたもので、単格子内に「十」「J」の記号がある。側面は截面で厚13mm程で薄い。須恵質。2は3Abの中程度の単格子。厚21mm。須恵質。3は3Ba1の特大の二重格子。厚18mm。須恵質。4は3Abの丸瓦。厚18mmで灰白色軟質。5は3Acの大きな単格子丸瓦。厚18mmで灰白色土師質。6は須恵器坏蓋で口径15cm。口縁の返りはなく、青灰色で焼成良好。

T-24はSX01の下方3m程、T-1・2の上位に東西2.8南北2.5mの規模で設置した (Fig.7)。今回の調査の基本層序は1-表土、2-宅地造成・擁壁構築時の客土、3-近世築堤時掘削後の堆積及び旧表土、7-地山となっている。グリッドの南半は築堤時に削平され失われている。遺存部分では地山の5f層を掘削して平坦面を作り出し、SX01の延長線上に幅85深さ15cm程の浅い溝を設けている。床面レベルは平坦面が15cm程SX01床面より高くなるが、これはSX07の前庭部が高くなるものと共通する。平坦面上の堆積層から瓦片が若干出土した。T-1・2はこの下位に位置し、T-1はSX01から4m程下方で、東西3m幅80cm程で、西半部がT-24と重なる。80cm程掘削。T-2はこの下方1m程に東西4m幅80cm程のトレンチを設定して30cm程掘削している。T-2からはやや多く瓦が出土して包含層が遺存しており、築堤時の掘削は階段状に行われている。

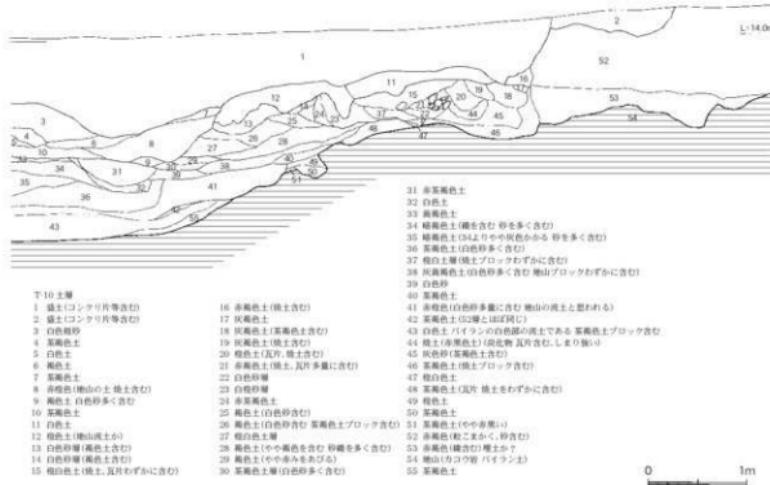


Fig.5 SX01 (T-10) 土壌断面図 (1/50)

出土遺物 (Fig. 8) 7～13はT-24下層（5層）出土。7～10は平瓦。7は1類の不規則な平行格子。厚21mmで側は截面。灰色で軟質。8は3Acで厚14mm、褐色で軟質。9・10は3Ba1で、9は厚18mm。側は截面。青灰色で須恵質。10は厚12mm、灰赤色で土師質。11・12は丸瓦。11は1類で厚21mm。側は截面。灰色で須恵質。12は3Ac。厚18mmで灰色須恵質。13は熨斗瓦で上面はナデ。厚16mmで灰白土師質。14・15は上層（4層）出土。14は3Acの平瓦。厚15mmで灰白色土師質。15は須恵器坏。底径8.2cmで回転ヘラ切り。灰白色。16・17はT-1出土の平瓦。16は小さな格子目3Aa2で、側は内側からの切目と破面。厚17mmで暗青灰色須恵質。17は3Ba1で側は截面。黄灰色で軟質。18～28はT-2出土。18は3Aa2の小さな單格子の丸瓦。側は内側からの切目と破面。厚21mmで灰色須恵質。19～28は平瓦。19は3Abの單格子。四面端部から2cmはヘラナデ。厚17mm。灰色で須恵質。20は3Aa2で厚17mm。側は截面。灰色で須恵質。21～25は3Ac。21は厚19mm。側は截面。灰色で須恵質。22は厚16mm。側は截面。灰色で須恵質。23は厚15mm。灰色で須恵質。焼け歪む。24は側は内側からの切目と破面。厚12mmで灰色須恵質。25は厚12mmで灰色須恵質。26は内外面にナナメのハケ状のケズリ痕。7・2類とする。側は截面。厚20mm、灰白で軟質。27はナデの無文7類。厚12mm灰色で

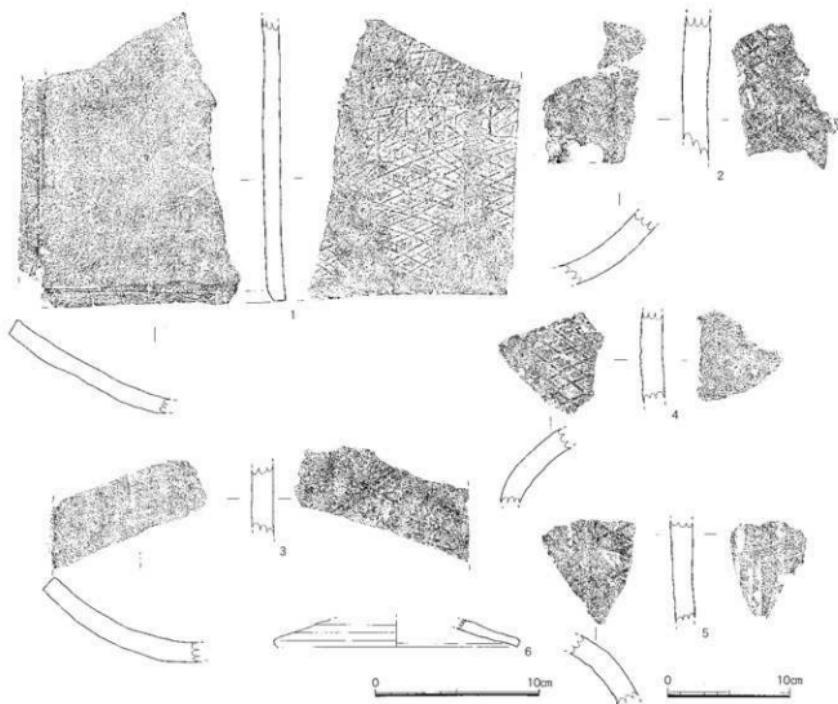


Fig.6 SX01出土遺物実測図 (1/4・6=1/3)

やや緩く丹塗りが残る。28は6F類の不整斜格子の端部近くに鉤状の文様大小2本を上下に施す。厚20mm、灰色で軟質。

- T-24上層
- 1 黒灰色崩解土(表土)
- 2a 砂含泥粘土質土
- 2b 砂含泥粘土質砂
- 3b 塗装褐色崩解土(板厚～5mm)の小縫を少量含む
- 4c 非粘性土(少少粘質)
- 5a 塗装灰褐色砂質土(板厚～5mm)の小縫を少量含む、やや紺碧
- 5b 塗装灰褐色砂質土(板厚～5mm)の小縫を少量含む
- 5c 塗装灰褐色砂質土(板厚～5mm)の小縫を少量含む
- 5d 塗装灰褐色砂質土(板厚～5mm)の小縫を若干含む、非粘土を含む
- 5e 塗装灰褐色砂質土(板厚～5mm)の小縫を少量含む、瓦引含む
- 5f 非粘性粘質土(板厚～5mm)の小縫を少含む、斑点を少量含む
- 6a 塗装灰褐色砂質土(板厚～5mm)の小縫を少含む、斑点を少含む
- 6b 塗装灰褐色砂質土(板厚～5cm)の縫をやや多く含む
- 6c 黄灰色厚砂質土(板厚～5cm)の縫をやや多く含む

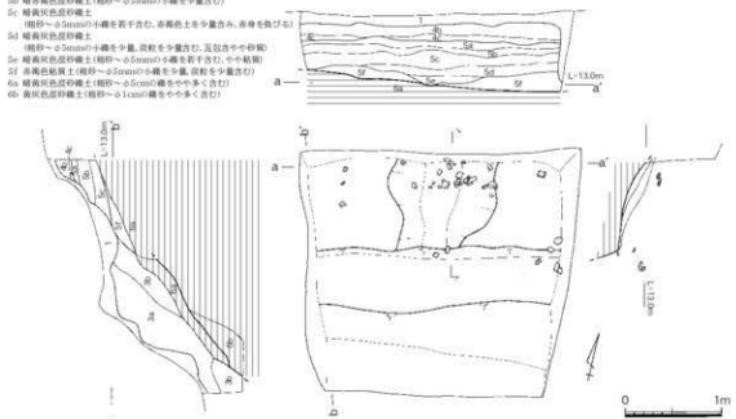


Fig.7 SX01 (T-24) 前庭部実測図 (1/50)

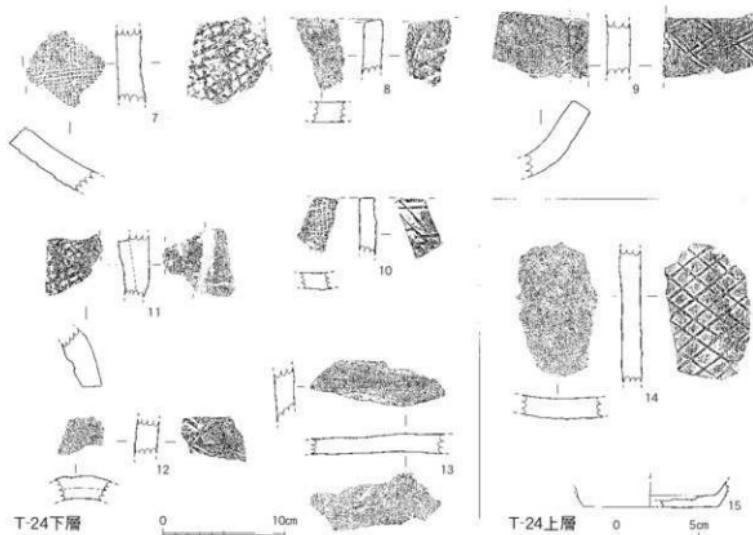


Fig.8 SX01周辺出土遺物実測図.1 (1/4・15=1/3)

3. SX02・03 (T-10・3) の調査 (Fig.10~19 PL-3・4)

SX02はT-10の中央寄り、SX01の西4m程、同じく北側宅地造成時の崖面で断面を確認した。花崗岩パイ欄の岩盤・パイ欄土の堆積層の地山に掘り込まれる。平坦な床面から70cm程壁が若干内傾して立ち上がり、ドーム状の天井に連なるが、天井部の大部分を削平されている。最大径で152cm残存高102cmを測る。壁断面は被熱で最大25cm赤化し、このうち15cm程が還元化される。床に少量、薄い間層を挟んで高さ30cm程多量の瓦が出土する。さらに間層を挟んで少量の瓦が出土する。多量の瓦は壁状をなしており、隙壁の可能性も考えられた。瓦が2次的な被熱を受けておらず、廃絶後の

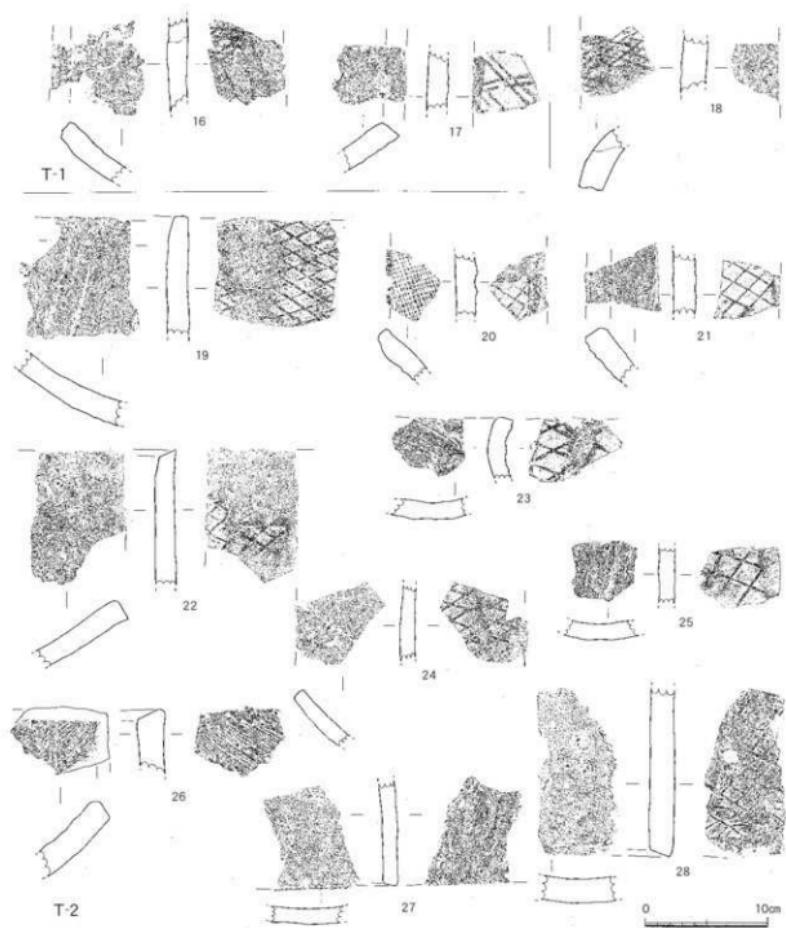


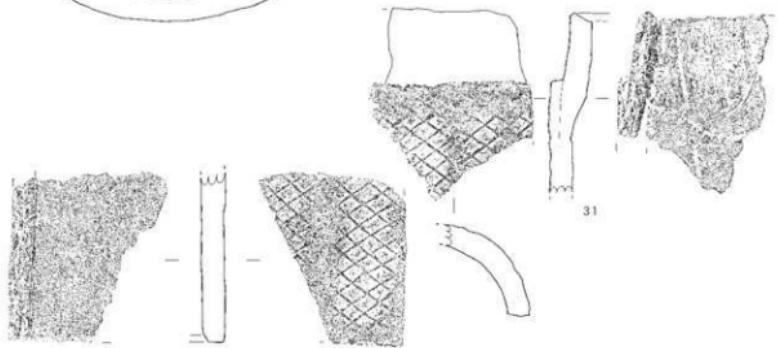
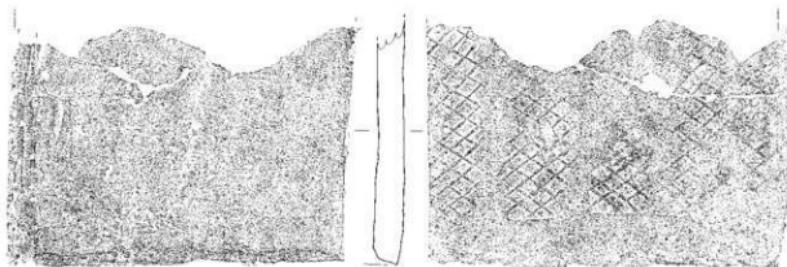
Fig.9 SX01周辺出土遺物実測図.2 (1/4)

棄損品の大量廃棄と考えられる。この窯断面だけで674片の出土をみている。

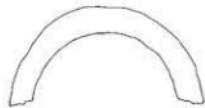
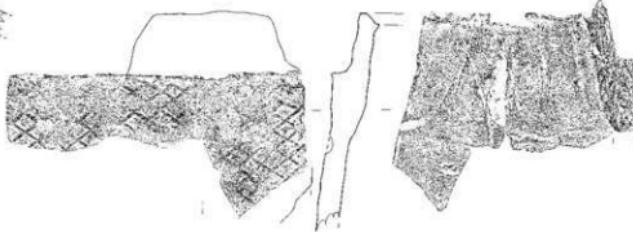
出土遺物 (Fig.11~17) 29~32は3Ab (Fig.11)。29・30は平瓦。29は狭端幅26.5長6.7cm厚20mm。端部から4cm程空け幅6cm程の原体で左回りに叩く。凹面端部1cm程はヘラナデ。凹面右は截面、左は内切目に破面。灰色で須恵質。30は端部まで叩き、側は内切目に破面。厚20mm、暗青灰色で須恵質。31・32は丸瓦。31は段部を叩き後ヨコナデ。凹面段部附近に布合せ目が横に付く。側は内切目に破面。厚20mm。暗青灰色で須恵質。32は段径16高8.8cm厚21mm。左側は外切目に破面、右側は内切目に破面。暗青灰色で須恵質。33は3Acの平瓦 (Fig.12)。叩きを一部帯状にナデ消し。側は截面。厚19mm。灰白色で軟質。34は幅6長23cm程の叩き原体の上半が3Abの正単格子、下半が3Acの平行に近い単格子の丸瓦。小片での文様分類を無意味とする。重ね部分をナデ消す。融着痕あり。凹面の布目は粗い。段長31.5cmで焼け歪む。厚22mm、両側で内切目に破面。青灰色で須恵質。35~37は3Ab2の平瓦 (Fig.13)。35は2段の格子目中央に3本の縦平行線。厚19mm。側は内切目に破面。青灰色で須恵質。36は上角・常松が指摘する平安京に運ばれた四角の枠内に「×」を施すもので幅6cm程の原体を左回りに叩く。厚20mm。側は内切目に破面。褐灰色で須恵質。37は間隔の不規則な単格子の中に「十」を施す。厚18mm。側は截面。灰色で須恵質。焼け歪む。38・39は3Abの丸瓦。38は格子目が漸次大きくなる。叩きの重ね部分をナデ消す。凹面に平行する紐状痕がある。厚20mm。側は内切目に破面。黒灰色で須恵質。39は叩きの大部分をナデ消す。厚18mm。側は内切目に破面。灰白色で土師質。40は3Ab2の丸瓦で、「L」字の枠内に「×」を施す幅5cm程の原体を左回りに叩く。厚18mm。側は内切目に破面。灰色で須恵質。41は1と同種の3Ab2+3Bb1の平瓦で平行する間隔の不規則な単格子の上に同様の二重格子を連ね境に四角の枠を施す。厚20mm。灰色で須恵質。42~45・106は上角が「上端に渦巻文を配し中央高さ7cmの枠内に「警固」銘、この上下に斜格子を配し、下側が縦長の菱形を呈する幅6.0長さ25cm以上の原体」とした3Ab2 (Fig.14)で、叩きは全て重なる。42・43は平瓦で、この「固」からの下半部。42は厚20mm。側は截面。灰色で土師質。43は内面に縦方向の紐状痕がある。厚14mmと薄め。灰白色で土師質。44・45・106は上端の渦巻文部。44・106は平瓦。44は端部下4cmから叩き端部はヨコナデ。凹面布目は粗い。厚15mm。側は内切目に破面。褐灰色で軟質。106は端部まで叩く。厚13mm。灰色で土師質。45は丸瓦。段部1.5cm下まで叩く。凹面は幅1cm間隔の縄糸の粗い布目で、4cm間隔で縦紐状痕がある。段部以上は絞り。側は内切目に破面。厚13mm。灰色で須恵質。46~49は3Ac。46・48・49は平瓦。46は幅6cm程の原体で端部から6cm上に叩き重ね部はナデ消す。厚17mm。側は外切目に破面。灰色で須恵質。48・49は端部まで叩き重ね部はナデ消し。48は端幅が狭い。厚17mm。灰色で須恵質。49は側は截面。厚18mm。青灰色で須恵質。47は歪んだ丸瓦か。下部と縦の一部をナデ消し。側は内切目に破面。厚20mm。暗青灰色で須恵質。50~55は特大の3Ac (Fig.15)。50・54は原体上部に平行線と対の鉤文様を施す3Ac2。50は平瓦。重ね部はナデ消し。側は截面。厚17mm。縦に大きく歪む。暗青灰色で須恵質。54は丸瓦。段際まで叩き際はヨコナデ。側は内切目に破面。厚20mm。暗



Fig.10 SX02・03 (T-10) 土層断面図 (1/50)

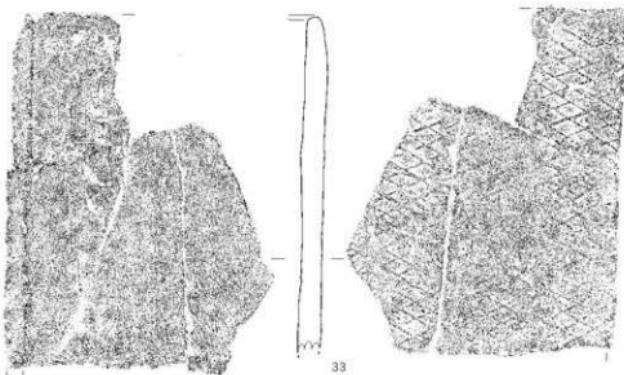


30

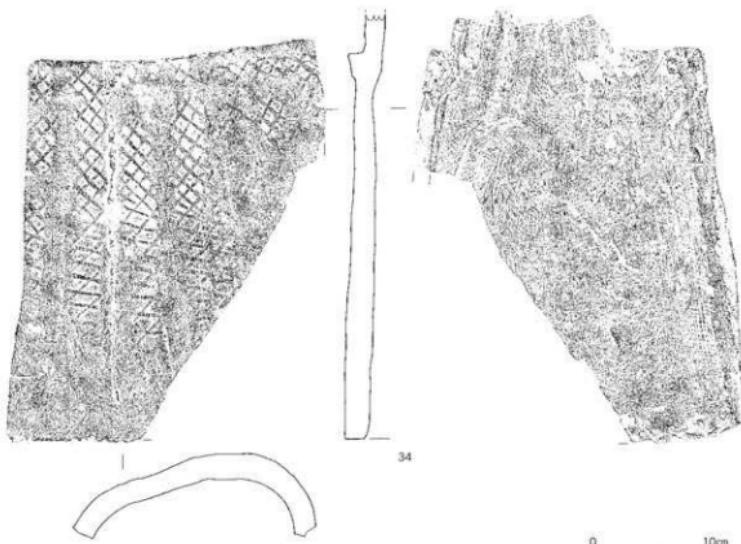


0 10cm

Fig.11 SX02出土遺物実測図.1 (1/4)



33



34

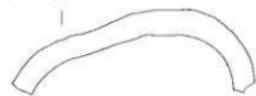


Fig.12 SX02出土遺物実測図.2 (1/4)

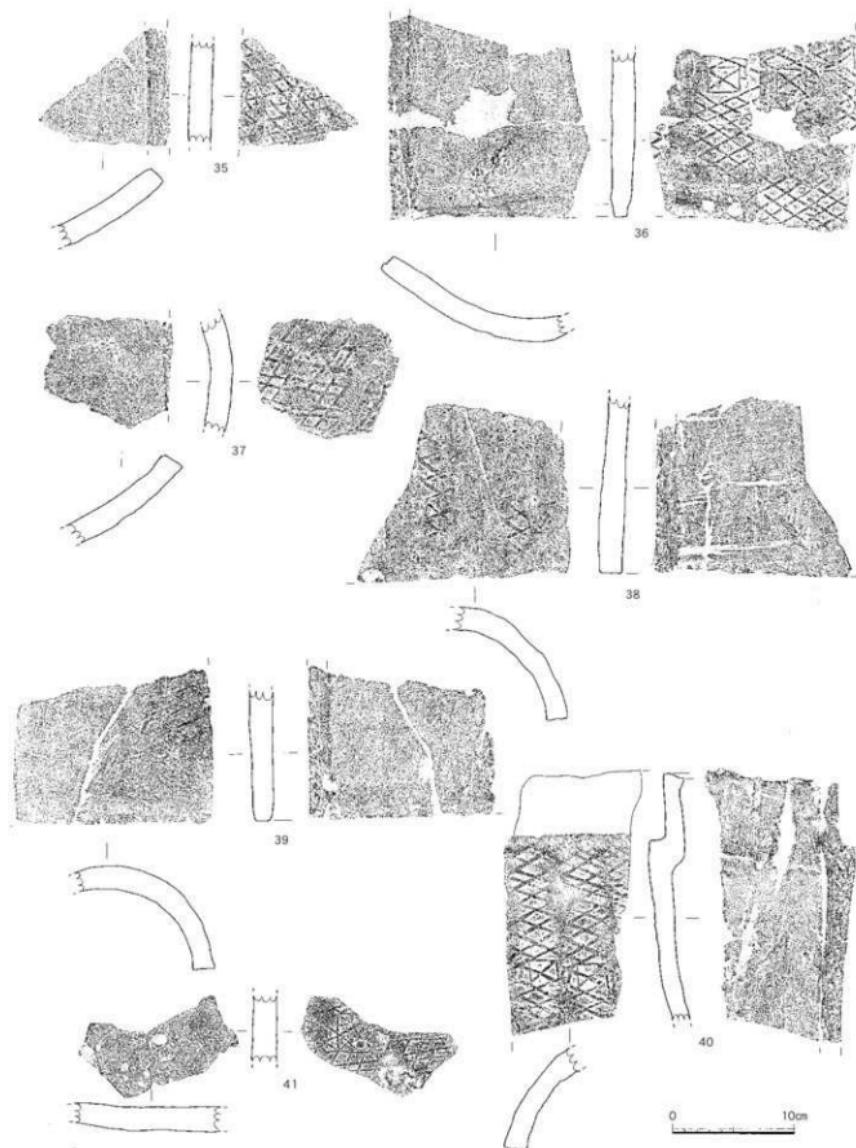


Fig.13 SX02出土遺物実測図.3 (1/4)

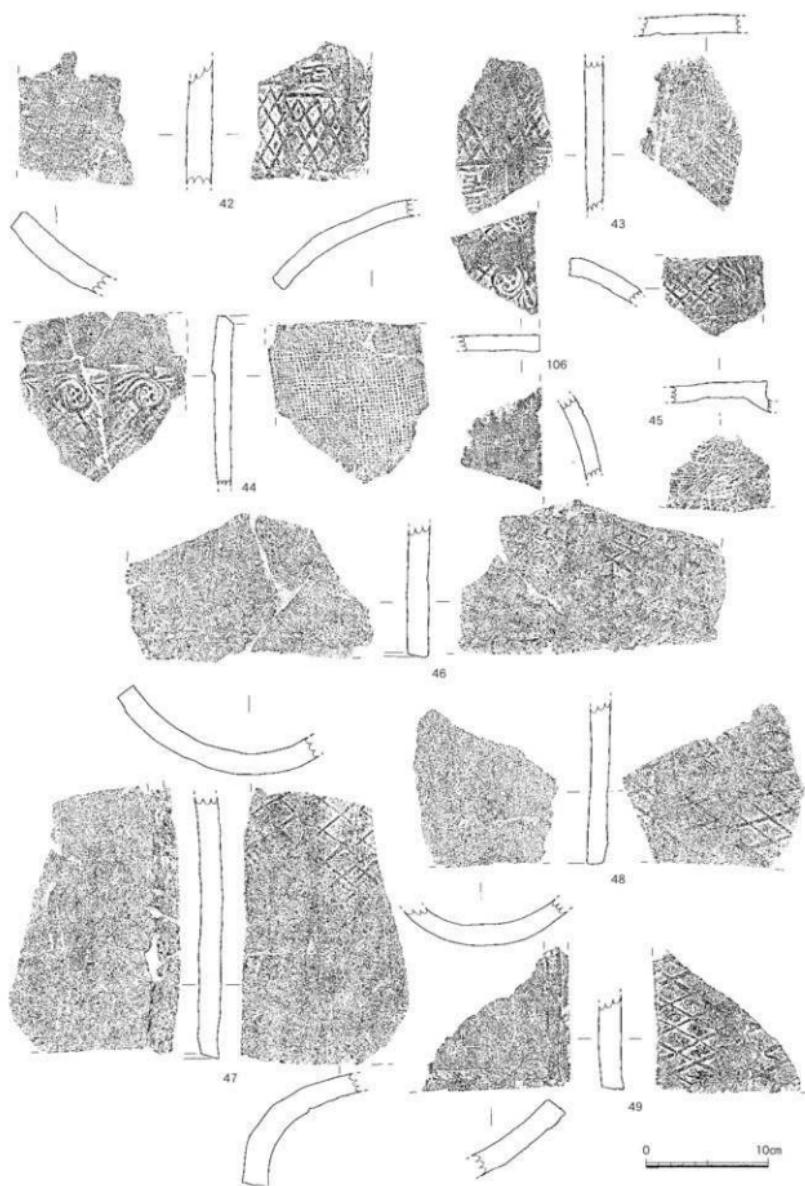


Fig.14 SX02 出土遺物実測図4 (1/4)

青灰色で須恵質。51・53は幅5cm程の原体に左上がりの格子2枚の中央に平行線1本を施す。51は側は内切目に破面。厚16mm。青灰色で須恵質。53は厚16mm。青灰色で須恵質。52は丸瓦で段部際まで叩き。側は内切目に破面。厚17mm。灰色で須恵質。55は丸瓦。下端から13cm程叩きをナデ消す。側は内切目に破面。厚18mm。灰色で須恵質。56～60は3Ac2 (Fig.16)。56・57は平瓦。56は端部下5.5cm程に間隔を空け幅6cm程の原体で叩き格子内に「*」を施す。側は截面。厚16mmで薄い。褐色で軟質。57は「十」を施す。厚21mm。黄橙色で軟質。58～60は丸瓦。58は「十」と「*」を上下に施文。側は截面。厚16mm。灰白色で軟質。60は「*」を施文。厚24mm。褐色で軟質。61～67は3B。61～63は3Ba1平瓦。61は端部まで叩き縦方向に部分的にナデ消す。側は截面。厚21mm。灰色で須恵質。62は端部の

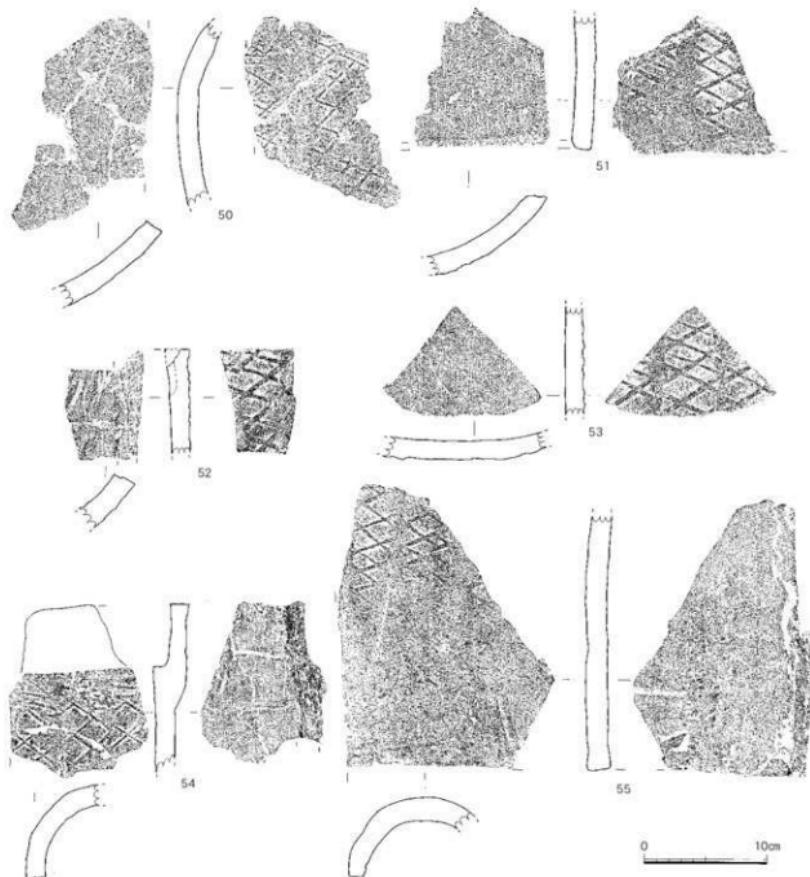


Fig.15 SX02出土遺物実測図.5 (1/4)

4cm下から幅6cm程の原体で叩き、重ね部はナデる。側は内切目に破面。厚23mm。暗青灰色で須恵質。63は端部の3cm下から同じ原体で叩きナデる。側は内切目に破面。厚21mm。凹面には目の異なる2種の布压痕が残る。暗青灰色で須恵質。64は熨斗瓦。端部の4cm下から幅5cm程の細かな二重格子叩きを重ねて施す。端幅11.3cm。右側は截面、左側は内切目に破面。厚15mm。灰色で須恵質。65は特大の二重格子内に斜体の「磐」の逆字を施す3Ba2で、高野孤鹿氏採集品と同范である。側は截面。厚20mm。縦方向に歪む。暗青灰色で須恵質。66～67は丸瓦。66は叩き後部分的にナデ消す。厚21mm。青灰色で須恵質。67は左上がりの二重線が交点で少しづれアミダ状を成す。段高8.1cm。側は内切目に破面。厚17mm。青灰色で須恵質。68は埠。厚56mm。3面をヘラケズリ後ナデする。灰色で土師質。

T-3はSX02の下方7m程、地形に沿って東西4.7m幅80cm程で設定し、120cm程掘削。下部から33片の瓦が出土した。遺物 (Fig.19) は69～71は平瓦。69は3Ab、端部の2.5cm下から幅5cm程の原体で重ねて叩き重ね部を粗くナデる。側は内切目に破面。対面は粘土接合面で剥離する。厚18mm。灰色で須恵質。70は3Ac。側は截面。厚18mm。灰色で須恵質。71は6Eの不規則な小さな格子。側は内切目に破面。厚17mm。灰色で須恵質。他に須恵器坏・黒色B類塊小片が出土。

SX03はT-10の西側、SX02の西1.3m程、同じく崖面で断面を確認。花崗岩バイ欄土の堆積層の地山に掘り込まれる。壁は凸面状に立ち上がり、右壁は上部が剥落後も修復せず使用する。天井部は削平されている。最大径で205cm残存高80cmを測る。断面は被熱で最大20cm程赤化し、10cm程が還元化され、床は焼けない。燃焼部の可能性が高い。遺物の出土は無い。

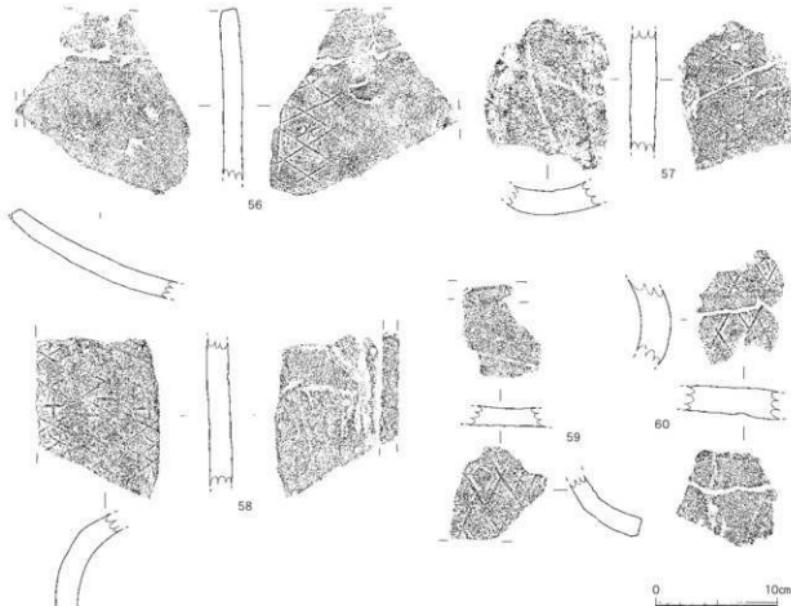


Fig.16 SX02出土遺物実測図.6 (1/4)

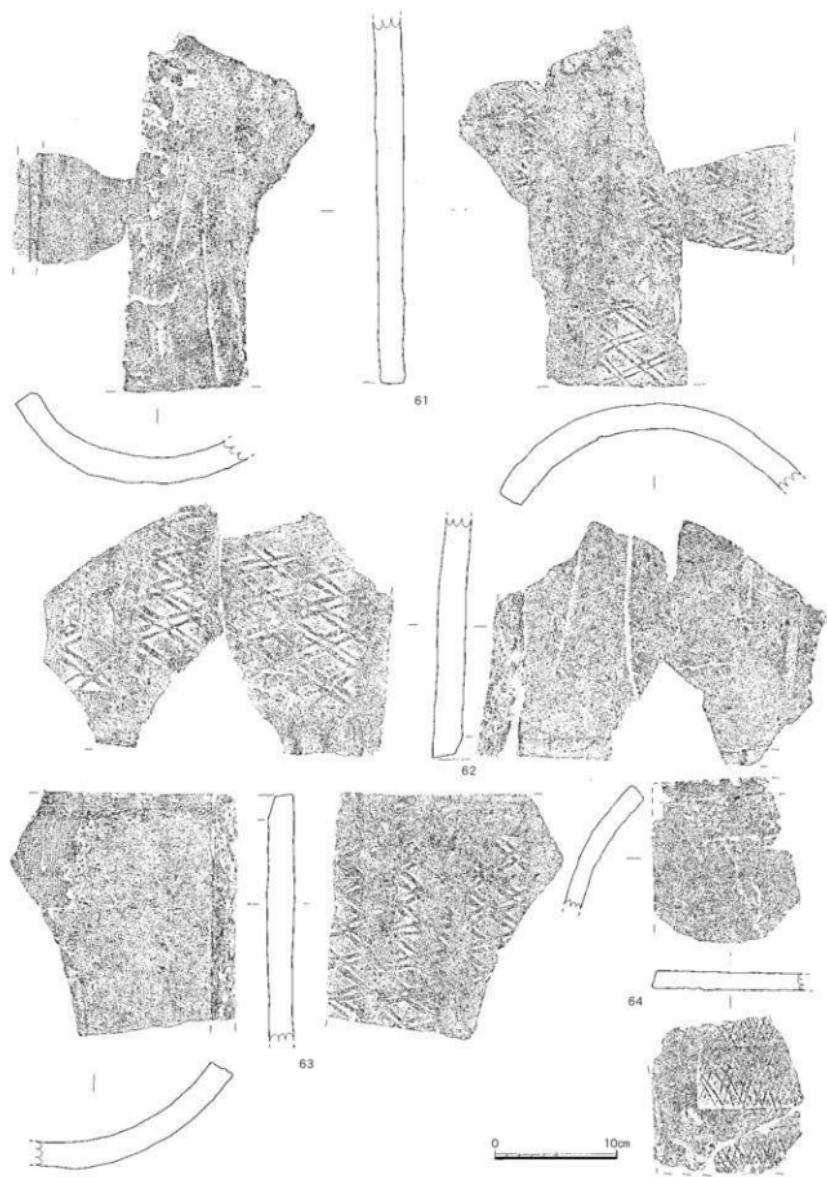


Fig.17 SX02出土遺物実測図.7 (1/4)

4. SX04 (T-20・14・23) の調査 (Fig.20~29 PL-5 ~ 7)

SX04は2次調査T-10の西端b5グリッドに位置し、SX03の西1.5m程、同じく北側宅地造成時の崖面で断面を確認した。花崗岩バイ欄の岩盤に掘り込まれる。平坦な床面から燃焼部と考えられ良好な遺存状態と想定し、南側に3次調査で3.8×3.8mのグリットを設定し（T-20）、窯体の確認を行った。窯体は残存長2.0m最大幅1.75m残存高1.15mで、燃焼部が主に残り、これから50cmの段差（階）をもって焼成部が長さ15cm遺存するのみで焚口先端部も築堤時の削平で欠落する。地下式有階登窓で、主軸をN-16°-Wにとる。燃焼部は最大幅1.7残存長1.8m、高さは1.25mと推定される。平面は胴の張る半裁紡錘形で、段近くの床は平坦でこれから焚口にかけては丸底となる。縦断面は浅い皿状で、焚口は燃焼部より20cmほど高く、幅65高さ80cm程の断面円形と考えられる。これから燃焼部の天井が軸線上に幅55～60cm程の帯状に不自然に欠落し、これ程の量の窯壁は内部から検出されない。本課比嘉えりかより、瓦の窯出し時に作業するため天井を破壊したものとの教示を得ている。壁は被熱により著しく焼け焚口部で幅20燃焼部で30cm程赤化され、それぞれ5～35

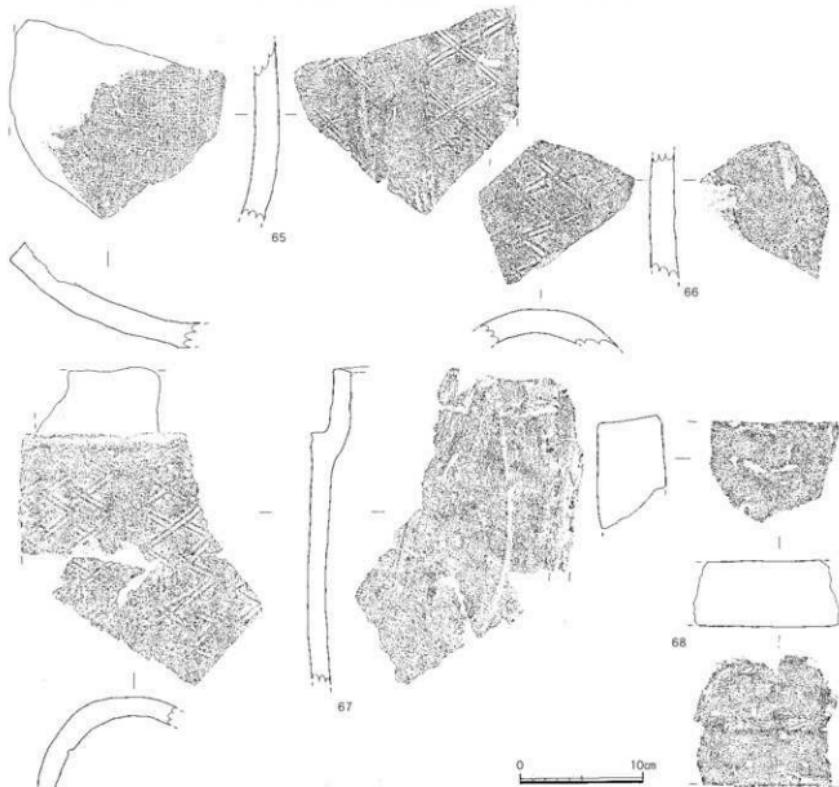


Fig.18 SX02出土遺物実測図.8 (1/4)

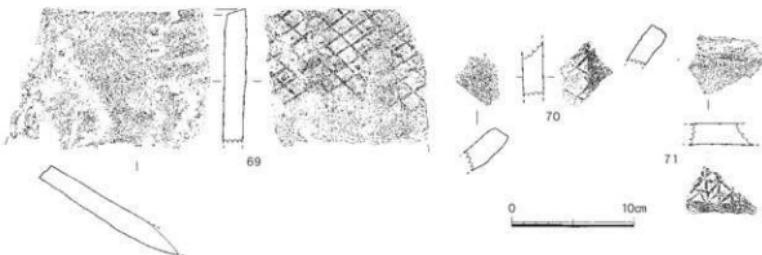


Fig.19 SX02周辺出土遺物実測図 (1/4)

cm程還元焼成される。焚口部には客土後20cm程度床面が上がっているのが観察される(f-f'断面5層)。床直上には明確な炭灰・灰層は観察されず、流出している。廃棄後は土が堆積し15cm程度埋没したところで208C類の軒丸瓦を含む若干の瓦が流入している(6層下部)。50cm程度堆積した時点で多くの礫とともに40cm程度の客土がなされ少量の瓦を含む(6層中部)。

窓両側のT-20床面(Fig.21)は岩盤を掘削して焚口床面にそろえて平坦面を作り出し、その後20cm程度客土を行って平坦面を上げている(5層)。その後4層が堆積して埋没し、築堤と宅地造成で南北に大きく掘削を受けた後、新たな客土がなされる(2層)。

出土遺物 (Fig.22~26) 72~84は燃焼部6層下部出土。72は208C類軒丸瓦で、瓦当径16.2cm。中房に1+4の蓮子を配し内区に14の丸い花弁を、外区に大粒の珠文を施す。中央に範割れの傷があり特徴的である。厚22mm。青灰色で須恵質。73は軒平瓦。範面が剥離し文様は不明。表面が荒れ調整もわからない。高63mm。黄灰色で土師質。74~82は平瓦。74は「警固」銘瓦の縦長菱形斜格子の下半部。端部上9cmに叩きを重ねず施す。凹面は目の粗い布目で横に3~4cm布目が乱れる。布上縦に幅10mm程の押さえの圧痕がある。側は截面。厚19~28mm。灰色で須恵質。75は3Ab。端部5cm上に叩き、部分的に縦にナデする。厚21mm。側は内切目に破面。暗灰色で須恵質。横に歪む。76は6Bの不整斜格子か。側は截面。厚24mm。灰色で軟質。77は3Ac。厚15mm。青灰色で須恵質。78は特殊な瓦で両面に布目が残る。厚9mm。側は内切目に破面。灰色で土師質。79~81は3Ac。79は叩きを3cm程空けタテヘラナデを施す。厚15mm。青灰色で須恵質。80は側から5cm程叩きを空ける。厚19mm。側は截面。灰色で須恵質。81は叩きの重ねが無い。厚19mm。橙色で軟質。82は76と同種で6Bの不整斜格子か。大部分をナデ消す。側は截面。厚16mm。灰色で軟質。83・84は3Acの丸瓦。83は叩き間を3cm程空ける。厚20mm。灰白色で土師質。84も叩きの間を空け特大の格子目にて「×」を施す3Ac2。凹面の布上に縦方向の紐状圧痕がある。85~95は6層中部出土。85~90・92は平瓦。85~87・92は3Ac。85は端部から2cm上の叩きの一部を縦にナデ消す。側は内切目に破面。厚17mm。灰色で須恵質。86は端部から2cm下の叩きの大部分をナデ消す。側は内切目に破面。厚20mm。暗青灰色で須恵質。87は端部から5cm上の叩きの一部を縦にナデ消す。側は内切目に破面。厚20mm。暗青灰色で須恵質。92は叩きの一部を縦にナデ消す。側は内切目に破面。厚14mmと薄い。灰白色で軟質。88・89は二重格子。88は正格子の3Ba3。叩きの大部分をナデ消す。側は截面。厚20mm。灰色で須恵質。89は特大の3Ba1。端部まで叩きを施す。厚18mm。灰白色で軟質。90は無文7類で、内外にハケ目状のケズリを施す。側は截面で面取り。厚35mm。暗橙色で土師質。91・93は3Ac丸瓦。91は特大の平行する格子2目の中央に左上がりの平行線を施す。厚16mm。明青灰色で須恵質。93は方形の格子。側は内切目に破面。緑黒色で灰被り状。須恵質。94は鬼瓦の眉部。残存幅13.8

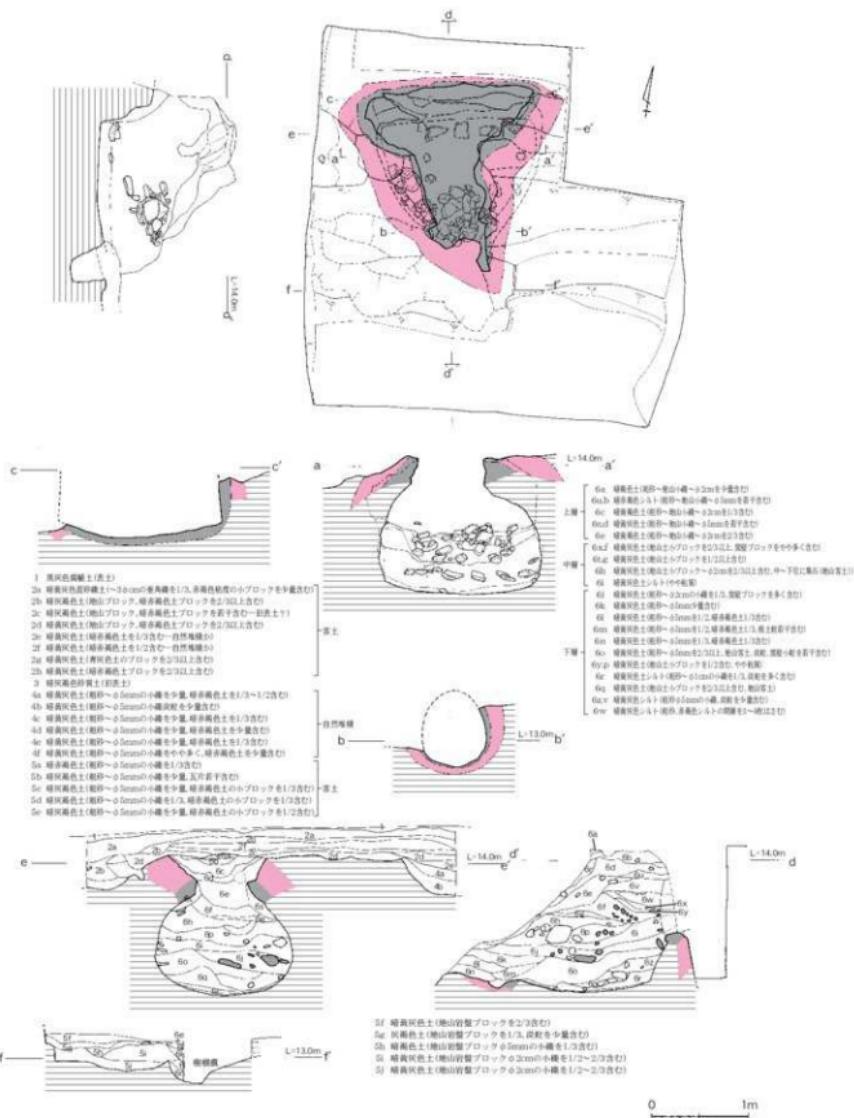


Fig.20 SX04 (T-20) 実測図 (1/50)

高7.5厚6.8cmで、ナデ調整後上面にヘラ描きで5本単位の、正面に3本と4本単位の弧線で巻き毛を表現する。下面是粘土接合面。青灰色で須恵質。95は黒色土器B類塊。高台は低く6mm程。復元径6.2cm。内面ケンマ。外面黒灰色内面暗黄橙色を呈す。11世紀末。

96～103は窯体周辺のT-20出土 (Fig.25)。96～98は下層（5層）出土。96は平安京・相島沖出土と同類の平瓦3Ac2。四角の中に「×」を施す。側は内切目に破面。厚20mm。灰色で須恵質。97は同じく「警固」銘平瓦の下半部。叩きは重なり、重ね部を緩くナデる。厚21mm。青灰色で須恵質。101は3Acの丸瓦。叩き後大部分をナデ消す。側は内切目に破面。厚18mm。暗青灰色で須恵質。縦に歪む。98は須恵器の鉢。復元口径19.2cm。口縁が小さな玉縁状をなす。外側に回転ナデ。灰白色で焼成良好。

99～103は中層（4層）出土。99・102は3Ac平瓦。99は叩き後部分的に縦方向にナデ消す。側は截面。厚17mm。青灰色で須恵質。102は3Ac2で格子内に「×」を施す。側は截面。厚27mmと厚い。灰色で須恵質。103は土師器高台坏。復元径7.8cm。調整不明。外側浅黄橙色内面灰白色を呈す。11世紀中～後半。

T-14はSX04の下方2m程、東西7.8m幅80cm程で設定し、80cm程掘削。中央部を第2次大戦中の防空壕で大きく搅乱されている。SX04の物原に当たり、135片の瓦を検出している。

出土遺物 (Fig.26) 104・105は軒平瓦。遺存状態が悪いが同種と思われ、内区に唐草文、上外区に珠文、下外区に鉤齒文状の物が見受けられる。105は灰白色で軟質。107は上端近くの特大の格子内に大小二重の鉤文を施す3Ac2の丸瓦。凹面に粘土の絞り痕、接合痕がある。側は内切目に破面。厚13～20mm。灰色で須恵質。108は「警固」銘平瓦の下半部。叩き重ね部を縦にナデる。厚13mm。青灰色で須恵質。109は3Acの平瓦。叩き重ね部と下部をナデ消し。側は内切目に破面。厚15mm。暗青灰色で須恵質。110は四角に「×」を施す3Ac2平瓦。叩き間を若干空ける。側は内切目に破面。厚15mm。暗青灰色で須恵質。111は3Ac平瓦。叩きの間隔をとり間はヘラナデ。側は截面。厚22mm。灰白色で軟質。112は3Bb2の平行四辺形に近い二重格子。厚15mm。青灰色で須恵質。113は無文7類の平瓦。凸面は縦ナデ。側は截面。厚16mm。灰白色で軟質。114は3Ba1の特大二重格子の丸瓦。高8.6cmを測るが歪む。側は内切目に破面。厚18mm。青灰色で須恵質。他に3Acの丹塗り瓦がある。

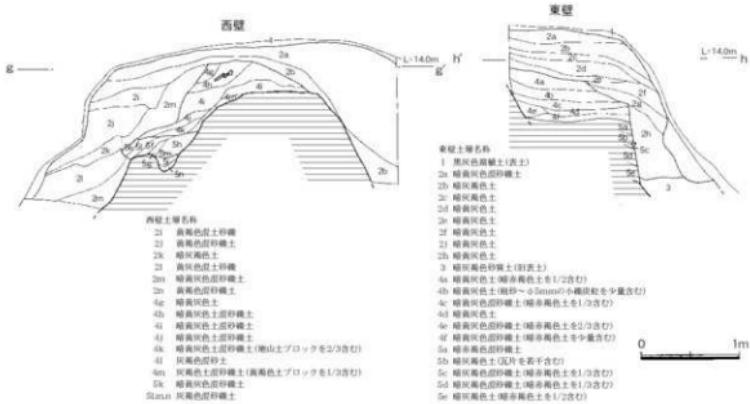
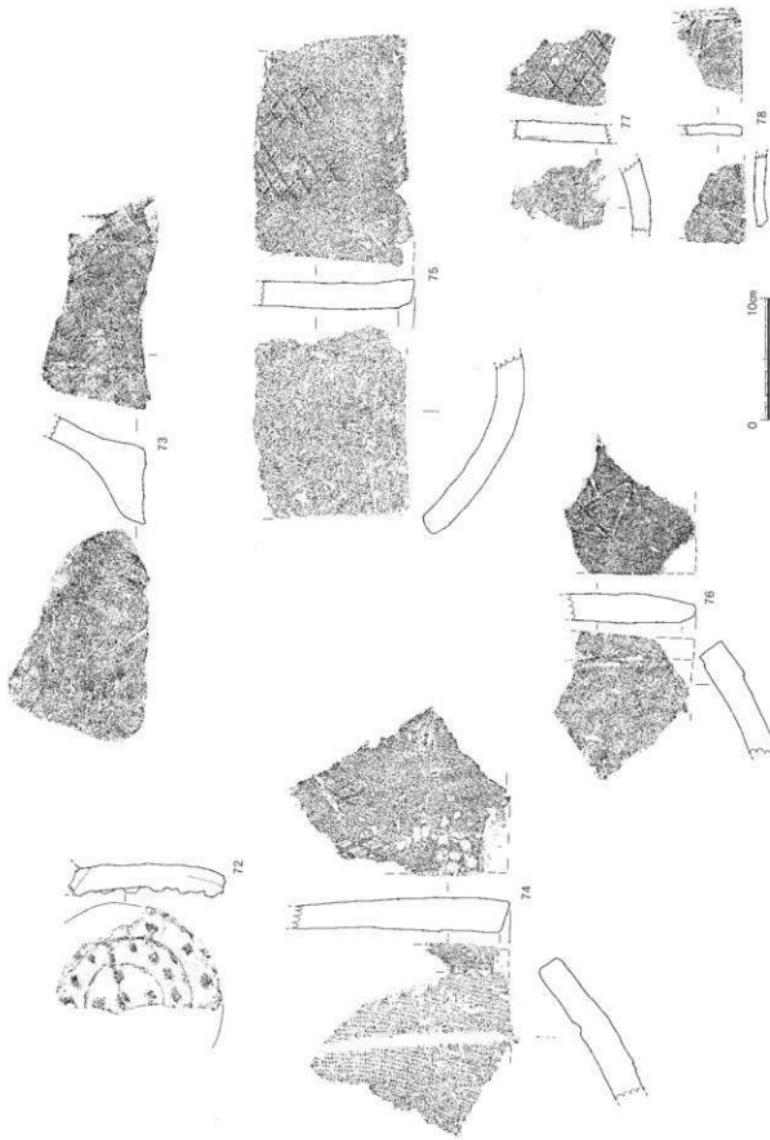


Fig.21 20トレンチ (SX04) 東・西壁土層断面図 (1/50)

Fig.22 SX04.6層下部出土遺物実測図.1 (1/4)



T-23はSX04の延長上の下方4m程、東西2m南北4.5mで設定した (Fig.27)。グリッドの南側2/3は築堤時に削平され失われている。遺存部分では地山バイ欄土の堆積粘土層を掘削した、幅1m深さ50cm程の不整形の溝状遺構の東半部を検出した。床面は凹凸があるがほぼ水平に取られる。SX04の床面からは3.6m低く、一連の遺構ではなく、段状に造成した作業面と考えられる。床から5~10cm程上方に瓦がまとめて出土する。溝埋没後は5層(-下層)上面に平坦面を作る。これがさらに埋没し(4層-中層)、途中土壤状の掘削もあり、瓦を少量包含する。これが近世築堤時に南を大きく開削されその後3層(上層)が堆積する。

出土遺物 (Fig.28・29) 115~122は5層(下層)出土。115~120は平瓦。115は平行四辺形に近い特大の格子に「×」を施す3Ac2。叩き間を空ける。凹面に粘土接合痕が残る。厚20mm、青灰色で須恵質。116は3Acで叩き重ね部を縦にナデス。側は内切目に破面。厚17mm、青灰色で須恵質。117は特大の斜格子3Acで縦に広くナデ消す。凹面端部は布目が無く比厚する。側は截面。厚20~33mmで側が比厚する。灰色で須恵質。118は3Ab2で端部近くの格子内に小さな鉤文を施す。叩きの重ね部は縦にナデス。厚20mm、青灰色で須恵質。119は二重格子の3Ba1。大部分を縦にナデ消す。側は内切目に破面。厚15mm。歪みが大きい。灰白色で土師質。120は3Ac。叩きの間を空ける。側は

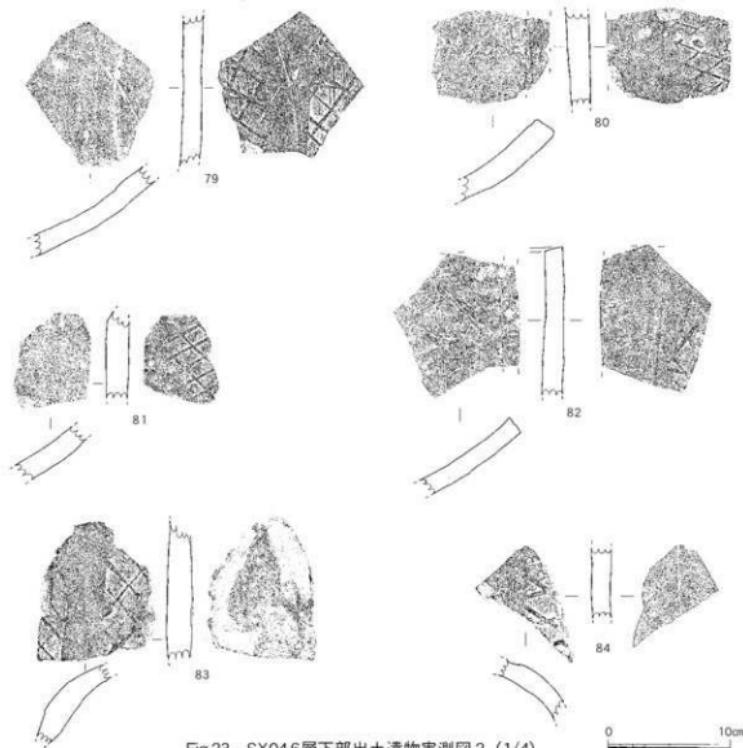


Fig.23 SX04.6層下部出土遺物実測図.2 (1/4)

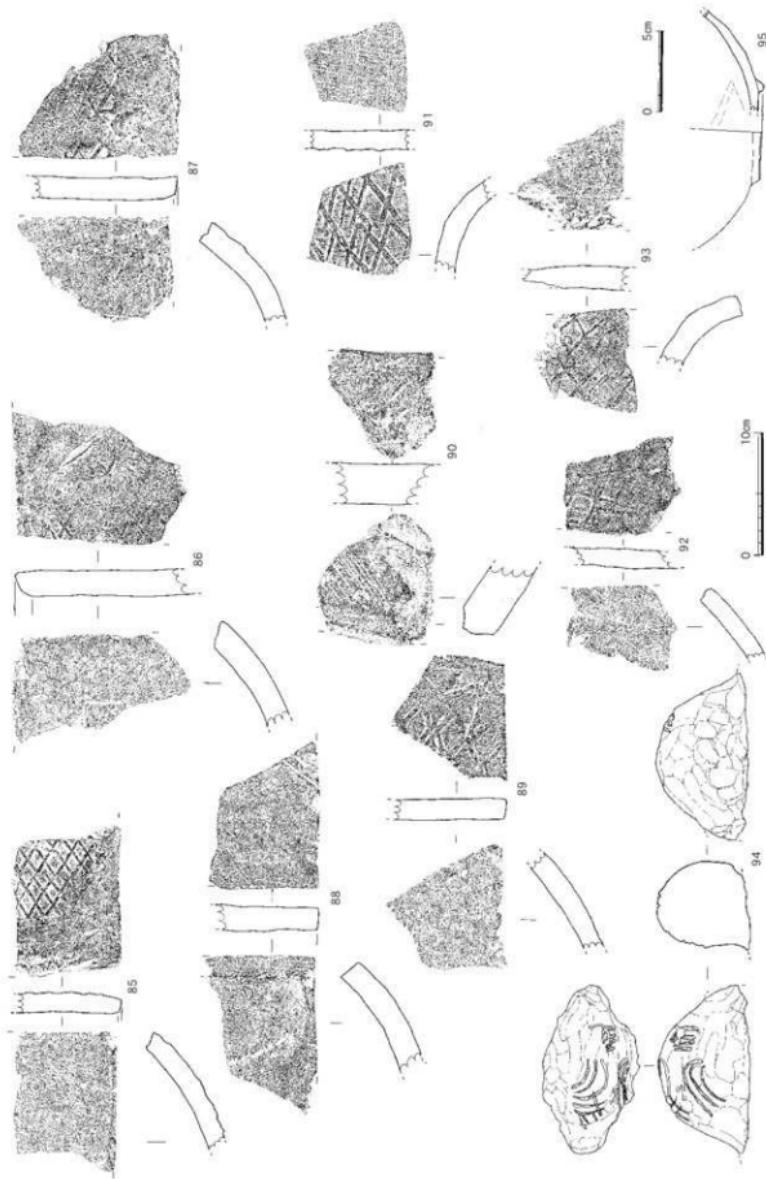


Fig.24 SX046層中部出土遺物実測図3 (1/4・95=1/3)

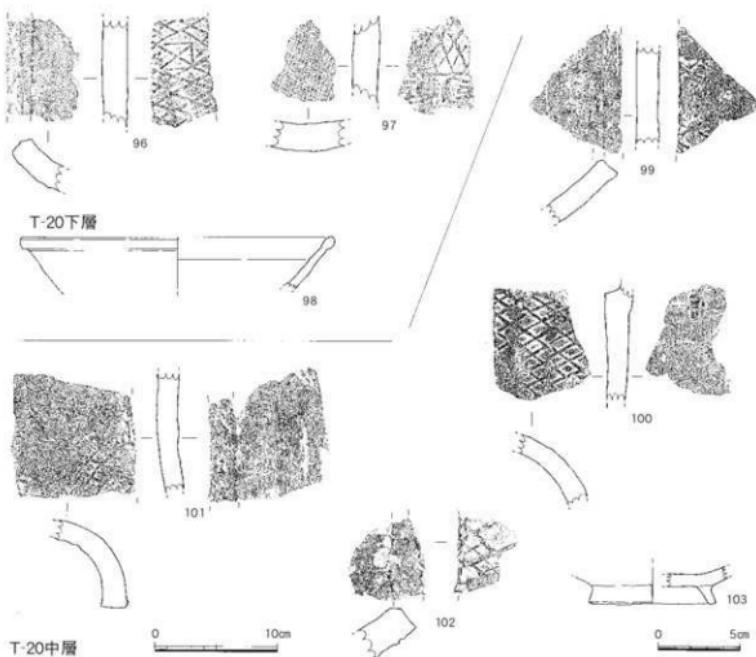


Fig.25 SX04周辺出土遺物実測図.1 (1/4・98.103=1/3)

截面。厚22mm。暗青灰色で須恵質。121・122は須恵器。121は鉢で復元口径24.8cm。内面から口縁外側は回転ナデ。砂粒を少量含み褐色。122は円盤状の鉢底部。底径10.6cm。砂粒を多く含み灰色。

123～124は4層（-中層）出土。123は3Abの平瓦。叩きの大部分をナデ消す。側は内切目に破面。厚21mm。青灰色で須恵質。124は須恵器高台坏。復元高台径8.8cm。内外面回転ナデ。青灰色。7世紀末。125は土師器皿。復元口径10.0器高1.8cm。調整は不明。暗褐色12世紀初頭。

126～129は3層（-上層）出土。126～128は特大の3Ac。126は格子内に「十」を施す3Ac2。叩きの間を空ける。厚23mm。褐色で軟質。127は叩きの大部分をナデ消す。側は截面。厚17mm。褐色で土師質。128は単格子の隣に二重格子の3Bb2を施す。側は截面。厚24mm。青灰色で須恵質。129は丸瓦で1類の平行格子の横を3Aa2の斜格子で叩く。側は内切目に破面。厚23mm。灰色で須恵質。

5. SX05・09 (T-11・21・22) の調査 (Fig.30~40 PL-8・9)

SX05はSX04の西7m程、第2次調査の東西3.7m幅50cmで設定した、T-11の西端で窯体の東半部を検出した。上部は削平され、表土下1.1mの盛土直下の花崗岩バイ欄の岩盤に掘り込まれている。トレンチ内の1.4m程東には幅30cm深さ25cm程の矩形に屈曲する溝の一部が検出され、作業場の壁溝の可能性があり、縦・横方向にも窯体に作業面が近いことを示している。

窯体の横断面は浅い皿状の床面から高さ90cm程の半円状の天井部に連なり、第1次調査の窯体断

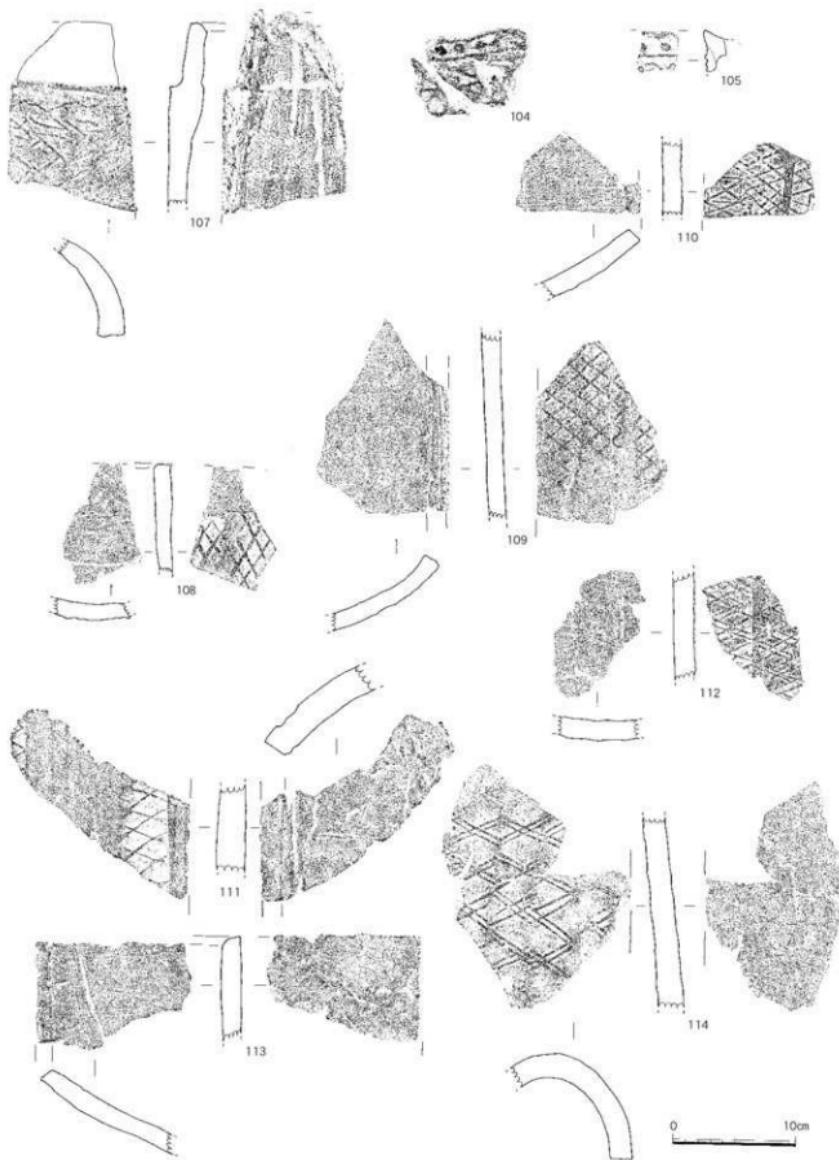


Fig.26 SX04周辺出土遺物実測図.2 (1/4)

面に似るが、今回検出の他の窯に比べ天井が低い。幅は1.8m程か。縦断床面は30°の勾配で北に上がり、無段の焼成部である可能性が高い。壁断面は被然で7cm程還元され、床面も焼ける。検出の最低位で標高11.75mを測る。廃絶後床上から50cm程までに比較的大きな瓦片が多く堆積し、20cm程の間層を挟んでさらに瓦片が少量散布する。天井の大部分が欠落するが、SX04と異なり、瓦堆積後に窯壁が窯体内に崩落している（3層）。縦断土層が窯床面傾斜と逆に上がっており、窯体の下半部が先に埋没したことを示している。

出土遺物 (Fig.31~33) 130は道具瓦。3Ab類叩きを二重に叩いたものか。端面と側面が135°程の角度をとる。側は截面。厚13mmで薄い。灰色で須恵質。131~138は平瓦 (Fig.31・32)。131は「警固銘」の3Ab3類で、叩きを左回りに横に重ね下半をナデ消す。側は内切目に破面。厚21mm。灰赤色で土師質。132も同様に端部から上3cmに幅9cm程の幅広原体3Ab類を叩く。叩きの一部を横方向にナデ消す。凹面の布目は粗い。側は内切目に破面。厚20mm。灰白色で軟質。133は端部まで、幅6.5cm程の原体で叩く3Ac類。凹面は布目をナメに緩く搔く。側は内切目に破面。厚18mm。褐灰白色で軟質。134は綫長の菱形の叩きを施し、大部分をナデ消す3Ac類。側は内切目に破面。厚18mm。褐灰白色で軟質。135~137は幅5cm程の叩き原体に3Ab類に、漸次大きくなる平行四辺形に近い3Ac類を連ねる物で、135は端部から5cm上に叩き、重ね部と3Ac類の大部分をナデ消す。凹面の布目は粗く、縦に粘土接合痕が残る。側は截面。厚13~20mm。暗橙色で土師質。136は上端部まで叩きを施し下半を緩くナデする。凹面の縦位に粘土接合痕が残る。側は截面。厚13~22mmで端部にか

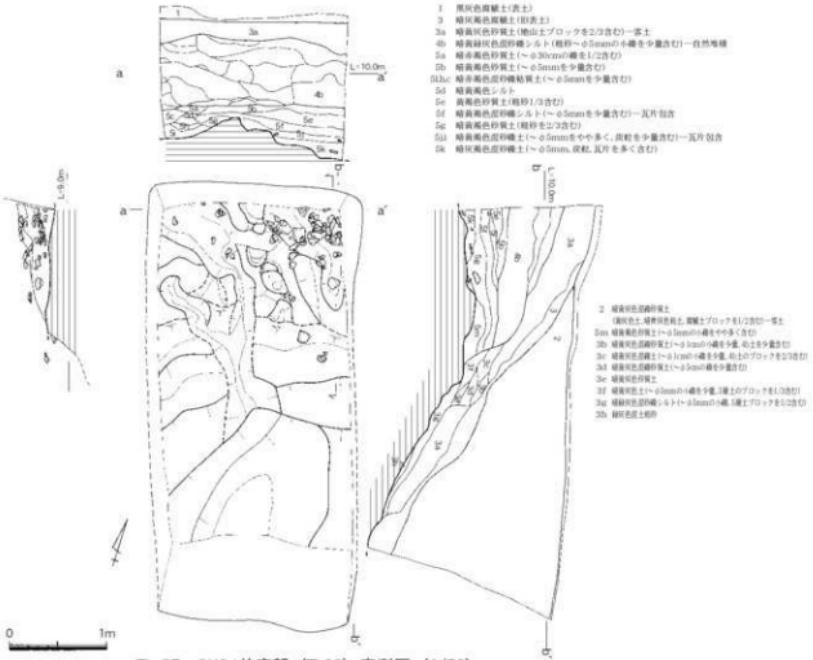


Fig.27 SX04前庭部 (T-23) 実測図 (1/50)

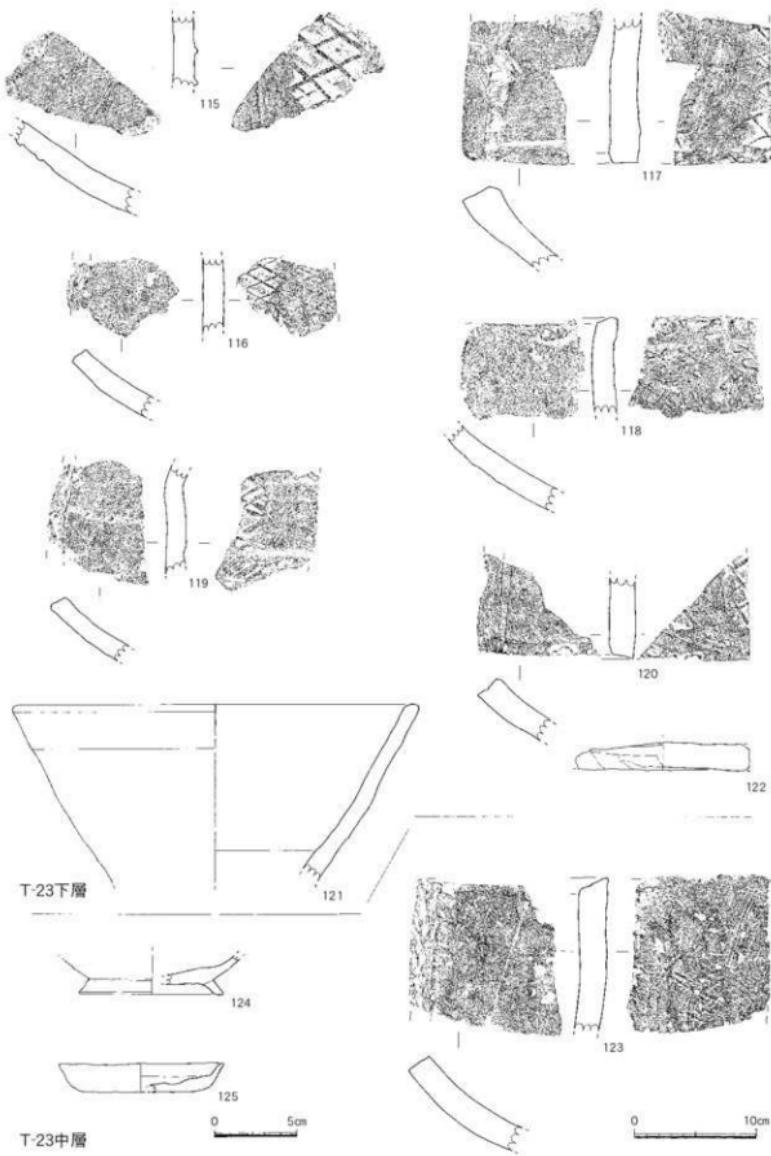


Fig.28 SX04周辺出土遺物実測図.3 (1/4・121.122.124.125-1/3)

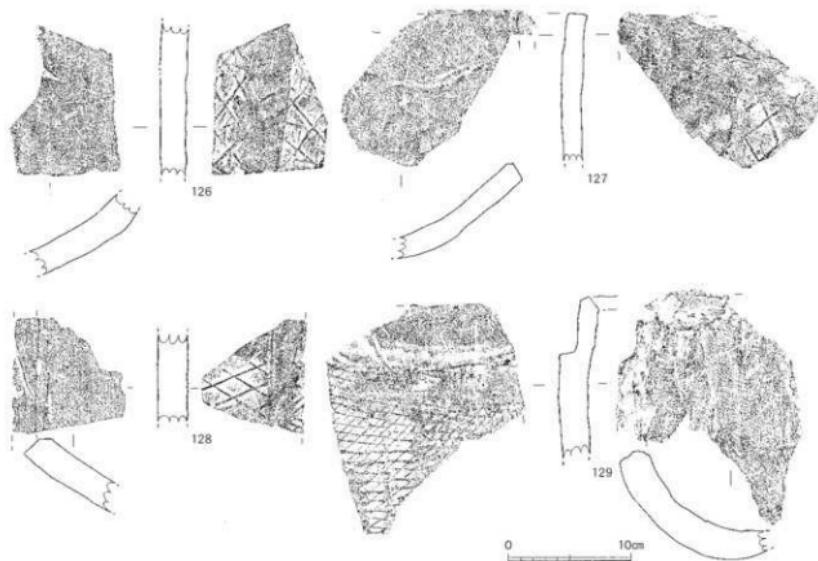


Fig.29 SX04周辺出土遺物実測図4 (1/4)

け薄くなる。灰白色で土師質。137は端部まで叩き、端部から2cm程をナデ消す。上位は緩くナデる。側は内切目に破面。厚15~20mm。灰褐色で土師質。138は幅5cm程の原体で幅狭く重ねて端部まで叩く方形格子の3Ac類。端部から10cm程以上をナデ消す。凹面の縦位に粘土接合痕が残る。側は内切目に破面。厚20~23mm。褐灰色で軟質。139~143は丸瓦 (Fig.33)。139・140は小さな3Aa1類から漸次大きくなって3Ac類となる単格子叩きで、重ね部を縦にナデる。凹面に横方向の粘土接合痕が残る。139は側は内切目に破面。厚15mmと薄い。横に歪む。褐灰色で軟質。140は段端部まで叩き端部下3cmまでをナデ消す。側は内切目に破面。厚23mmと厚い。暗黄橙色で軟質。141は原体に3Ab類に、漸次大きくなる平行四辺形に近い3Ac類を連ねる叩きで、段端部まで叩き、叩き重ね部と3Ac部の殆どをナデ消す。側は内切目に破面。厚20mm。褐灰色で土師質。142は「警固銘」3Ab3類の下半部で、端部から3cm程上に、横に重ねて叩き、菱形格子の大半をナデ消す。凹面端部に布折込痕がある。側は内切目に破面。厚18mm。褐灰色で土師質。143は原体の上下に3Ab類と漸次大きくなる平行四辺形に近い3Ac類を連ねる叩き、タテに粗くナデる。凹面に縦方向の粘土接合痕が残る。高9.3cmを測る。側は内切目に破面。厚20mm。赤灰色で土師質。

T-21・22はSX05の延長上の南下方3m程、東西4m南北3mのT-21と東西2.5m南北4mのT-22を連結して設定した (Fig.34)。T-22は築堤時に深さ1.5m程度段状に削平され、遺構は残っていない。T-21では標高9.8~10mのレベルで地山堆積粘土層・バイ欄化した花崗岩を水平に掘削して奥行き1m以上の作業面を造成し、上面に焼土粒混じりの炭層 (6o層) が堆積する。確認作業は上部物原を残すため、上部物原の際で止めている。この平坦面上に暗赤~暗褐色土が堆積し、下半に瓦をやや多く包含する (6層-下部物原)。この上部に岩盤ブロック混じりの赤褐色土を客土して標高11.2~11.4mのレベルで奥行き1.5m以上の平坦面を造りだし (6a~c層)、上面に東から瓦が多く堆積

する（5層・上部物原）。出土瓦の内容から、下部物原がSX05に対応する可能性が高い。この平坦面がSX05の前庭部となると、堰堤内に全長6～7m程窓体が遺存していることになり、7基中最良の状態である可能性が高い。今後の調査で最重要に置くべき窓体となる。また、上部物原（SX09）はSX05の北東側斜面上位に別個の窓体があったことを推測させる。上部物原が埋没後（4層）、T-22部分から近世築堤時に南を大きく開削され、その後3層が堆積する。2層は高さ3m程の池擁壁の裏込め客土である。

下部物原出土遺物 (Fig.35・36) 144～151は平瓦。144は「警固銘」3Ab3類の上半部で、端部から5cm程下に2cm程間を空けて叩く。凹面の布目は粗い。側は截面。厚15～26mmで端部に向け薄くなる。暗青灰色で須恵質。145～150は3Ac類。145は小さめの斜格子で端部まで叩く。側は内切目に破面。厚15mmと薄い。暗青灰色で須恵質。146は端部近くまで叩く。厚20mm。暗灰色で須恵質。147は大形の方形単格子で叩き、叩き間を空ける。厚18mm。灰色で須恵質。148は端部下3cm程下から5cmほど叩き間を空けて叩く。側は内切目に破面。厚18mm。灰白色で軟質。149は端部まで叩き、凹面側端に布折込痕がある。側は截面。一枚造りか。厚25mmと厚い。灰白色で軟質。150は上端近くの格子内に大小二重の鉤文を施す3Ac2類。大部分をナデ消す。側は截面。厚20mm。青灰色で須恵質。151は不整な斜格子6B類か。厚9mmと極めて薄い。灰白色で軟質。152～157は丸瓦 (Fig.36)。152は段部下5cmから叩く3Ab類。側は内切目に破面。厚17mm。明褐色で土師質。153～156は3Ac類。153は端部まで叩く。側は内切目に破面。厚15mmと薄い。暗黄橙色で土師質。154は特大の単格子を端部上5cm程から叩き、殆どをナデ消す。厚17mm。灰色で須恵質。155は平行四辺形に近い特大の単格子を端部まで叩き、殆どをナデ消す。側は内切目に破面。厚20mm。暗橙色で土師質。156は段部まで叩き、大部分をナデ消す。側は内切目に破面。厚18mm。灰褐色で土師質。157は段部際まで特大の二重格子を幅狭く重ねて叩く3Ba1類で、その殆どをナデ消す。

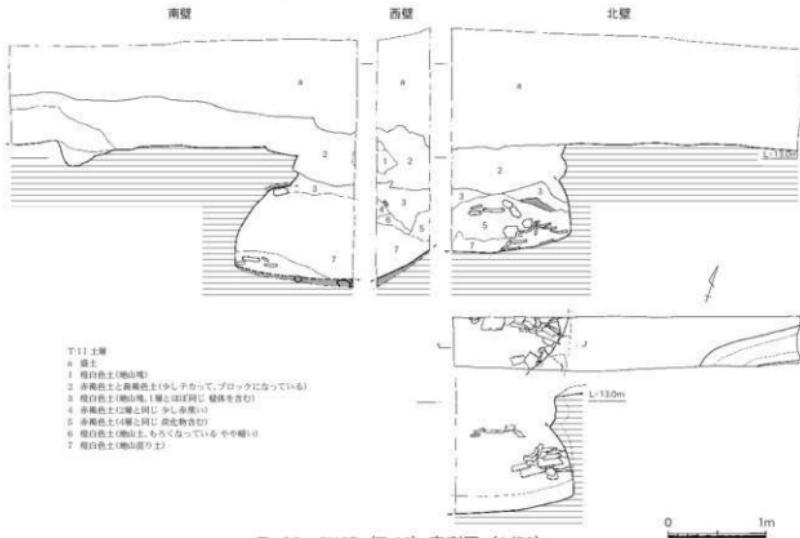


Fig.30 SX05 (T-11) 実測図 (1/50)

0 10cm

Fig.31 SX05出土遺物実測図.1 (1/4)

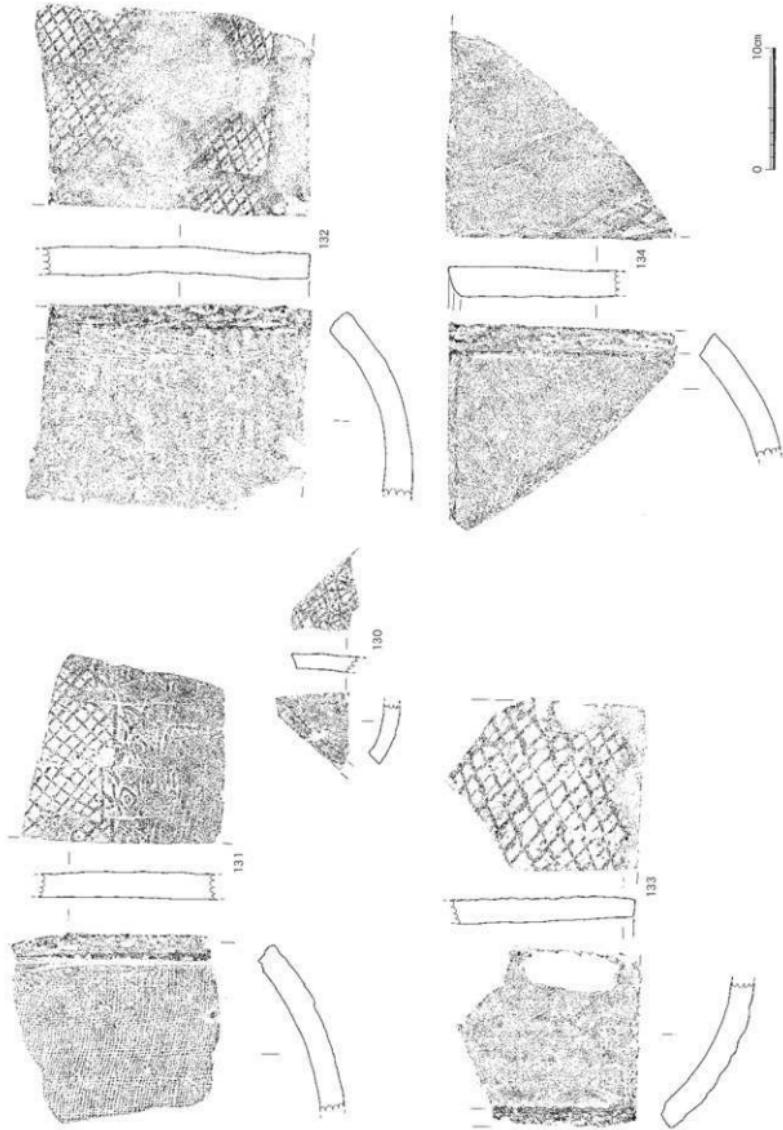
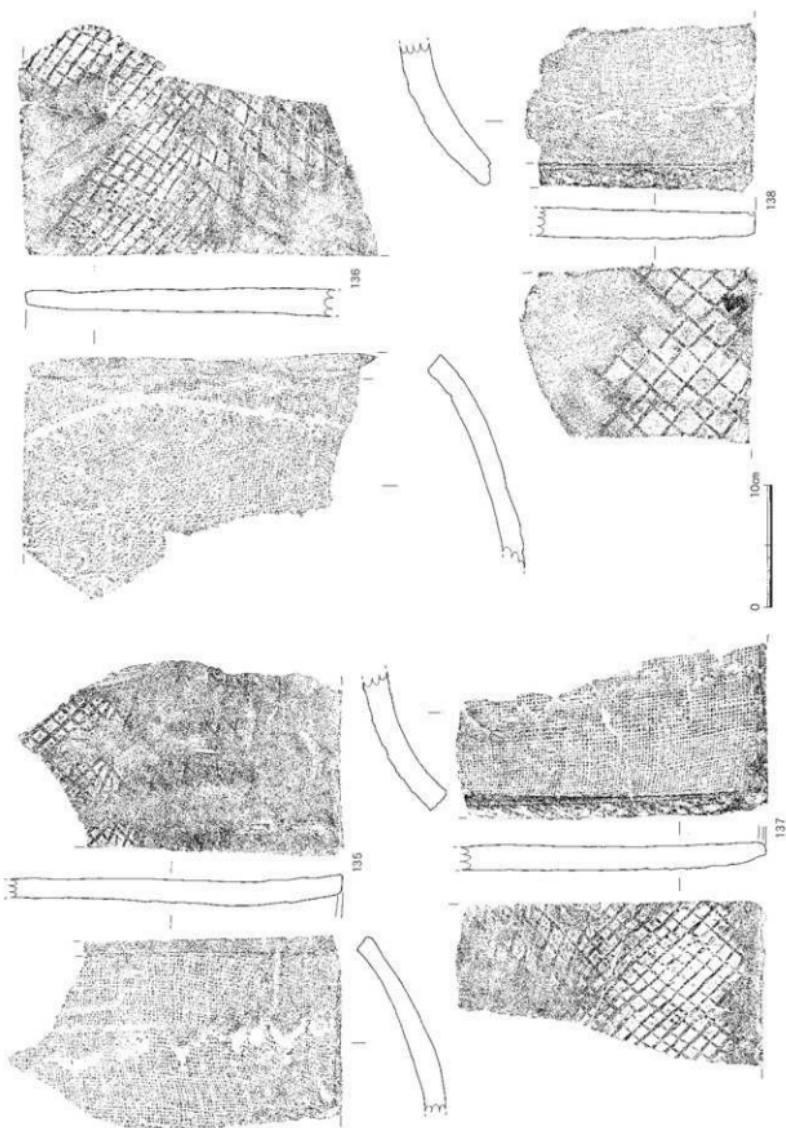


Fig.32 SX05出土遺物実測図2 (1/4)



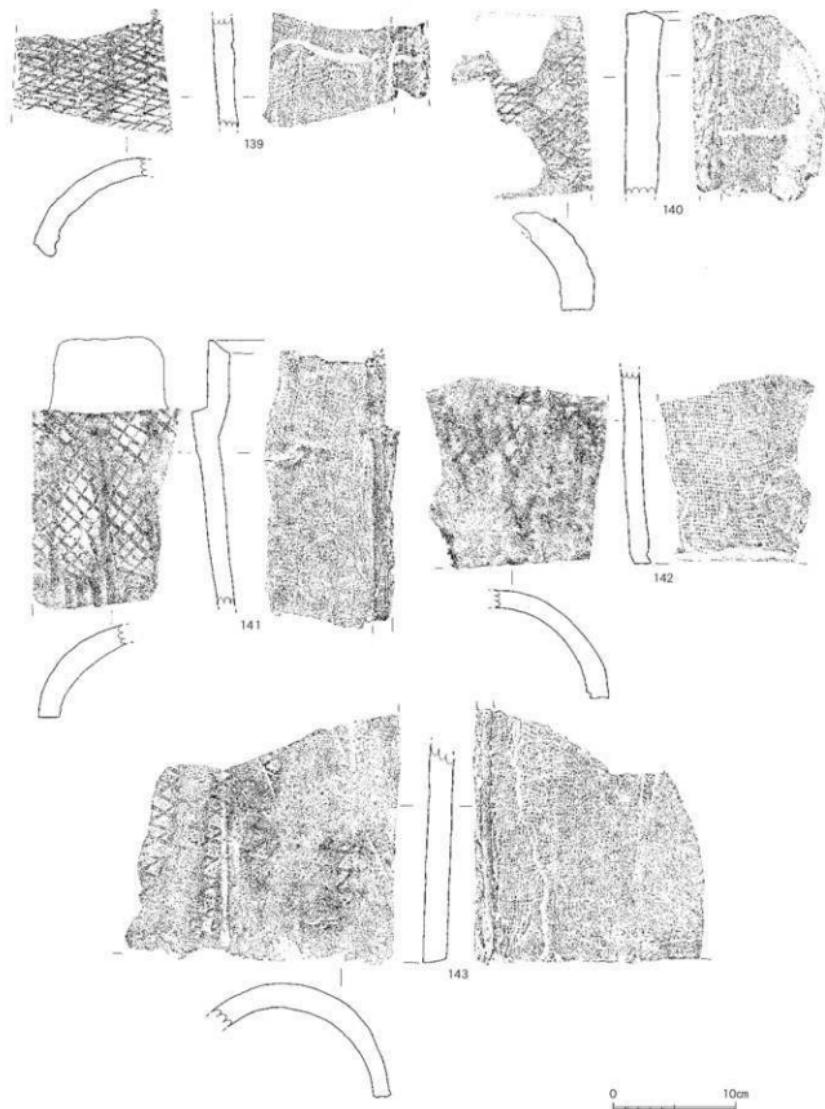


Fig.33 SX05出土遺物実測図.3 (1/4)

上部物原 (SX09) 出土遺物 (Fig.37~40) 158~184は平瓦。158は3Aa3類「伊賀作瓦」銘瓦の上部。端部下4~5cm程に細かな平行格子を重ねて叩く。側は内切目に破面。厚18mm。浅黄橙色で土師質。159・160は1類の平行格子で、叩きの間を開ける。159は厚15mm。灰色で須恵質。160は側は截面。厚20mm。青灰色で須恵質。161~163は3Ab類。161は下半に左上がりの平行線を格子間に入れる叩きで、叩き重ね部をナデる。厚17mm。青灰色で須恵質。162は方形格子を端部際まで叩き、叩き重ね部を緩く綴にナデる。側は内切目に破面。厚20mm。灰色で須恵質。163は叩き間を開ける。厚18mm。灰色で須恵質。164~173は3Ac類。164は端部下6cm程に横に重ねて叩く。凹面は布目をナデる。側は截面。厚20mm。青灰色で須恵質。165は3Ac2類で四角の枠をとる。枠内に施文はない。側は截面。厚16mm。灰色で須恵質。166は端部から下げて叩きを横に重ね、重ね部を緩くナデる。側は截面。厚18mm。灰白色で土師質。167は端部下4cm程から大きな単格子を横に重ねて叩く。側は内切目に破面。厚18mm。青灰色で須恵質。168は端部上2cm程上に、横に間を開け叩く。側は内切目に破面。厚15mm。灰白色で土師質。169 (Fig.38) は叩きの上半をナデ消す。側は内切目に破面。厚17mm。灰白色で土師質。170~173は特大の単格子。170は側は截面。厚18mm。灰色で須恵質。171は端部際まで叩き、横の間を開ける。側は内切目に破面。厚14mm。灰色で須恵質。172は左上がりの格子内に「×」を二連で施す3Ac2類。側は内切目に破面。厚25mmと厚い。青灰色で須恵質。173は格子の一部を木葉状にする3Ac2類。側は截面。厚25mmと厚い。灰色で須恵質。174~176は二重格子の3B類。174は3Baの大格子。側は内切目に破面。厚14mmと薄い。青灰色で須恵質。175・176は特大の3Ba1類。175は叩き重ね部を綴にナデ消す。厚17mm。褐灰色で軟質。176は叩きを横に細かく重ねる。側は截面。厚18mm。暗橙色で軟質。177・178・181は不整斜格子の6E類。177・181は3Abを方向を変えて二重に叩いたものか。177は厚16mm。青灰色で須恵質。181は側は截面。厚16mm。灰色で須恵質。178は叩き重ね部を緩くナデる。凹面布目が粗い。厚17mm。灰色で須恵質。179・180・182は端部近くの格子内に鉤文を施す3Ac2類。179は大小二重の鉤を重ね、厚18mm。灰色で須恵質。180は小片のため鉤が1本か2本か不明。厚10mmと極めて薄い。灰色で須恵質。182は上下で反転する長い鉤を施す。叩き重ね部を緩くナデる。側は内切目に破面。厚17mm。暗青灰色で須恵質。183 (Fig.39) はタテハケ状のケズリを施す7b類。側は截面。厚23mm。暗橙色で土師質。184は3Ac類ナデ消しの無文7類。凸面端部上が1cm程窪む。185~194は丸瓦。185は3Aa2類の平行四辺形に近い叩きで、叩き間を開ける。厚14mmと薄い。暗黄橙色で土師質。186~192は3Ac類。186は叩き間を開け端部際まで叩く。内面端部が比厚する。厚18mm。灰白色で土師質。187は段部際まで叩く。玉縁凹面に粘土接合痕が残る。高7.0cm。側は内切目に破面。厚22mm。青灰色で須恵質。188は右上がりに狹・広・狭となる単格子で、大部分をナデる。内面に接合痕が残る。側は内切目に破面。厚17mm。灰色で須恵質。189は横に幅狭く叩きを重ねる。厚18mm。灰色で須恵質。190は段部際まで幅狭く重ねて叩く。格子内に突起がある。厚20mm。灰色で須恵質。191は叩き後緩くナデる。側は内切目に破面。厚13mmと薄い。明青灰色で須恵質。192は鉤文を有する3Ac2類と思われる。側は内切目に破面。厚17mm。青灰色で須恵質。193・194は特大の二重格子3Ba2類。193は端部上7cm程に叩き、重ね部は綴にナデる。厚20mm。灰色で須恵質。194は段部際まで幅狭く重ねて叩き、緩くナデる。厚20mm。暗青灰色で須恵質。198 (Fig.40) は須恵器で、外底際の内側に高台が付く。復元径8.2cm。青灰色。8世紀後半。199・200は土師器塊。199は復元口径14.2cm。体部下位に屈曲が残る。褐灰色。200は復元口径13.8cm。暗褐色。10世紀末~11世紀初か。195~197は4層(中層)出土の須恵器。195は坏蓋。口径13.0cm。灰白色。9世紀初。196は坏蓋。青灰色。8世紀末。197は坏。復元口径13.0cm。青灰色。

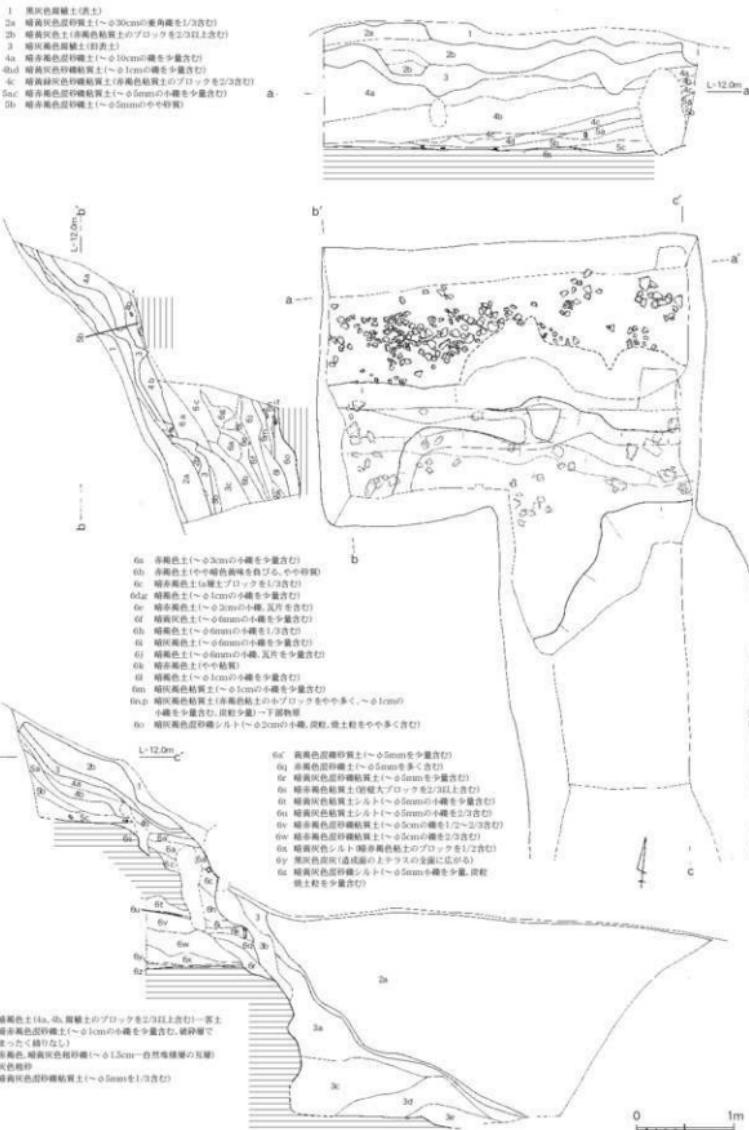


Fig.34 SX05前部 (T-21・22) 実測図 (1/50)

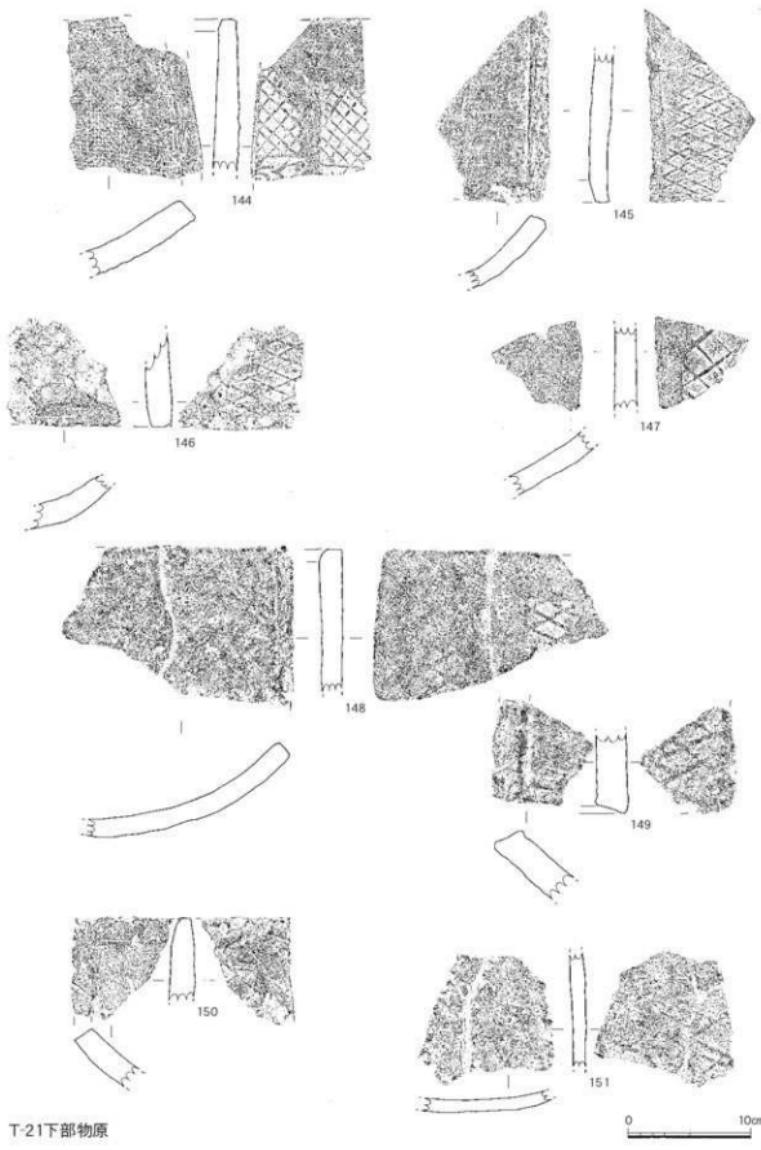


Fig.35 SX05周辺出土遺物実測図.1 (1/4)

Fig.41は近世の築堤以降堆積のT-22出土。50片程の瓦を検出している。201～206は3Ac類単格子平瓦。201は叩きの下部と重ね部をナデ消す。側は内切目に破面。厚17mm。灰色で須恵質。202は叩き下部をケズリ状に消す。厚26mmと厚い。灰色で須恵質。203は端部まで叩き、重ね部を緩くナデする。厚17mm。灰色で須恵質。204は大きめの単格子で、重ね部を縦にナデ消す。厚15mmと薄い。灰色で須恵質。205は特大の単格子で端部まで叩き、直下をナデ消す。側は截面。厚15mm。暗褐色で軟質。206は叩き重ね部を縦にナデ消す。側は截面。厚15mm。灰白色で土師質。207は特大の二重格子3Ba2類で、格子内に逆字「警」を施す瓦の下端。叩きを重ね端部まで叩き、2cm程をナデ消す。厚15～21mmで端部に向け薄くなる。青灰色で須恵質。208～210は須恵器。208は壺蓋。口径16.0cm。

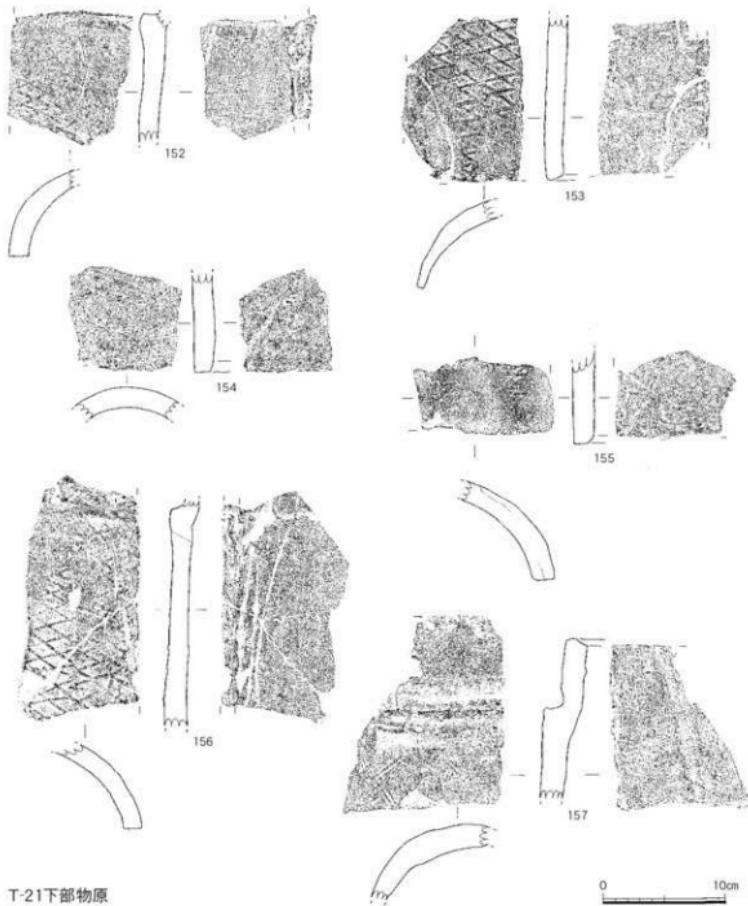


Fig.36 SX05周辺出土遺物実測図.2 (1/4)

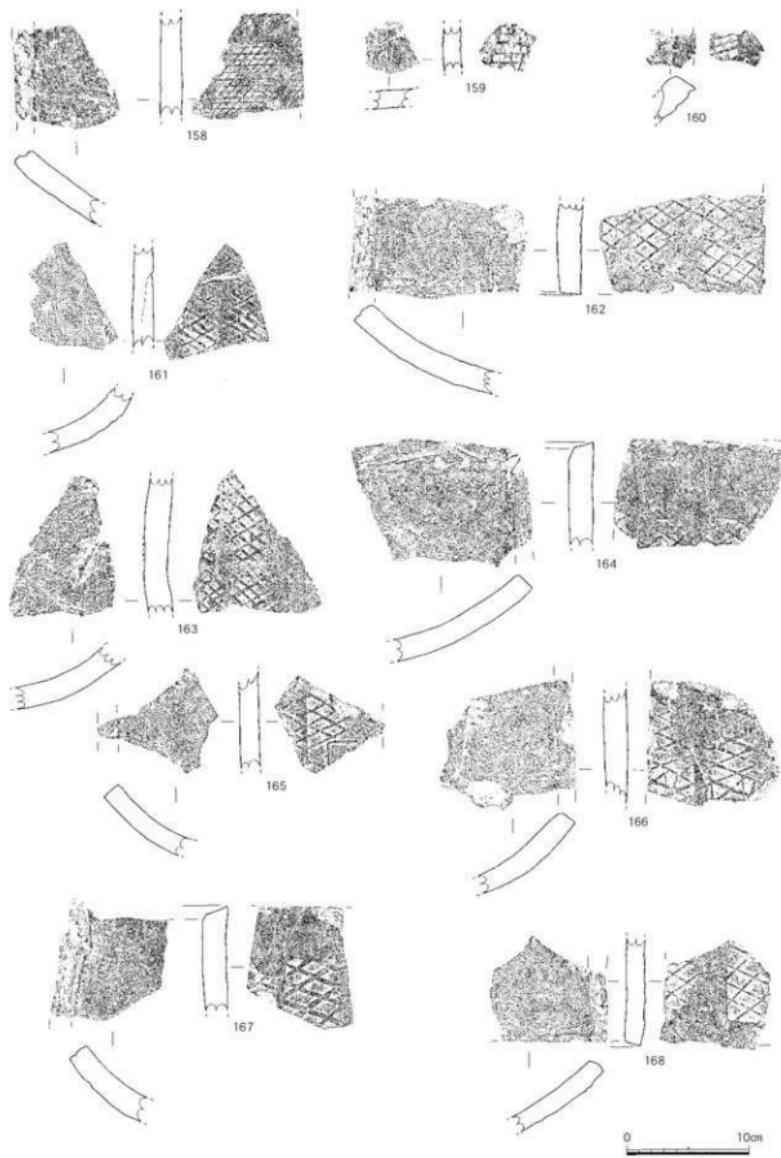


Fig.37 SX09 (T-21上部物原) 出土遺物実測図.1 (1/4)

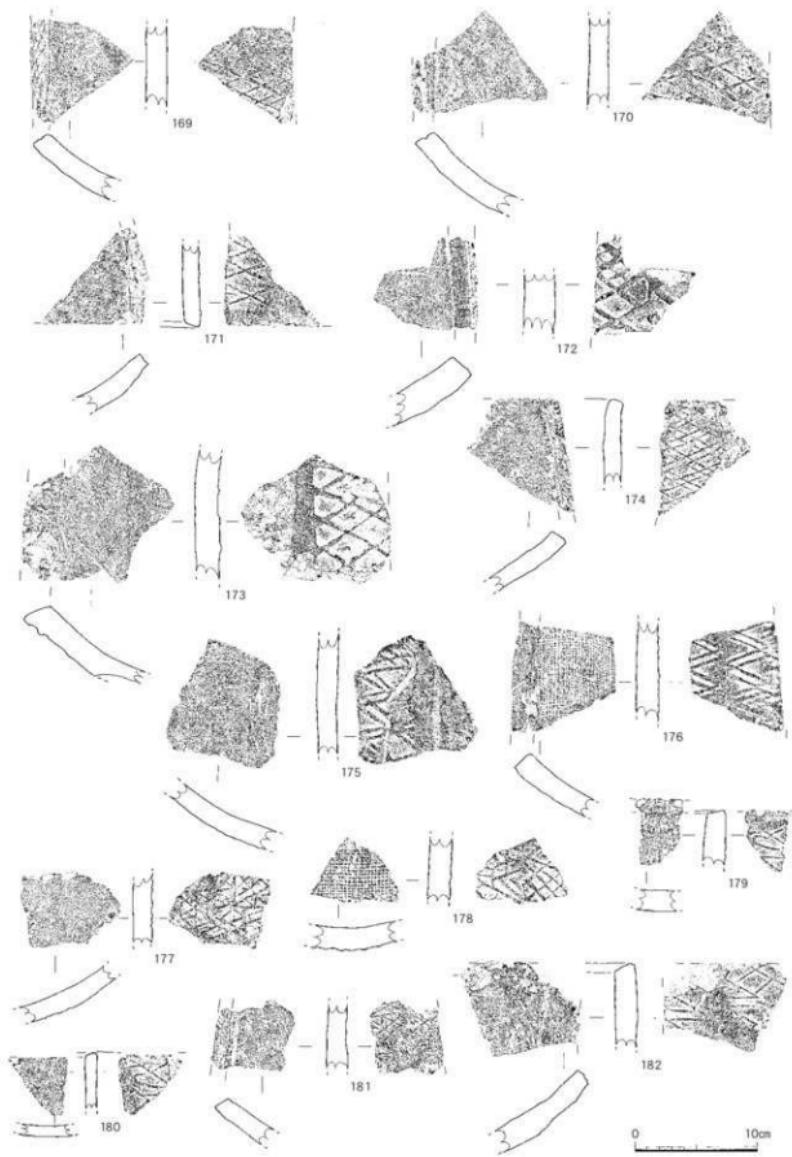


Fig.38 SX09 (T-21上部物原) 出土遺物実測図.2 (1/4)

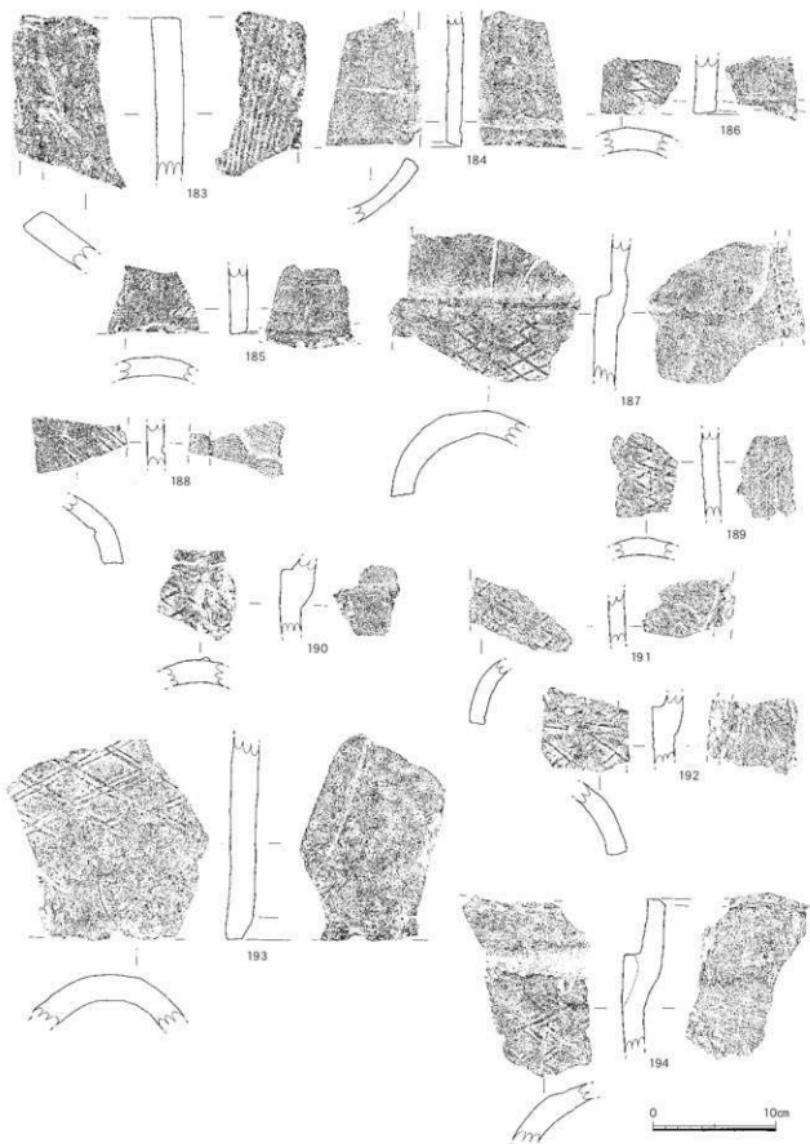


Fig.39 SX09 (T-21上部物原) 出土遺物実測図.3 (1/4)

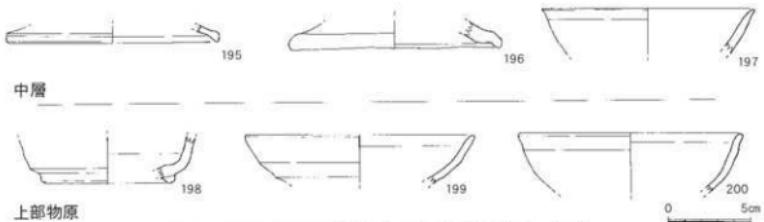


Fig.40 SX09 (T-21上部物原) 出土遺物実測図.4 (1/4)

明青灰色。209は壺底部。高台径13.0cm。210は甕洞部片。外面カキ目、内面平行当具痕。灰色。

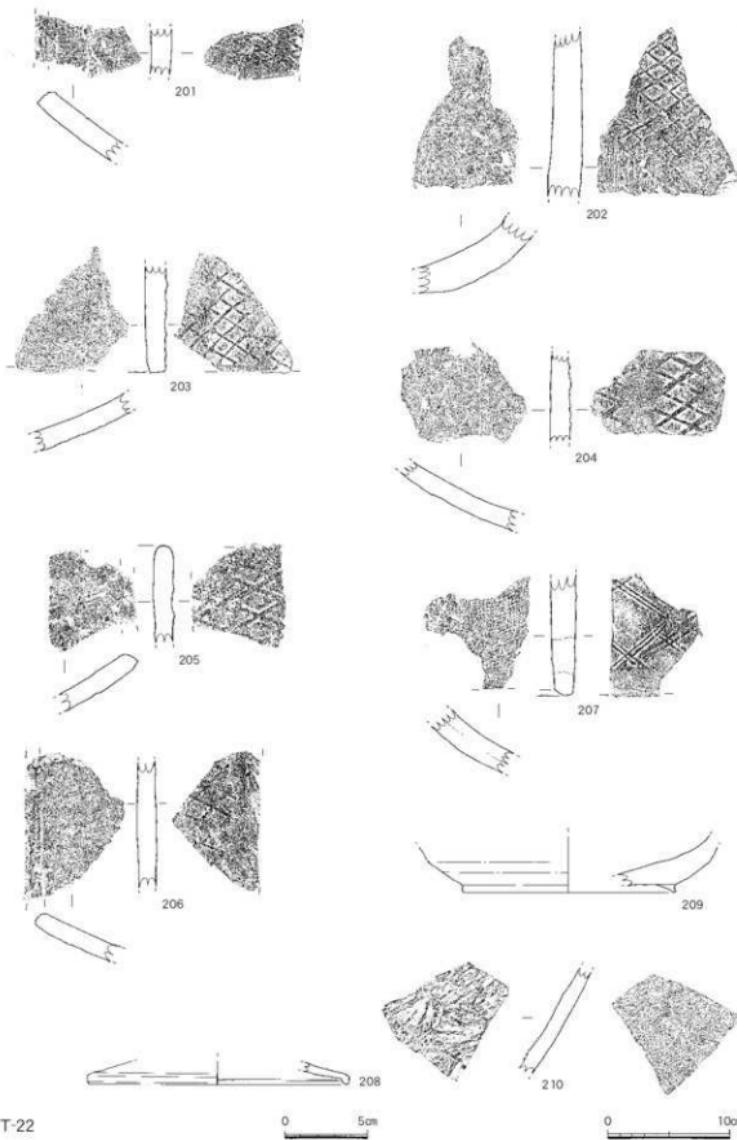
T-19はSX05の南14m延長上の池岸に東西3.5m幅50cmで設定したトレーナーで、築池時の掘削が著しく、岩盤・堆積粘土土に1m程のシルト、さらに礫・ヘドロが30~50cm堆積し、遺構・遺物とも検出されない。

6. SX06 (T-12・26) の調査 (Fig.42~48 PL-10・11)

SX06は調査区の最西部、SX05の西9m程、南北2.3m幅60cmで設定した、T-12内で窓体の東の一部を検出した。表土下60cmの花崗岩バイ欄の岩盤に掘り込まれている。上面は天井部の崩落に伴う流土による削減で、中央に向け15cm程下がり、流土が堆積する（1層）。

窓体の横断面は平坦な床面から若干胴が張り高さ75cm程の半円状の、SX05同様低い天井部に連なる。推定幅1.2~1.4m程か。底面で標高12.1mを測る。確認できる壁断面は被熱で6cm程赤化し、このうち1~2cm還元される。被熱の幅が薄く、操業回数は少ないと思われる。床面には1、2cm炭灰が堆積し（17層）、この上に20cm程瓦混じりの黒褐色土（16層）が堆積し、間層を挟んで30cm程の瓦を含む流土層（10~13層）が堆積する。さらに間層を挟んで天井部の崩落土が堆積する（2~5層）。東壁は1.1m程直線的に延びており、焼成部である可能性が高い。窓体はトレーナー内で北壁から南へ斜めに削平されており、以南での遺存状態は期待できない。出土遺物から、南に設置したT-26の溝状遺構及び直上の堆積層から出土した瓦とは一致せず、時期差があると考えられる。

出土遺物 (Fig.43~44) 211~214は平瓦。211・214は縄目叩きを縱・斜め方向のハケメで削る7b類。凹面も布目圧痕上にハケメを施す。211は側は截面。厚20~24mmと端部にかけ薄くなる。明褐灰色で軟質。214は厚18~21mm。灰白色で軟質。212・213は幅6cm程の原体に、平行四辺形の格子内に「十」を施す3Ab2類と不整の二重格子3Bb1類を連ね、双方の辻接合せ部に四角の枠をとるもので、SX01でも検出される。212は端部下5cm程から叩く。側は截面。厚13mmと薄い。暗青灰色で須恵質。213は叩きを幅狭く横に重ね、上下をナデ消す。側は内切目に破面。同じく厚14mmと薄い。暗青灰色で須恵質。215~218は丸瓦。215は縄目叩きの0類。大部分をナデ消す。側は内切目に破面。厚18mm。褐灰色で軟質。216は平行四辺形に近い單格子の3Ac類。端部から6cm程をナデ消す。側は内切目に破面。厚18mm。暗黄橙色で軟質。217は凸面に細かな縦ハケメの無文7b類。側は内切目に破面。厚24mmと厚い。灰色で須恵質。218は段際まで叩き、段下2cm程をナデ消す3Ac類。段幅16.0cm段高8.7cmを測る。厚14~22mm。玉縁凹面に絞り痕が残る。両側とも内切目に破面。灰色で須恵質。219~220は土器器坏。219は復元口径11.6cm器高4.2cm。外底は回転ヘラ切り。暗黄橙色。220は復元底径7.4cmを測る。内面は回転ナデ、外底は回転ヘラ切り。暗橙色。221は復元口径11.8cm。内外面に回転ナデ。暗褐色。



T-22

0 5cm

0 10cm

Fig.41 22トレンチ出土遺物実測図 (1/4・208~210=1/3)

T-26は、SX06の延長上の南下方1.5m程に、東西1.6m南北2.8mのグリッドを設定した(Fig.45)。表土下1.2m程の地山粘土層と西側になされた1m程の客土層(6t~v層+ α)の緩斜面に二段掘りで検出長1m程、深さ65cm程に掘削した溝状遺構の東半部を検出した。幅は2m程か。南側2/3程は近世築堤時に削平される。溝底は平坦で南に緩く下がり、上面(6f層)と20cm程上位(6n層)に礫・瓦が堆積する(下層)。T-23と状況は共通する。出土瓦の内容から、窯体SX06とは異なり、同時の構造ではない。これが埋没後、80cm程瓦を少量含む流土が堆積し(6a~6h・中層)、近世築堤時に南側が段状に開削され、3~4層(上層)が堆積する。標高10.2m程の平坦面が擁壁構築前の池岸である。2層は宅地造成・擁壁工事時の客土である。

下層出土遺物 (Fig.46) 遺物取り上げ時に中・下層遺物を混在させてしまったため、明確に下層出土と認定できるのは個別番号を付して取り上げた222のみである。222は特大単格子3Ac類の丸瓦。段下3cmまで狭い幅で横に叩きを重ねる。側は内切目に破面。凹面縦方向に紐状圧痕がある。厚20mm。灰白色で土師質。

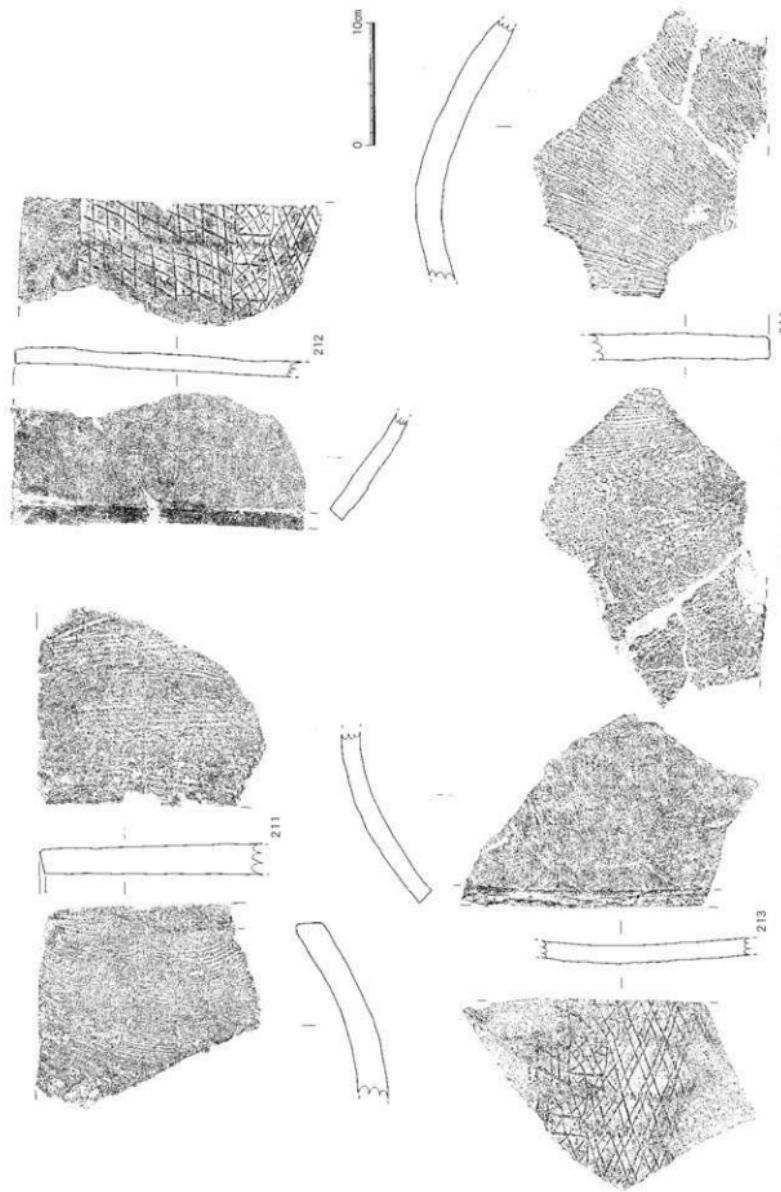
中・下層出土遺物 (Fig.46) 223は熨斗瓦か。平坦で、端部下3cm程に横に重ねて叩く3Ab類。側は内切目に破面。厚9~18mm。青灰色で須恵質。224~228は平瓦。224・225は3Ab類。224は横に叩き間を空ける。厚16mm。青灰色で須恵質。225は凹面の布压痕が粗い。厚18mm。褐灰色で土師質。226~228は3Ac類。226は狭い幅で叩きを重ねる。側は截面。厚16mm。青灰色で須恵質。227は特大の単格子で大部分をナデ消す。厚14mmと薄い。側は截面。灰色で須恵質。228は特大単格子の中に「十」を施す3Ac2類。厚20mm。青灰色で須恵質。229・230は丸瓦。229は3Ab類。縦に一部ナデ消す。側は内切目に破面。厚13mmと薄い。暗青灰色で須恵質。230は3Ac類。厚15mm。暗青灰色で須恵質。

上層出土遺物 (Fig.47・48) 近世に開削後堆積した層からの出土で、SX06出土遺物に近い物を含む。231~244は平瓦。231は縄目叩きを施す0類で、凹面布目压痕を粗い縦のハケメで削る。厚21mm。側は截面。灰白色で土師質。232は平行格子の1類。凹面に縦方向の粘土接合痕がある。側は内切目に破面。厚20mm。青灰色で須恵質。233・234は3Aa1類。233は叩き間を空ける。叩き後大部分をナデする。厚27mmと厚い。灰白色で土師質。234は3Aa1に3Aa2類が連なる。端部まで叩き、一部横にナデ消す。側は内切目に破面。厚18mm。灰色で須恵質。235は3Ab類で「警固」銘瓦の上端の可能性がある。端部まで叩き、叩き間を空ける。厚16mm。灰白色で土師質。236~241は3Ac類。236は叩きを重ね、重ね部をナデする。側は内切目に破面。厚16mm。横に歪む。暗青灰色で須恵質。237は叩き間を空ける。厚18mm。青灰色で須恵質。238は左上がりの格子内に平行線を加える。厚18mm。灰白色で土師質。239は特大の単格子で叩き間を空ける。厚21mm。灰色で須恵質。240は幅狭く叩きを重ねる。側は截面。厚15mm。青灰色で須恵質。241は原体に、3Abに3Ac類を連ね、境に四角に枠取りして「X」を施す。厚18mm。灰白色で土師質。242~244は二重格子の3B類。242は格子内に逆字の「警」を施す3Ba2で、下方に1.5cmずらして二重に叩く。厚21mm。灰白色で土師質。243は3B1類で叩き後大部分をナデする。側は截面。厚18mm。青灰色



Fig.42 SX06 (T-21) 実測図 (1/50)

Fig.43 SX06出土遺物実測図.1 (1/4)



で須恵質。244は3Ba2か。端部上4cm程に方形格子を叩く。厚13mmと薄い。褐灰色で土師質。245～247は丸瓦。245・246は3Ac類。245は端部上3cm程に叩く。側は内切目に破面。厚13mmと薄い。青灰色で須恵質。246は端部まで幅狭く重ねて叩き、大部分をナデ消す。厚13mm。灰色で軟質。247は二重格子の3Ba1で横に重ねて叩き、重ね部をナデ消す。側は内切目に破面。厚13mmと薄い。青灰色で須恵質。248は土師器高台坏で高台を欠く。復元底径7.4cm。灰白色を呈する。249は須恵器高台坏。復元高台径7.4cm。高台は外底際に付く。青灰色を呈する。

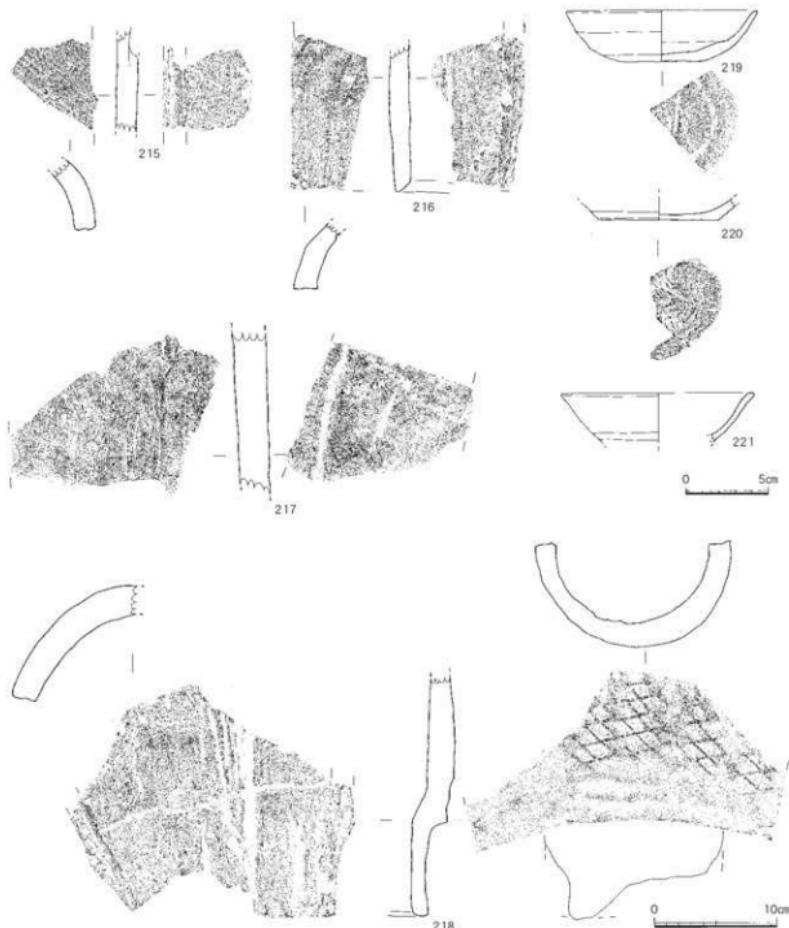


Fig.44 SX06 出土遺物実測図.2 (1/4・219～221=1/3)

7. SX07・08 (T-16・25・6・4・27・28・29) の調査 (Fig.49~62 PL-12~14)

SX07は調査区の東部、今回の調査で確認された窯群の最東部に、SX01の東10mに位置する。第2次調査での東西トレーナーT-16で検出されていたもので、表土下70cmで瓦溜まり (SX09) を、2.4m下で窯体SX07を検出している。偶然トレーナー南壁が北からの宅地造成時の掘削面と一致し、この壁面の瓦溜まりと窯体との中間で、10世紀後半に比定される黒色土器塊と土師器壺が検出され、上下の瓦の前後関係と、窯体SX07の下限時期を確定することができた。

第3次調査では、削平されたT-16北側で窯構造の確認を、遺存が良好な南側で瓦溜まりの範囲確認を主な目的として、東西5.2m南北9.5mのグリット設定を行い (T-25・27~28)、確認調査を実施した。

今回確認した窯体は、検出部で燃焼部長1.2m、高さ40cmの段 (階) をとて傾斜角23°で北に上がる焼成部が長さ70cmで遺存する地下式有階窯で、表土下1m程の混砂礫のバイ欄粘質土堆積層と花崗岩バイ欄の岩盤の地山に掘り込まれている。土層断面観察では、地山面から天井部まで約1m、床面まで1.8mの深さがある (Fig.50)。主軸はN18°Wにとる (Fig.49)。

燃焼部は最大幅2.06m、高さ0.8mと推定される。平面は胴の張る半裁錘形で、焚口に向かずぼみ、最大幅は階から40cm程の位置にある。横断面は平坦な床から40cm程上位で5cm程張る最大径部となり、70cm程上で床と同幅となる。これに連なって天井は、幅1m程崩落するが、他例から半円形をなすと思われる。窯体内に崩落した天井壁の厚さは最大25cm程で、地山上面までの厚さ1m前

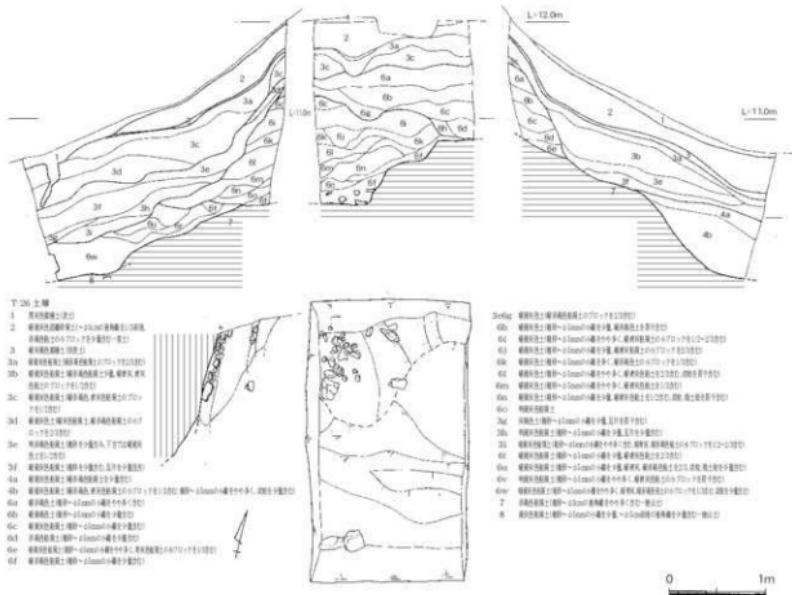


Fig.45 SX06前庭部 (T-26) 実測図 (1/50)

後の崩落は認められず、SX04の例から、瓦の窯出しの便を図るために、天井部25cm程の厚みを残して地山を幅2.6m船底状に切り下げている可能性が高い。階近くの床は平坦で、階から1.2m離れた検出部端でも平坦面を保っている。縦断面も平坦で焚口に向かって緩傾斜で上がる。焚口部は上部の物原 SX08が重なるため、未検出となっているが、縦断面でT-16の壁面から南1.7m、燃焼部床から上1.15mの床面と堆積層(5-k・m-下位物原・n層)が燃焼部に向かって下がっており(e-e'・g-g'断面)、前庭部が高位置にあることを示している。また、前庭部は奥行き2m程、幅3.15m以上、深さ20~30cm切り下げて造られており(d-d'・f-f'断面)、後にかさ上げされ中位物原が堆積する平坦面となっている。壁は被熱により焼け、確認できる部分で燃焼部で厚さ10cm焼成部で15cm程赤化され、そのうち床上15cm以上の厚さ3cm程が炭素を吸着して黒色を呈する。焼成部は遺存の端部で幅1.75mと燃焼部から30cm程狭くなる。床面に2、3cmの薄い炭粒混じりの粘質土が堆積し(b-b'・e-e'断面8層)、燃焼部でこの上に花崗岩盤の天井壁塊が堆積(7層)、焼成部床上から天井壁塊上に多くの瓦片が流入して出土しており、壁面の被熱程度も考慮し、初回の操業のみで廃棄された可能性が高い。焼成部の瓦片の出土状況は良好であったため、数点をサンプリングし、出土状況は保存している。以降この上に間層を挟んで2回小振りな天井壁塊の崩落を含んで自然に埋没し、床上80cm

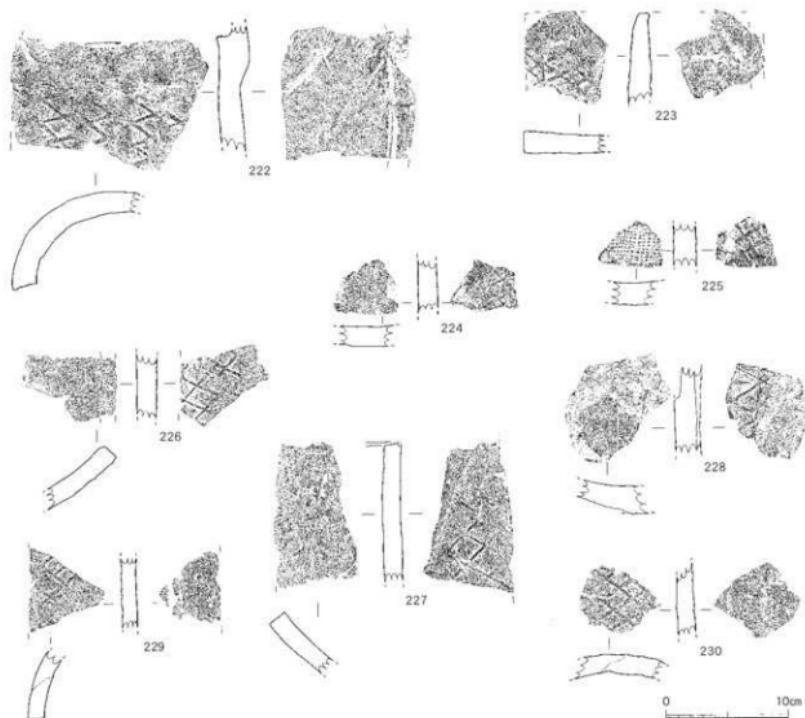


Fig.46 SX06周辺出土遺物実測図.1 (1/4)

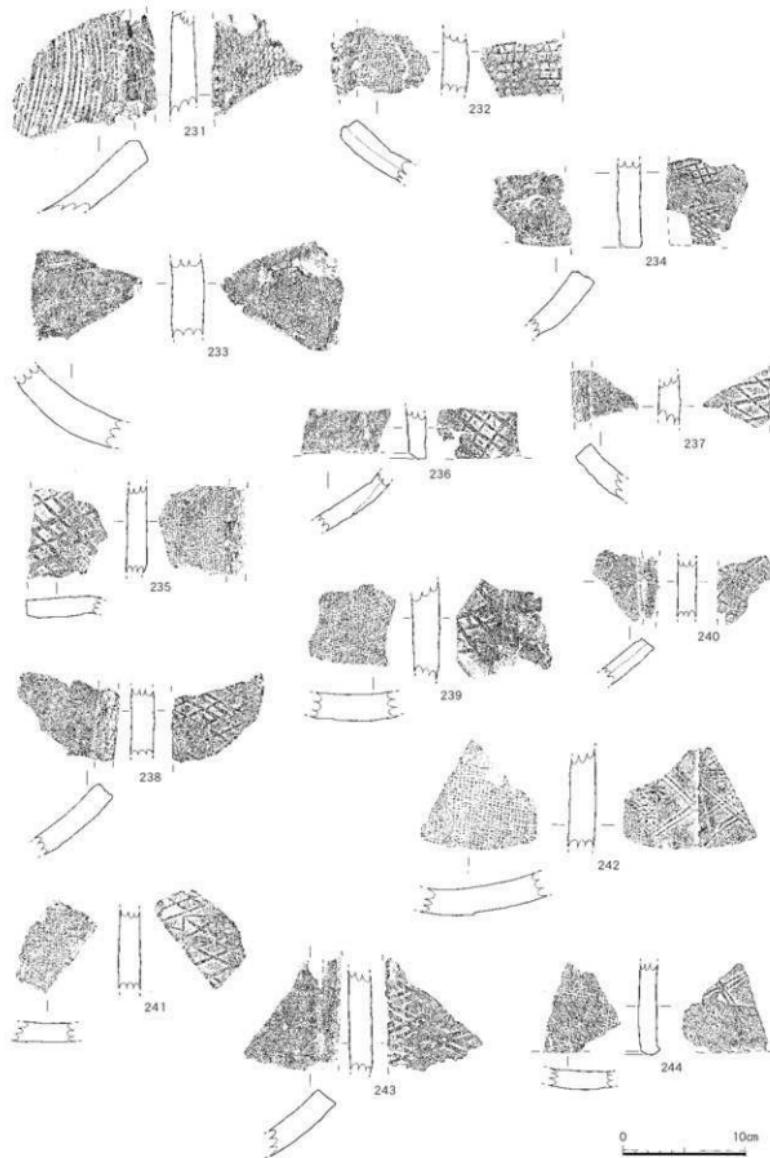


Fig.47 SX06周辺出土遺物実測図.2 (1/4)

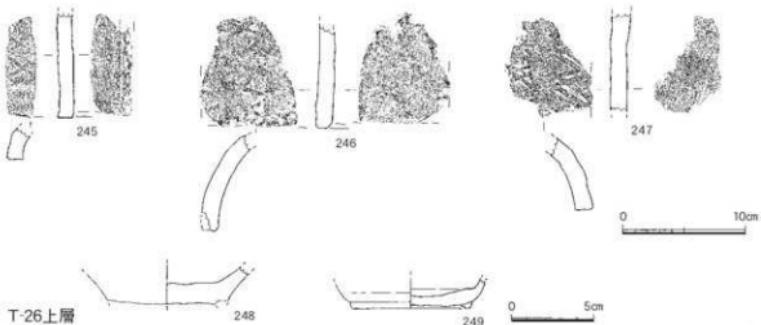


Fig.48 SX06周辺出土遺物実測図3 (1/4・248,249=1/3)

の位置で10世紀後半の土器が出土、150cm上からと(c-c'断面16層)185cm上から(11・12層)に瓦が多量に堆積する(SX08中位物原・上位物原)。

出土遺物 (Fig.51・52) 250～255は平瓦。250・251は繩目叩きの0類。250は細かな縦方向の叩きを端部まで施す。側は截面、厚25mmと厚い。褐灰色で土師質。251は同様に端部まで叩き、叩きをナデる。側は内切目に破面。厚15mm、暗褐色で軟質。252は端部下4cmに、左回りに重ねて平行四辺形に近い特小の単格子の上位に二重四角の中を4分割し右上から一文字ずつ「伊貴作瓦」銘の叩きを施す3Aa3類。側は内切目に破面。厚16～22mm。黒灰色で須恵質。253は3Aa2の叩きをナデ消す7類。厚18mm。灰色で須恵質。254は平行四辺形に近い3Aa1類。凹面に縦方向の粘土接合痕が残る。側は内切目に破面。厚19mm。黄灰色で土師質。255は斜格子に縦平行線を加える数少ない5A類で、端部下7cmから叩く。凹面端部が肥厚する。厚20mm。黄白色で軟質。256は3Ab類の熨斗瓦。端部まで叩く。厚13mmと薄い。暗橙色で軟質。257～260は丸瓦。257・258は繩目叩きの0類。257は目が粗い。部分的にナデ消す。側は内切目に破面。厚18mm。暗灰色で須恵質。258は段部下3cmから叩き、殆どをナデ消す。厚16mm。暗灰色で須恵質。259は3Ab類で段部下2cmから叩き、殆どをナデ消す。厚18mm。暗灰色で須恵質。260は平行格子叩きの1類。段際まで叩く。凹面に縦方向の紐状圧痕がある。側は内切目に破面。厚20mm。暗青灰色で須恵質。

間層出土土器 (Fig.53) 261・262は第2次調査で、窯体SX07と瓦物原SX08間、SX07の床面上80cm程の自然堆積層21～23層中から検出されたもの。261は内黒の黒色土器B類塊。口縁と高台の一部を欠く完形品で、口径15.2器高5.8cmを測る。外面は黄褐色で調整は不明。外底にはヘラ切り痕が残る。口唇から内面は黒色を呈しヨコケンマが施される。262は土師器坏で、体部の1/2を欠く。復元口径11.3器高2.3～2.6cmを測る。淡黄褐～白褐色を呈する。調整は不明。外底にはヘラ切り痕が残る。10世紀後半か。

瓦物原SX08は第2次調査のT-16で検出され、窯体SX07が埋没後 床上150cm上からと(c-c'断面16層・中位)185cm上から(11・12層・上位)で瓦が多量に堆積する。床上115cmの床面上に少量瓦が堆積するが(e-e'断面5m層・下位)、奥行き2m程、幅3.15m以上、深さ20～30cm切り下げて造られた前庭部の床上であり、SX07の物原である可能性が高い。上位物原は東西3.8m以上、北は宅地造成で削平されて不明だが南北2.5m以上ではほぼ水平に堆積する。中位物原は東西2.5m、南北2.5m以上で



Fig.49 SX07・08 (T-6・16・25・27～29) 実測図 (1/50)

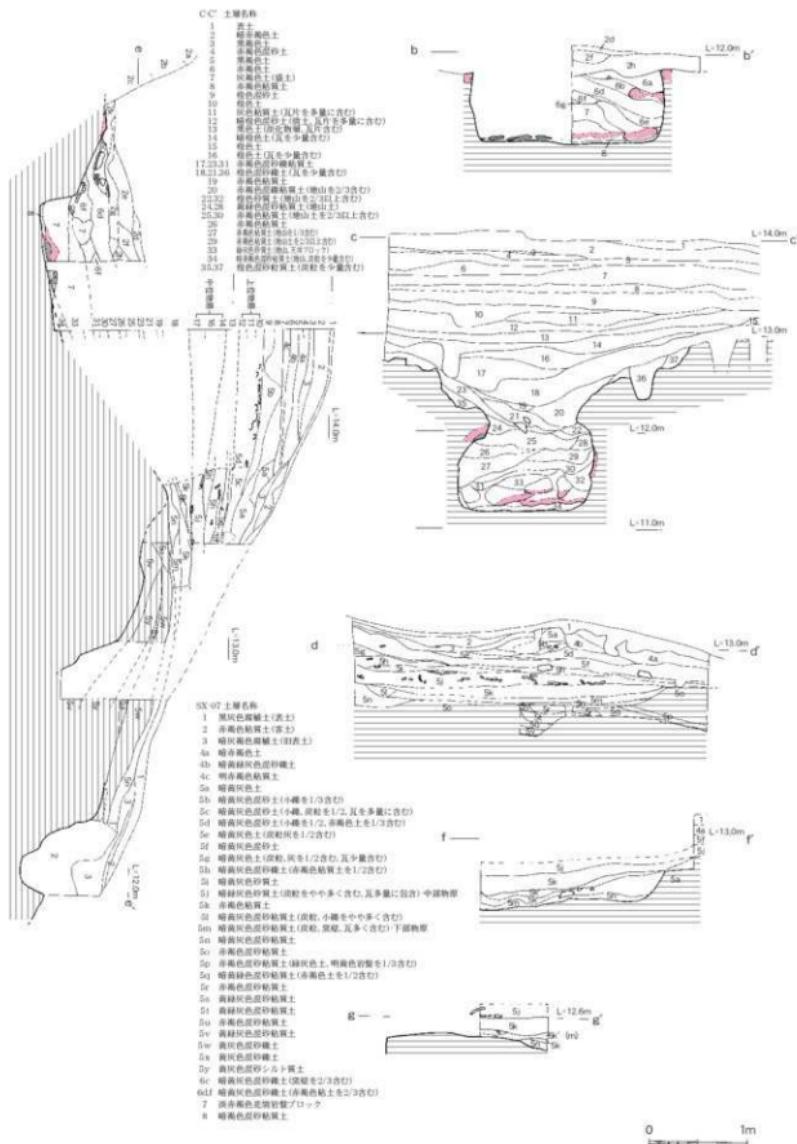


Fig.50 SX07・08 (T-25他) 土層断面図 (1/50)

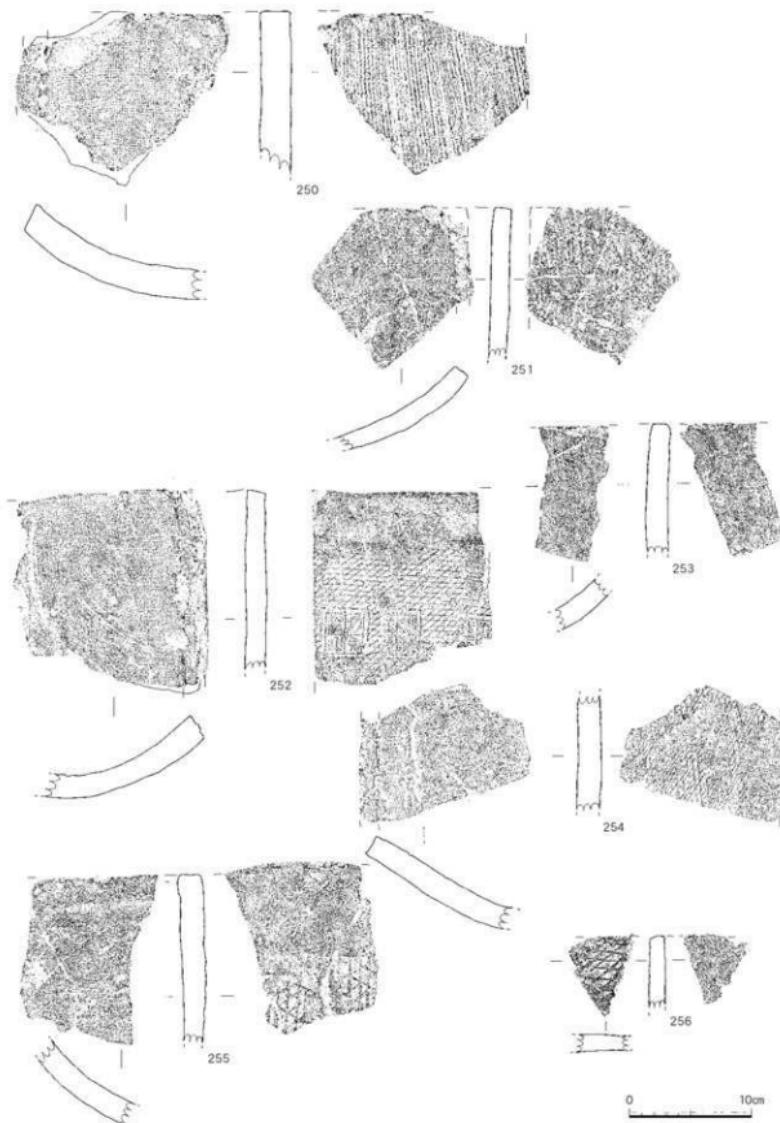


Fig.51 SX07出土遺物実測図.1 (1/4)

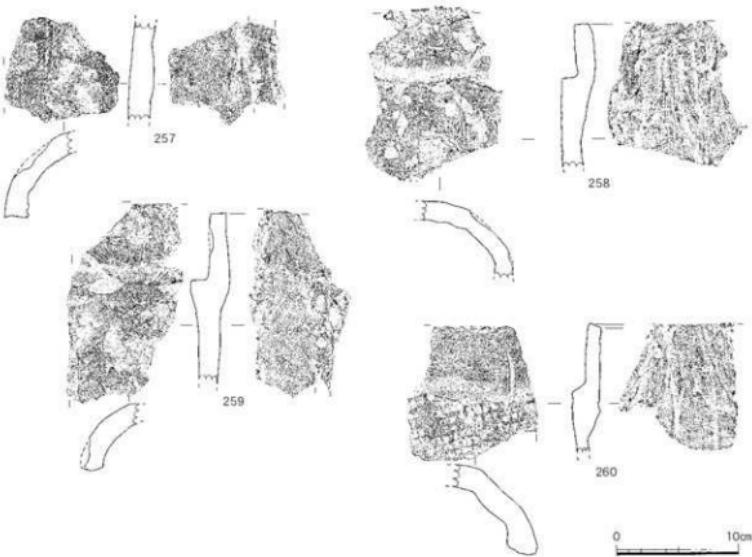


Fig.52 SX07出土遺物実測図.2 (1/4)

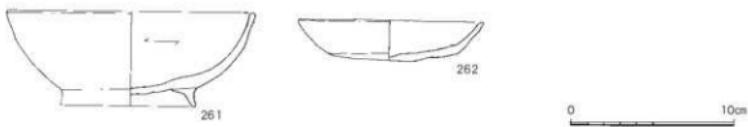


Fig.53 16トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

若干傾斜する。底面はSX07前庭部を埋めた平坦面となる。遺存状況が良好であったため、大部分を現況で保存し、南端近くを前庭部検出のため幅2m程掘削した。

下位物原出土遺物 (Fig.54) 263～267は平瓦。263・264は平行格子の1類。263は端部際まで叩く。側は截面。厚12mmと薄い。灰白色で軟質。264は破片転用の瓦玉で、 $4.7 \times 3.9\text{cm}$ 厚13mm。周縁を丸く磨り取る。265・266は単格子の3Ab類。265は端部下3cmまで叩きナデる。側は内切目に破面。厚18mmで端部は薄くなる。暗灰色で須恵質。266は四角の枠内に「×」を施す3Ab2類を重ねて叩く。厚18mm。暗青灰色で須恵質。267はナデで無文の7類。側は截面。厚20mm。灰白色で軟質。268～270は丸瓦。268は繩目叩きの0類で殆どをナデ消す。側は内切目に破面。厚17mm。暗青灰色で須恵質。269・270は平行格子の1類。269は2片が接合した完形品。全長30.8cm、狭端で10.5cm広端で18.0cm、高さは広端で7.5cm玉縁で5.5cmを測る。厚15～25mm。段際まで叩き、広端から7cm程はナデ消す。凹面玉縁には絞り痕が残る。両側は内切目に破面。灰白色で軟質。270は下端から4cm上を叩き大部分をナデ消す。側は内切目に破面。青灰色で須恵質。「伊賀作瓦」を含まないが、多くがSX07内瓦と共通する。

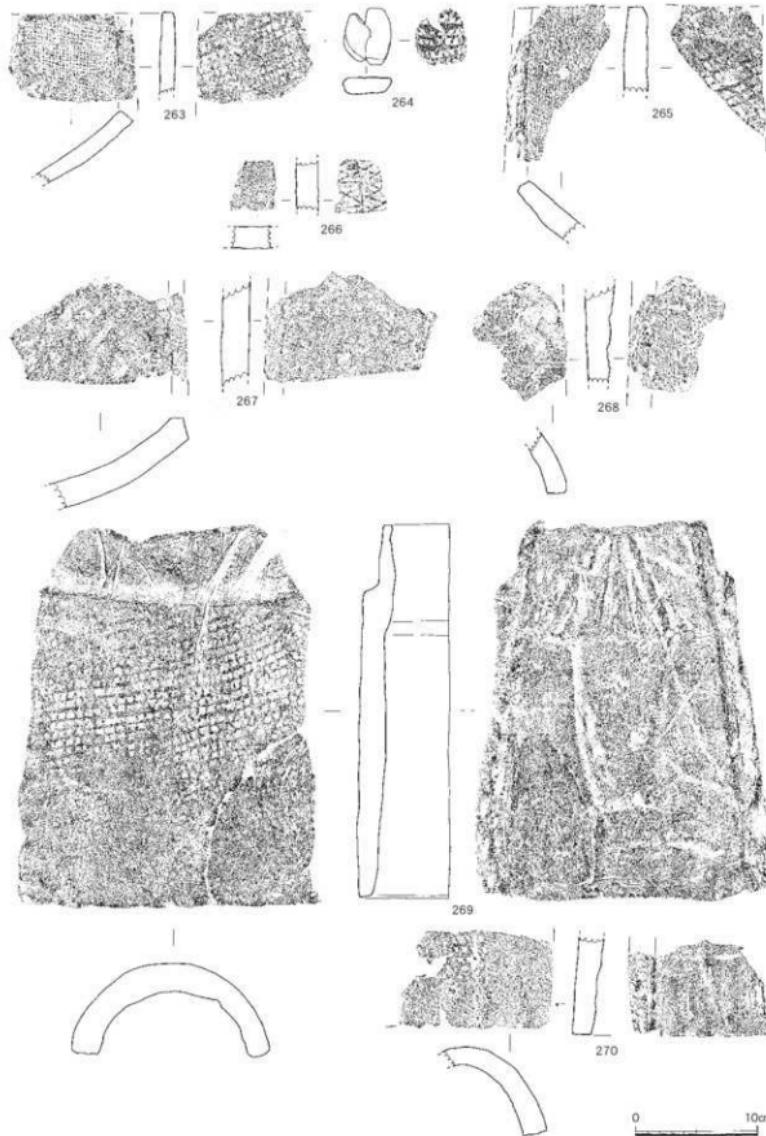


Fig.54 25トレンチ下位物原出土遺物実測図 (1/4)

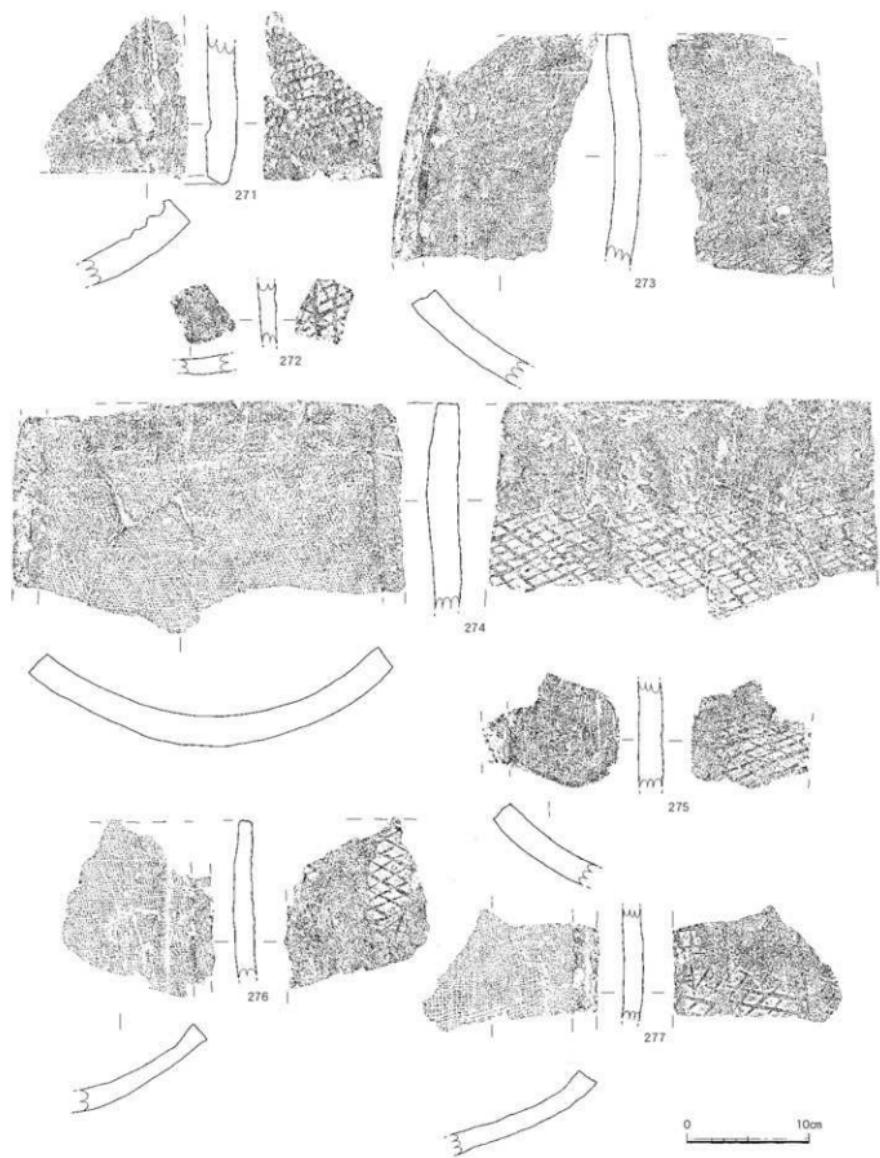


Fig.55 25トレンチ中位物原 (SX08) 出土遺物実測図.1 (1/4)

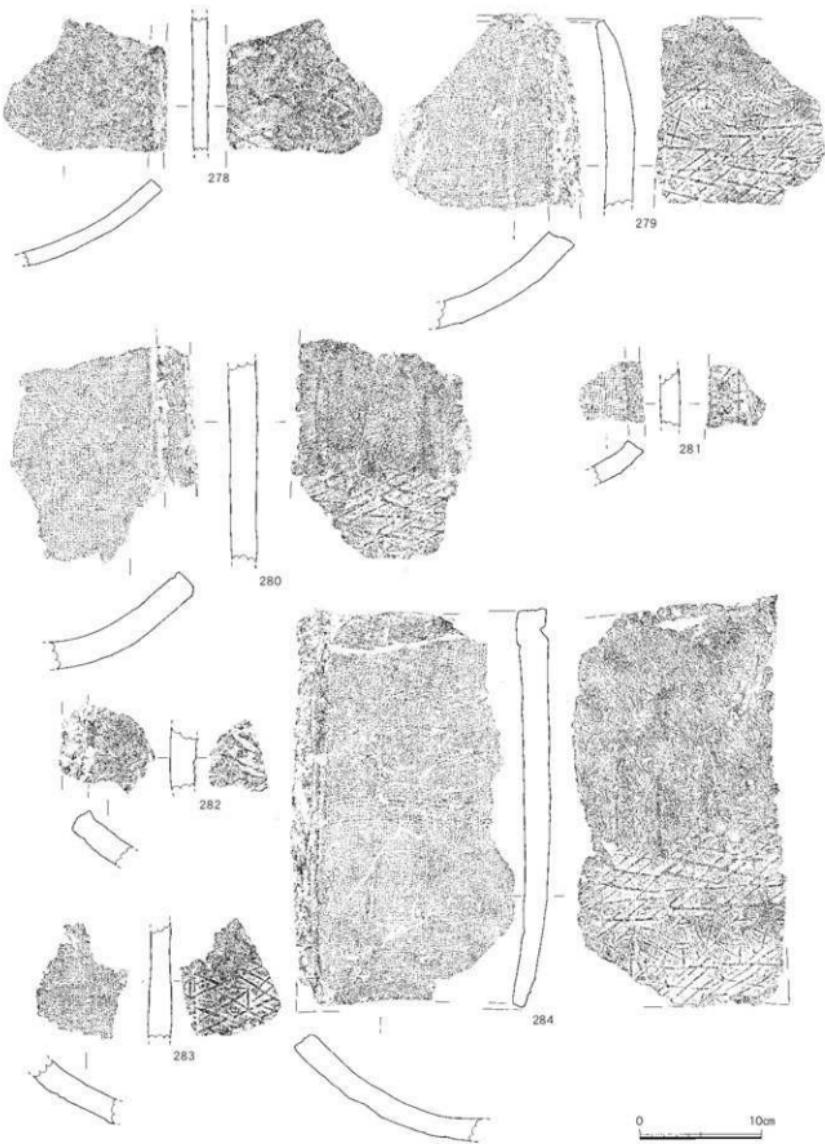


Fig.56 25トレンチ中位物原 (SX08) 出土遺物実測図.2 (1/4)

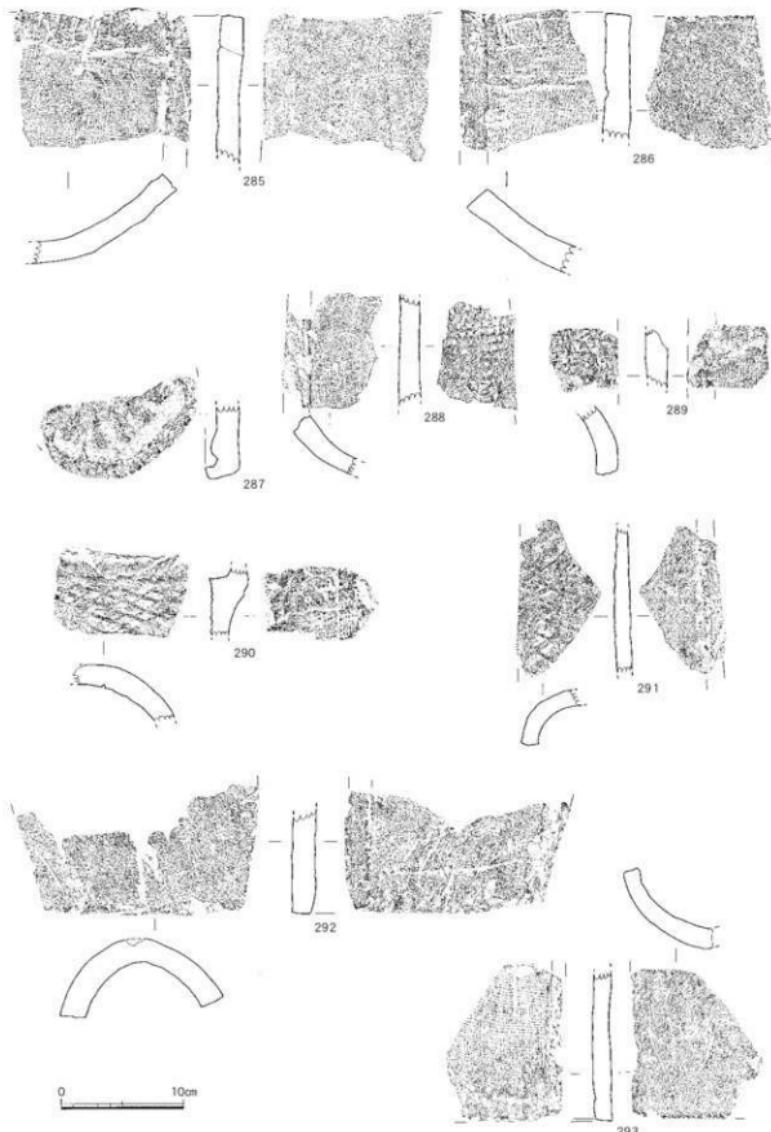


Fig.57 25トレンチ中位物原 (SX08) 出土遺物実測図.3 (1/4)

中位物原出土遺物 (Fig.55~57) 271~286は平瓦。271は1類。下端2cm上まで叩く。側は截面。厚20~25mmと厚い。暗灰色で須恵質。272は数少ない5A類。厚14mm。灰白色で軟質。274・276・277は3Ab類。274は上端下8cm程から幅狭く叩きを重ねる。端幅29.8cm。凹面右側は截面、左側は内切目に破面。厚20mm。灰白色で軟質。276・277は3Ab2類で單格子に「今行」の逆字体を加える。276は叩き間を空け下半をナデ消す。凹面に縦の紐状压痕がある。側は截面。厚11~16mmで端部が薄くなる。褐灰色で土師質。277は幅7cm程の原体で重ねて叩き部分的にナデ消す。側は内切目に破面。厚16mm。暗灰色で須恵質。273・275は左上がりの平行線が右上がりの1/2程の3Ac斜格子で279以下の「今行」銘瓦と同種の可能性がある。273は端部下15cmに叩く。側は内切目に破面。厚21mm。青灰色で須恵質。縦に歪む。275は上部をナデ消す。側は内切目に破面。厚20mm。明青灰色で軟質。278 (Fig.56) は3Ac類。幅狭く叩きを重ね全体をナデする。側は截面。厚12mmと薄い。灰白色で土師質。279~281・284は左上がりの平行線が右上がりの1/2程の3Ac斜格子で原体上下位の2本と1本の平行線間に「今行」の逆字体を加えるもの。279は端部下5cm程から幅狭く叩きを重ねる。側は内切目に破面。厚22~7mmと端部が極端に薄くなる。灰色で須恵質。280は端部の11cm以上下から叩き、凹面側部に布折込痕がある。側は内切目に破面。厚21mm。青灰色で須恵質。281は文字部の小片で、側は截面。厚15mm。灰褐色で土師質。284は全長33.1cm。端部下19cmから幅狭く叩きを重ねる。凹面端部が肥厚する。側は内切目に破面。厚24~10mmと下端部が極端に薄くなる。灰色で須恵質。縦に若干歪む。282は軒平状の区画内に子葉を施す。側は内切目に破面。厚20mm。青灰色で須恵質。283は原体に、3Abに3Ac類を連ね、境に四角に枠取りして「×」を施す。厚18mm。褐灰色で土師質。285・286 (Fig.57) はナデによる無文の7類。285は凹面端部下に布折込痕がある。側は截面。厚18mm。青灰色で須恵質。286は側は截面。厚21mm。青灰色で須恵質。287は軒丸瓦で、大宰府分類には無い。復元径14.8cm。厚28mm。外区と複弁の輪郭線を省き、中房は不明。灰白色で軟質。288~293は丸瓦。288は1類の平行格子。部分的にナデ消す。側は内切目に破面。厚20mm。青灰色で須恵質。289は6B類か。側は内切目に破面。厚18mm。褐灰色で軟質。290は3Ab類。段際まで叩く。凹面横方向に粘土接合痕がある。291は3Ac類。幅狭く重ねて叩き、重ね部をナデする。側は内切目に破面。厚13mmと薄い。暗青灰色で須恵質。292・293はナデによる無文の7類。292は凹面左側は截面、右側は内切目に破面。端幅13.5cm高6.0cmを測る。厚18mm。灰白色で土師質。293は凹面端部下2cm程に布の折込痕。側は内切目に破面。厚15mm。灰白色で軟質。

上位物原出土遺物 (Fig.58~59) 294~308は平瓦。294~296は3Ab類。294は3Ab3類「警固」銘瓦の下端部。端部下6cm程に縦菱形の單格子を叩く。側は内切目に破面。厚18~24mmと端部が厚い。灰白色で軟質。295は横に重ねて叩き、重ね部をナデする。側は内切目に破面。厚16mm。青灰色で須恵質。296は單格子に「L」の枠を取り「×」を施す3Ab2類。側は内切目に破面。厚17mm。明青灰色で須恵質。297は平行格子の1類。端部際まで叩き、叩き間を空ける。厚25mm。褐灰色で軟質。298~302は特大の單格子3Ac類。298は格子内に「十」を施す3Ac2類。端部上2cmから叩く。厚17mm。明青灰色で須恵質。299は端部下10cmから叩き大部分をナデ消す。側は内切目に破面。厚32mmで厚い。暗黄橙色で軟質。300は格子内に「*」・「◆」を施す3Ac2類。側は截面。厚23mmと厚い。褐灰色で全面に薄く丹塗りを施す。土師質。301は格子内に「*」を施す3Ac2類。端部・側が21mmと肥厚する。側は截面。褐灰色で全面に薄く丹塗りを施す。軟質。302は格子内に「十」を施す3Ac2類で叩き間を空ける。側は截面。厚20mm。暗橙色で土師質。303・304は特大二重格子の3Ba1類。303は端部際まで叩き、叩き間を空ける。側は截面。厚15mm。黒色で瓦質。304も叩き間を空けるが叩きの大部分をナデ消す。側は内切目に破面。厚23mm。褐灰色で軟質。305は3Ab2類「今

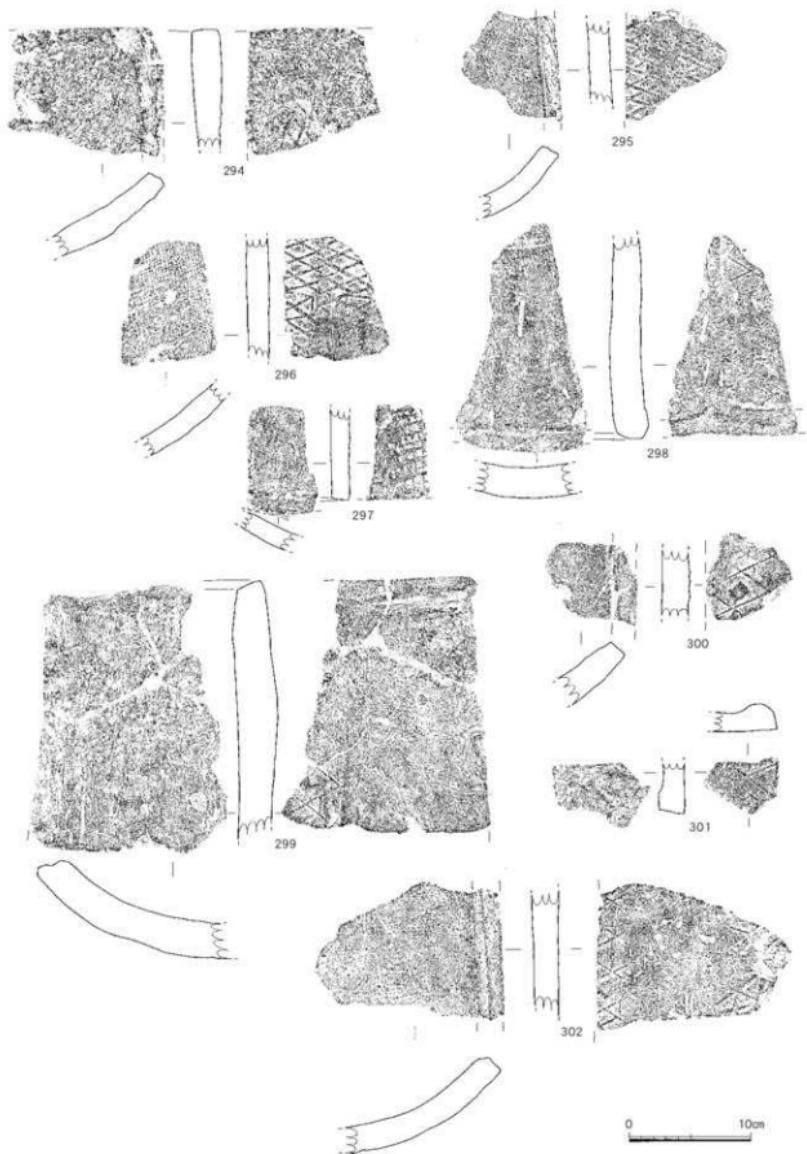


Fig.58 25トレンチ上位物原 (SX08) 出土遺物実測図.1 (1/4)

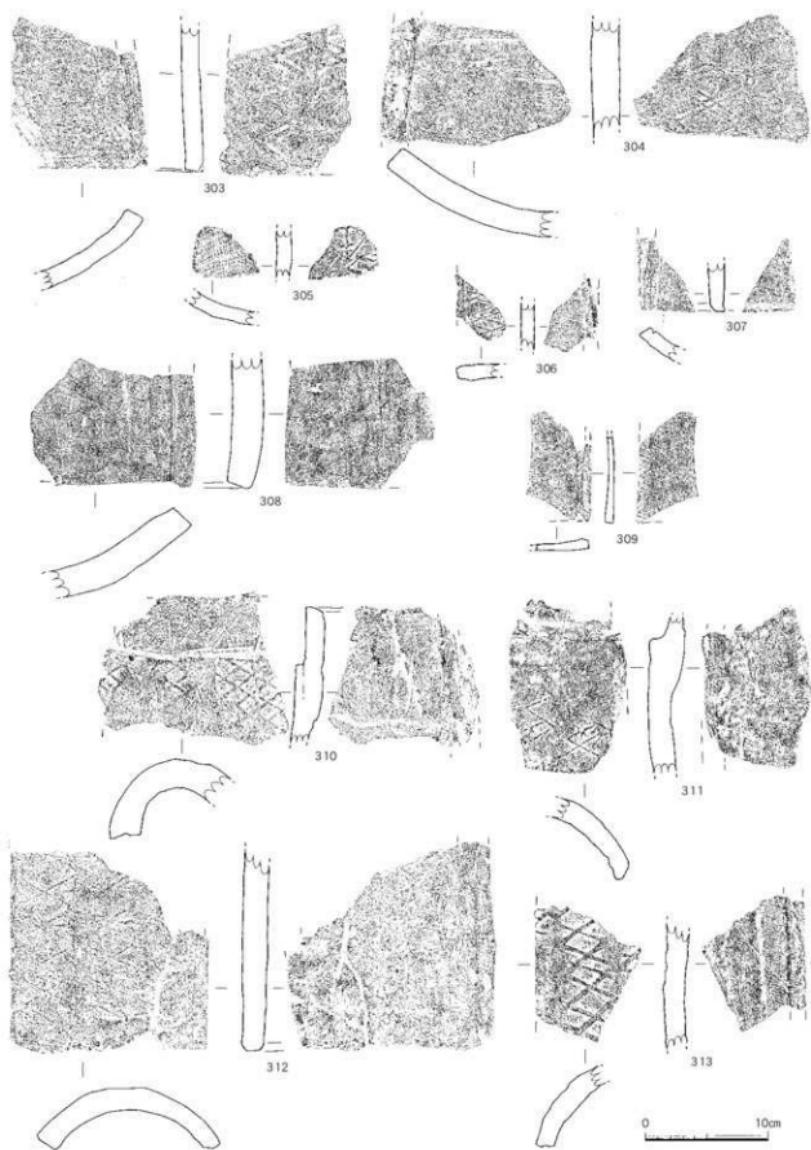


Fig.59 25トレンチ中位物原 (SX08) 出土遺物実測図.2 (1/4)

行」銘瓦。厚12mmと薄い。青灰色で須恵質。306は3Bb1類。叩き間を空ける。側は截面。厚12mmと薄い。灰白色で土師質。307・308はナデによる無文の7類。307は凹面側に布折込痕がある。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚12mmと薄い。暗青灰色で須恵質。308はケズリ様のヘラナデ。側は截面。青灰色で須恵質。309は道具瓦。格子内に「十」を施す3Ac2類。側は截面。厚7mmと極めて薄い。青灰色で須恵質。310~314は丸瓦。310は方形の単格子3Ab類。段際まで幅狭く重ねて叩く。下の大部分をナデ消す。凹面横方向に粘土接合痕がある。側面は内切目に破面。厚27mmと厚い。暗青灰色で須恵質。311~313は特大単格子の3Ac類。311は段下4cmから叩き、格子内に「*」を施す3Ac2類。幅狭く重ねて叩く。側は截面。厚20mm。暗橙色で軟質。312は端部2cm上から叩き、格子内に「十」を施す3Ac2類。幅狭く重ね、重ね部をナデる。側は截面。厚14~20mm。灰白色で軟質。313は左上がりの2連の格子に平行線を加える。幅狭く重ねて叩き、重ね部をナデる。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚17mm。青灰色で須恵質。

T-25・27・29中層出土遺物 (Fig.60) 中層は近世掘削以降の堆積土(4層)である。

314~319・322・323・328は平瓦。314は1類。広端は截面。厚は15mm。灰色で瓦質。315は3Aa2類。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚は16mm。灰色で瓦質。316は3Ab類で叩き後ナデ。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚は17mm。青灰色で須恵質。317は3Ac類。厚は16mm。青灰色で須恵質。318・319は3Ba1類。318の厚は18mm。灰色で瓦質。319の厚は18mm。灰白で瓦質。322は3Bb類。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚は16mm。青灰色で須恵質。323は3Bb1類。厚は11mmと薄い。灰白色で瓦質。328は3Ac2類。厚は18mm。灰色で瓦質。

320・321・324~327は丸瓦。320は3Ab3類「警固」銘。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚は15mm。青灰色で須恵質。321は3Ab類。叩き間を空ける。厚は14mm。灰色で瓦質。324は丸瓦。格子内に「+」文を施す3Ac2類。叩き間を空ける。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。丹塗りを施す。厚は16mm。黄橙色で軟質。325は花文を施す3Ac2類。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。狭端は截面。厚は14mm。灰色で瓦質。326は3Ac類。叩き間を空ける。厚は19mm。灰白色で瓦質。327は3Ac2類で格子内に鉤文を施す。玉縁部を強くナデる。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚は22mm。灰色で瓦質。

329は青磁碗片。口縁は外反、端部は平坦。330は須恵器蓋片。端部は断面三角形状につまみ、丸く仕上げる。青灰色で須恵質。

T-25・27・29上層出土遺物 (Fig.61・62) 上層は表土(1層)・客土(2層)・旧表土(3層)の搅乱層である。

331~345は平瓦。331は3Aa1類で狭端付近はナデ消す。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚は26mmと厚い。灰色で瓦質。332は1類。狭端は截面。厚は14mmと薄い。青灰~灰白色で瓦質。333は3Ab類か。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚は13mmと薄い。青灰色で須恵質。334・335は3Ab3類「警固」銘。334の厚は16mm。褐灰色で瓦質。335の側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。広端は截面。厚は15mm。灰色で硬質。336は3Ac類。狭端は截面。厚は12mmと薄い。灰色で瓦質。337は3Ab類。叩き間を広く空ける。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。狭端は截面。厚は17mm。灰色で硬質。338・339は3Ac類。338の側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚は19mm。青灰色で須恵質。339の側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚は15mm。褐灰色で硬質。340は格子内に鉤文を施す3Ac2類。側と広端は截面。厚は15mm。暗青灰色で須恵質。341は格子内に「+」文を施す3Ac2類。側は凹面側を面取り。丹塗り。厚は22mm。灰白色で軟質。342は3Ba2類の二重格子。側は截面。厚は16mm。赤灰色で瓦質。343は3Ba類。側は截面。

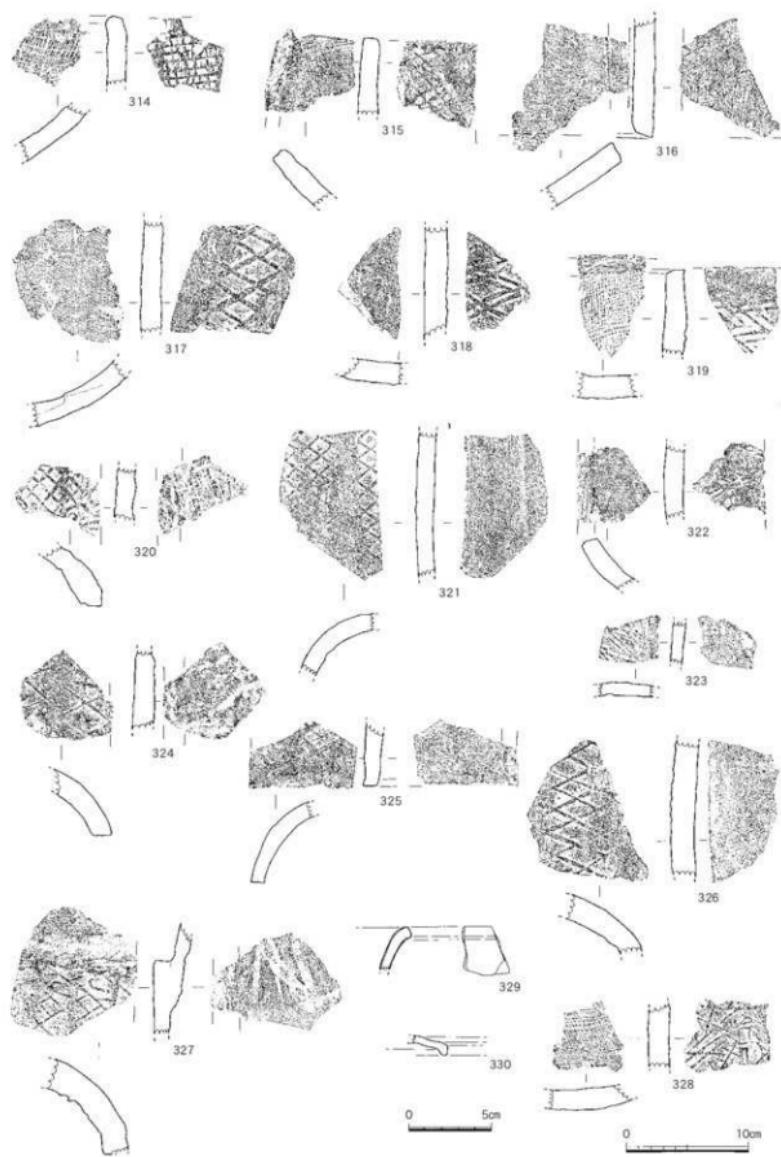


Fig.60 25・27・29トレンチ中層出土遺物実測図 (1/4・329・330=1/3)

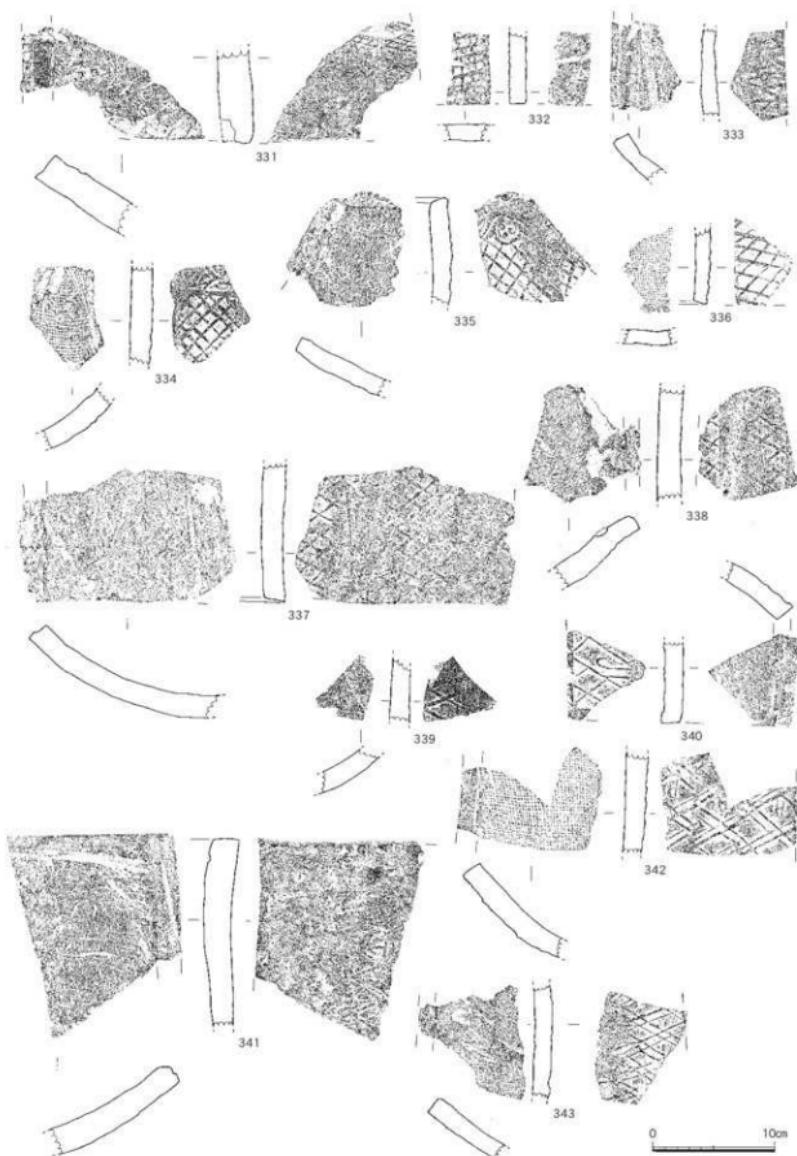


Fig.61 25・27・29トレンチ上層出土遺物実測図.1 (1/4)

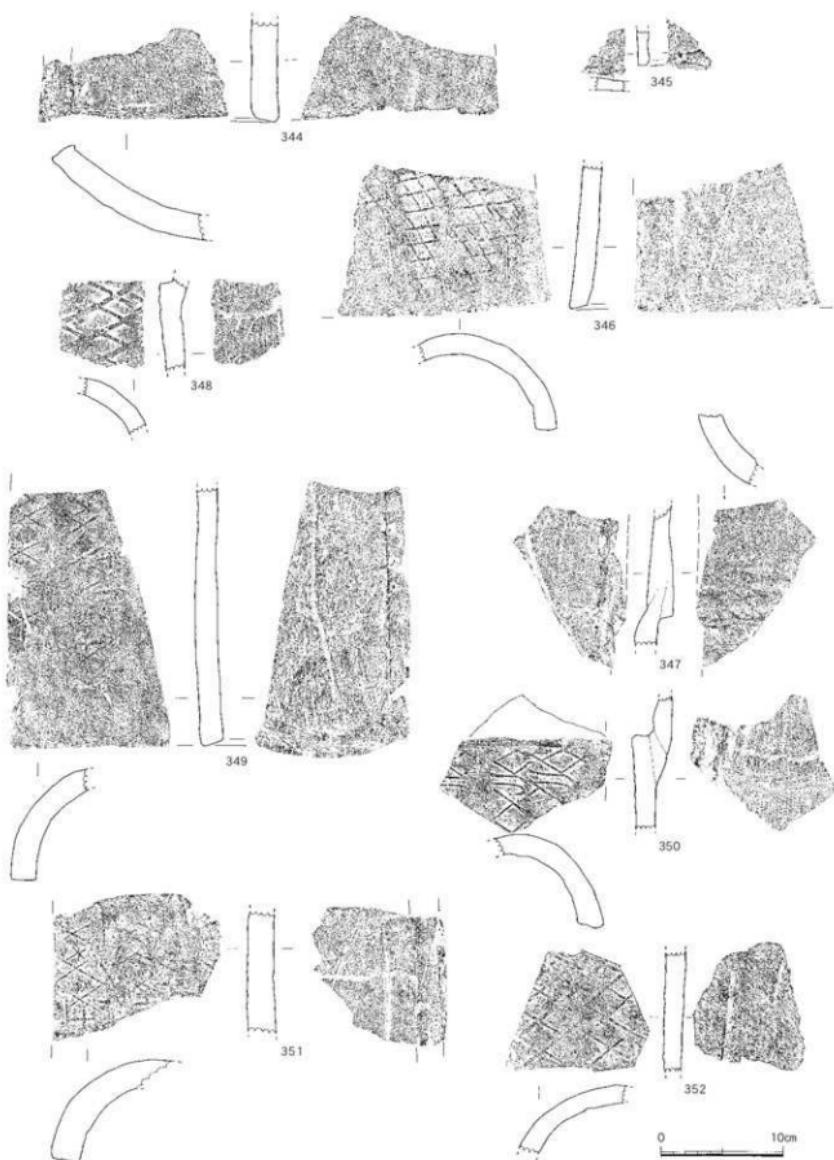


Fig.62 25・27・29トレンチ上層出土遺物実測図.2 (1/4)

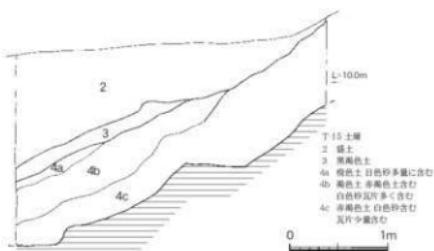


Fig.63 15トレンチ土層断面図 (1/50)

は19mm。青灰色で須恵質。348の厚さは16mm。青灰色で須恵質。349～351は3Ac2類。349の側と狭端は截面。厚さは17mm。灰白色で軟質。350は格子内に鉤文を施す。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚さは17mm。灰色で瓦質。351は「*」「+」を施す。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚さは23mm。灰白色で瓦質。352は3Ac類。厚さは14mm。青灰色で須恵質。

8. T-15の調査 (Fig.63)

T-15はSX07は調査区の西部、SX04・05間の斜面下に、南北1.6m東西60cmで設定した。トレンチ北側で、表土下90cm程から斜面に沿って犬走りを設けて段状に地山が掘削されており、近世築堤時の削平と考えられる。掘削後流土が堆積し（4層）、旧表土が形成されて（3層）、擁壁工事で裏込めの客土（2層）が成される。瓦は4b層から多く、4c層から少量検出されている。

出土遺物 (Fig.64) 353～358は平瓦。353は0類縄目叩き後タテハケ。側は截面。厚さは24mm。青灰色で須恵質。354は3Ac類。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚さは21mm。黄橙色で軟質。355は3Ac類で狭端付近はナデ消す。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚さは19mm。青灰色で須恵質。356は格子内に「×」を施す3Ac2類。側は截面。厚さは14mm。褐灰色で硬質。357は格子内に「+」を施す3Ac2類。側は截面で凹面側を面取り。厚さは20mm。褐灰色で軟質。358は3Ac類。側と広端は截面で面取りする。厚さは22mm。灰白色で瓦質。

359・360は丸瓦。359は3Ab類。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚さは16mm。青灰色で須恵質。360は3Ac類。玉縁付近はナデ。厚さは19mm。青灰色で須恵質。

9. その他の出土遺物 (Fig.65～67)

363・364・366は平瓦。363は3Ba1類。厚さは25mm。灰白色で軟質。364は3Ac類。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。狭端は截面。厚さは16mm。青灰色で須恵質。366は3Ac2類+3Ab類。側は截面。厚さは16mm。青灰色で須恵質。

365は丸瓦で、格子内に「+」を施す3Ac2類。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚さは22mm。褐灰色で硬質。

367は軒丸瓦208C類。接合した丸瓦は剥落。瓦当厚は28mm。オリーブ灰色で瓦質。

368は軒平瓦。上外区は蓮珠文、内区は唐草文だが磨滅により不明。包込技法。灰色で瓦質。

369～376・378・380・382は平瓦。369は3Aa3類「伊賀作瓦」で叩き間を空ける。厚さは15mm。灰色で硬質。370は3Bb1類。側と狭端は截面。厚さは19mm。青灰色で須恵質。371は格子内に「*」を

厚さは14mm。灰色で瓦質。344は全体をナデる7類。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚さは22mm。灰色で瓦質。345は道具瓦か。0類。広端は凸面側を面取り。厚さは9mmと薄い。青灰色で須恵質。

346～352は丸瓦。346～348は3Ac類。346は叩き間をナデる。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚さは16mm。灰色で軟質。347の側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚さは17mm。灰色で瓦質。348の側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚さは17mm。青灰色で須恵質。

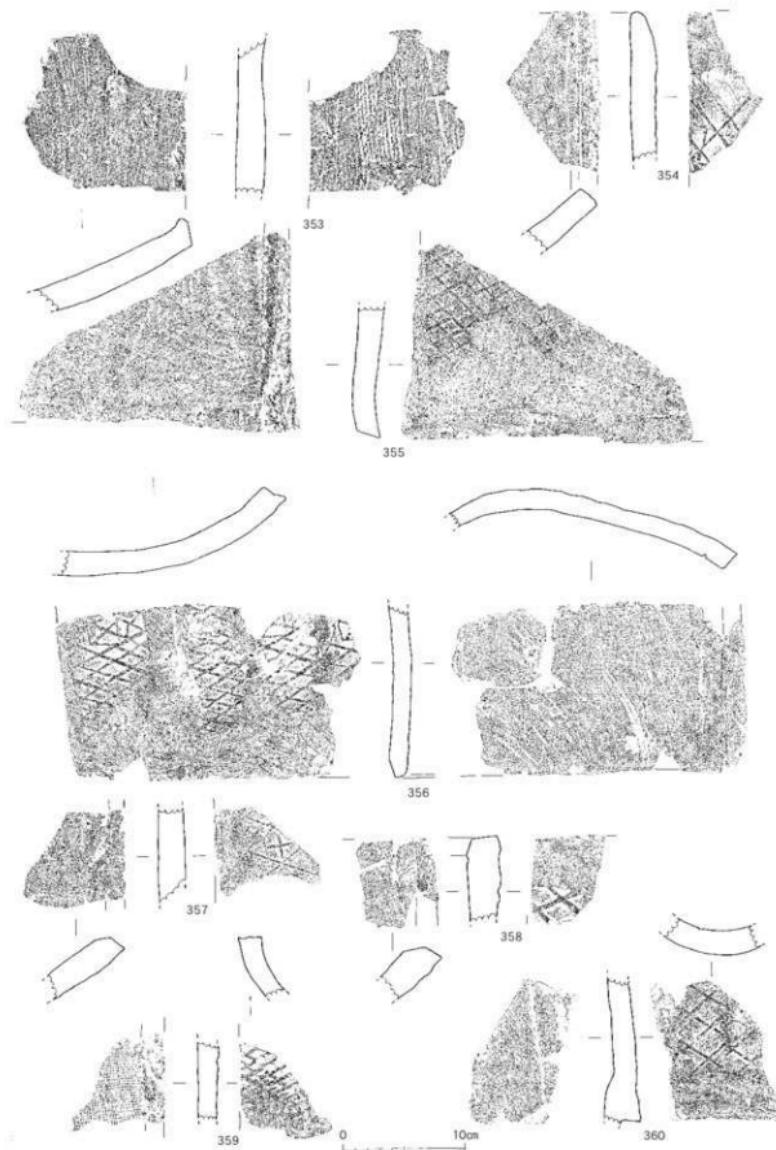


Fig.64 15トレンチ出土遺物実測図 (1/4)

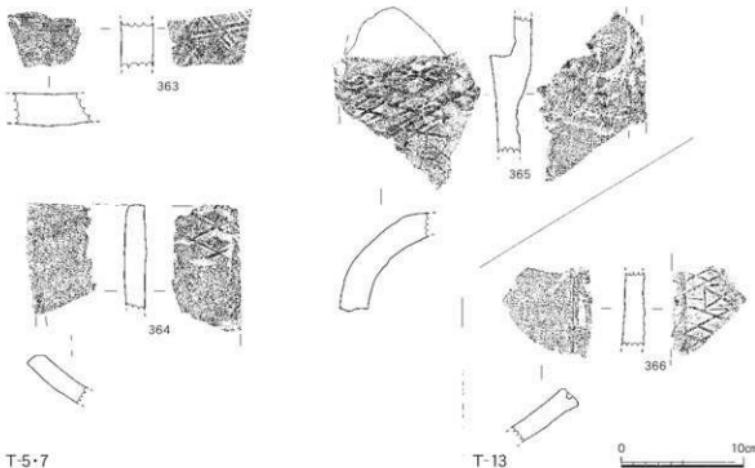


Fig.65 5・7・13トレンチ出土遺物実測図(1/4)

施す3Ac2類。側は截面で凸凹面ともに面取り。厚は15mm。明青灰色で軟質。372は3Ba類。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚は39mmと非常に厚い。暗青灰色で須恵質。373は格子内に「+」を施す3Ac2類。側は截面。厚は19mm。灰白～褐灰色で軟質。374は3Ac類。格子内に二重線。厚は20mm。灰色で瓦質。375は格子内に「×」を施す3Ac2類。厚は20mm。灰色で軟質。376は3Ac2類。格子内に二重線。側は截面。厚は19mm。青灰色で須恵質。378は3Ab3類「警固」銘。側は截面。厚は16mm。灰色で軟質。厚は14mm。灰色で瓦質。380は格子内に「+」を施す3Ac2類。側は截面。丹塗りを施す。厚は21mm。褐灰～灰白色で軟質。382は3Ac2類。厚は16mm。灰白色で軟質。

377・379・381は丸瓦。377は0類。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。焼き歪む。厚は14mm。青灰色で須恵質。379は格子内に「-」を持つ3Ac2類+3Ab類。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。381は格子内に「+」に施す3Ac2類。叩き間を空ける。側面は凹面側に截面、凸面側に破面を残す。厚は14mm。青灰色で硬質。

383は道具瓦。全体に丹塗り。厚は21mm。黄灰色で土師質。

384～387は須恵器。384は高坏の脚端部。青灰色で須恵質。385～387は蓋。385は口径10.5cm。青灰色で須恵質。386は口径10.7cm。灰白色で軟質。387は天井部に灰かぶり。灰白色で硬質。

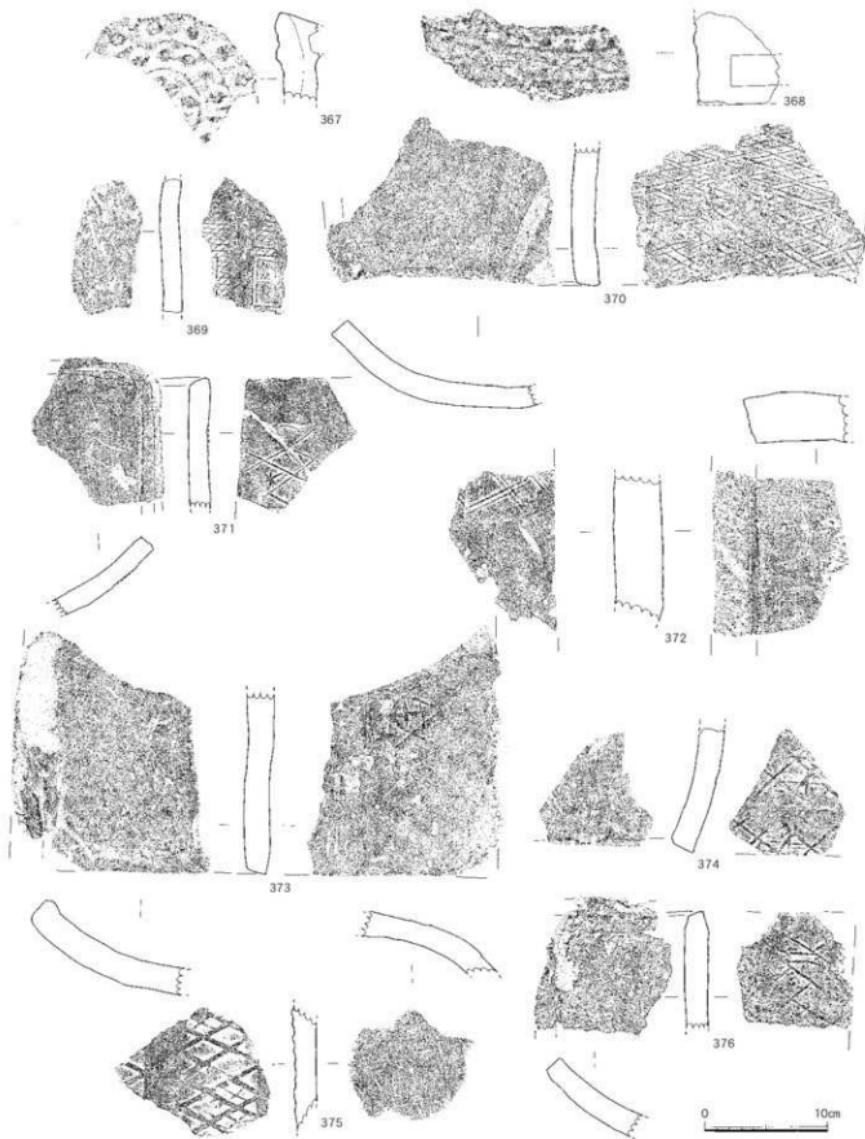


Fig.66 表採その他の出土遺物実測図.1 (1/4)

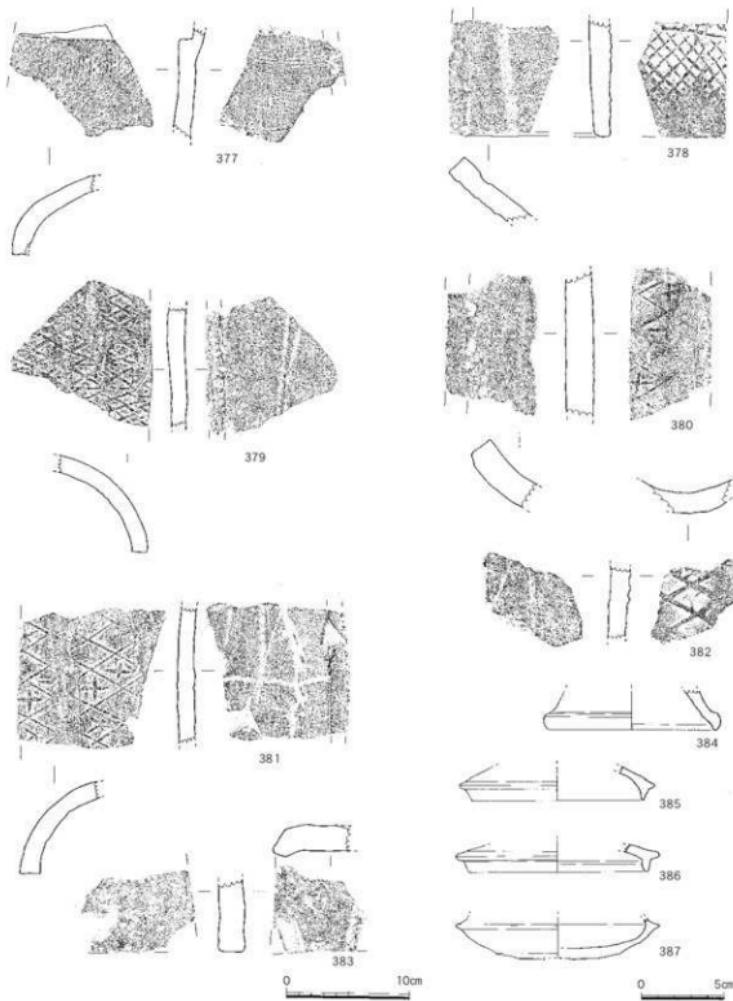


Fig.67 表探 その他の出土遺物実測図.2 (1/4・384~387=1/3)

V. 小結

今回の調査では、第2次調査で23本（T-1～19・A～D）、第3次調査で10本（T-20～29）のトレレンチ・グリッドを、斜ヶ池の北堰堤と池底に設置して確認調査を実施し、堰堤部で地形の直交方向に並ぶ平安時代の瓦窯跡7基（SX01～SX07、1基は未完成か）、瓦溜まり2箇所（SX08・09）、溝、炉、柱穴を検出した。池底は削平が著しく、何も検出されていない。また、踏査により、池南斜面で瓦を含む20～50cmの包含層を確認している。遺物は瓦を主にコンテナケース25箱分を検出。

窯は旧地形の、SX03・04あたりを最高所とした微高地稜線の両側に平行してほぼ均等に分布している。第1次調査区の推定地はさらに西にあたり、西側の住宅地まで広がっている可能性は高い。T-21・T-25では作業面・窯体上に瓦の物原が形成されており、斜面下位から上位へ窯跡が移動していることが確かめられる。昭和27年の高野弧鹿氏の調査でも上下3段に並ぶ窯跡が報告されており、北側に存在した斜面上位にも数段にわたって分布した、大規模な窯跡群であったと推定される。

今回検出した窯の状況は、SX01は北側宅地造成時の崖面で断面を確認。窯体は南の堰堤部に遺存する。地山と、客土層にわたって幅1.75m、天井は削平され残存で深さ40cm程を検出。床の一部と壁に焼土ブロック混じりの粘土を張って平坦な床面をつくる。焼成の痕跡はなく、内部に瓦・焼土粒を含む屑が堆積し、窯築造途中で廃棄されたものか、窯前庭部と思われる。SX01の延長線上に幅85深さ15cm程の浅い溝があり、床面レベルは平坦面が15cm程SX01床面より高くなる。

SX02は同じ崖面で断面を確認。同じく南側に窯体が遺存する。最大径で1.52残存高1.02mを測る。壁断面は被熱で最大25cm赤化する。床に高さ30cm程多量の瓦が出土する。天井部塊が内部に落ち込まず、窯出し時の破壊とすると燃焼部の可能性が高い。

SX03も同じく崖面で断面を確認。堰堤部に窯体が遺存する。横断面は楕円形に近い。最大径で2.05m天井は削平され残存高80cm。断面は被熱で最大20cm赤化し、形態から燃焼部の可能性が高い。

SX04は残存長2.0m最大幅1.75m残存高1.15mで、燃焼部が主に残り、50cmの段差（階）をもって焼成部が長さ15cm遺存する。形態は太宰府市来木2号窯に類似し、同じ地下式有階無段登窯と考えられる。主軸をN-16°-Wにとる。燃焼部は平面側の張る半裁紡錘形で、横断面は段近くの床は平坦でこれから焚口にかけては丸底となる。縦断面は浅い皿状で、焚口は燃焼部床より20cm程高く、幅65高さ80cm程の断面円形。窯出し時に天井が軸線上に幅55～60cm程の帯状に破壊される。壁は被熱により著しく焼け焚口部で幅20燃焼部で55焼成部で30cm程赤化し、焚口は客土後20cm程床面が上がる。廃棄後は流土が堆積し15cm程埋没したところで208C類の軒丸瓦を含む若干の瓦が流入する。窯両側は岩盤を掘削して焚口床面にそろえて平坦面を作り出し、その後20cm程客土を行って平坦面を上げている。

SX05はT-11の西端で窯体の東半部を検出。横断面は浅い皿状の床面から高さ90cm程の半円状の天井となり、第1次調査の焼成部断面に似る。幅は1.8m程か。天井壁が窯体内に崩落し、縦断床面は30°の勾配をとる無段の焼成部である。壁断面は被熱で7cm程還元される。トレレンチ内の1.4m程東には幅30cm深さ25cm程の矩形に屈曲する溝の一部が検出され、作業場の壁溝の可能性がある。SX05の南下方5m程、標高9.8～10mのレベルで地山を水平に掘削して作業面を造成し、上面に瓦をや多く包含する。出土瓦の内容から、SX05に対応する可能性が高く、この平坦面がSX05の前庭部となると、堰堤内に全長6～7m程窯体が遺存していることになり、7基中最良の状態である可能性が高い。この上部に客土して標高11.2～11.4mのレベルで平坦面を造りだし、上面に東から瓦が多く堆積

する（SX09）。これはSX05の北東側斜面上位に別個の窯体があったことを推測させる。

SX06は、調査区最西端に位置し、T-12内で窯体の東の一部を検出した。上面は天井部の崩落に伴う流土による削減で、中央に向か15cm程下がる。窯体の横断面は平坦な床面から高さ75cm程の低い天井部に連なる。推定で幅1.2~1.4m程か。底面で標高12.1mを測る。確認できる壁断面は被熱で6cm程赤化する。床面には1、2cmの炭灰上に瓦混じりの流土層が堆積し、さらに天井部の崩落土が堆積する。小範囲のため部位は認定しがたい。南に大きく削平され遺存状態は期待できない。

SX07は調査区の窯群の最東部に位置する。窯体は、検出部で燃焼部長1.2m、高さ40cmの段（階）をとつて傾斜角23°で焼成部が長さ70cmで遺存する地下式有階無段登窯で、表土下1m程の地山に掘り込まれている。地山面から天井部まで約1m、床面まで1.8mの深さがある。主軸はN-18°-Wにとる。最大幅は燃焼部にあり2.06m、高さ0.8mと推定される。平面は胴の張る半裁紡錘形で、横断面は平坦な床から40cm程上位で5cm程張る最大径部となり、70cm程上で床と同幅となる。天井は半円形をなすと思われる。SX04の例から、瓦の窯出しの便を図るために、燃焼部・焚口の天井を25cm程の厚みを残して地山を幅2.6m深さ60~70cm程船底式に切り下げている可能性が高い。縦断面も平坦で焚口に向け緩傾斜で上がり、床から上1.15mで幅3.15m以上、深さ20~30cmの前部が検出される。壁は被熱により、厚さ10cm焼成部で15cm程赤化され、床上15cm以上の厚さ3cm程が炭素を吸着して黒色を呈する。焼成部は遺存の端部で幅1.75mと燃焼部から30cm程狭くなる。燃焼部で花崗岩盤の天井壁塊が堆積、焼成部床上から天井壁塊上に多くの瓦片が流入して出土しており、初回の操業のみで廃棄された可能性が高い。床上1.8m上位に瓦溜まりが形成され（SX098）、この中間で10世紀後半の黒色土器・土師器が検出され、SX07の下限時期を確定する。

1次調査で奥壁平坦な窯尻が検出されており、SX04・07の焚口・燃焼部・焼成部の形態から、窯構造は西区女原窯・太宰府市来木2号窯に非常に類似すると考えられる（Fig.69）。

窯体内から検出した瓦は別表の様に難多で、女原・元岡窯の様に叩き文様がまとまる傾向はない。また、丸・平瓦の種別で文様を固定する傾向も見受けられない。特徴的な瓦としては、SX01・06から3Ab2+3Bb1瓦が出土。SX02・04・05から3Ab3類「警固」銘瓦が、02からは単格子に「×」を施す3Ab2類を検出し、ともに平安京・新宮町相島沖海底で検出された物である。SX02からは鴻臚館・吉武遺跡群で検出される3Ac2類の鉤文瓦、02から高野報告の3Ba2類逆字「警」瓦が出土している。また、SX04からは范傷のある208C類軒丸瓦を出土し、表採でも回収されており、これは来木2号窯・安楽寺・香椎宮・福岡城で検出され、11世紀代に比定されている。傷の進行具合から来木2号窯より本例が先行する。SX05からは3Ab+3Ac瓦、SX07からは鴻臚館から出土する3Aa3類「伊賀作瓦」と、調査区で2片のみ出土した5A類が出土。5類を主とする女原瓦窯は9世紀末~10世紀初頭に比定されており、SX07は明らかに後出する。他に0・1・3Aa1・3Aa2・3Ab類が出土。これをI期とし、物原SX08間にある内黒土器は10世紀後半であり、10世紀前半~中頃とする。層位と新出の瓦で前後関係を整理すると、II期SX08中位・SX96（3Ab2と3Ac2「今行」・3Ab2+3Bb1「+」・3Ab+3Ac2四角に「×」）、III期SX04下層・SX05（208C類軒丸・特大3Ac・3Ab3「警固」）、IV期SX08上位・SX01・SX02・SX04中層・SX09（3Ab3特大二重格子）となる。前後関係は明確であるが、これらが数年単位であるのか十年単位であるのか、現時点では判別できない。一括して10世紀後半~11世紀初めとしておく。よって時期的にはI期が鴻臚館IV期、以降がV期に供出した瓦であり、丹塗りを還元焼成し表面を黒色に熔化する3Ac2類「十」「＊」「◆」は、鴻臚館池北岸に多量出土する4A類に熔化が多くあり、示唆的である。また、平安京朝堂院・相島沖出土の3Ab3「警固」銘と3Ab+3Ac2四角に「×」の丸瓦は創建時ではなく改修時の供出と考えられる。



Fig.68 瓦叩き目文様分類基準

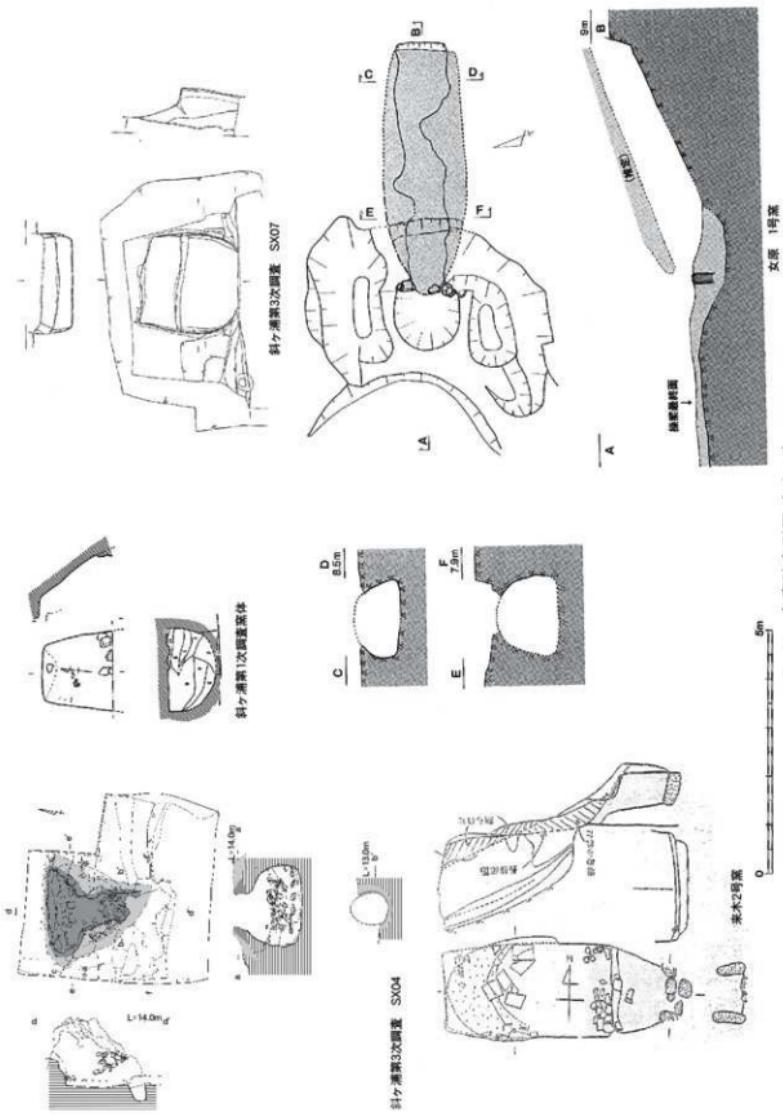


Fig.69 各案跡実測図 (1/100)



1. 調査区遠景（南東から）



2. 池と調査区段差（南東から）



3. T-17・25調査前現況（南西から）



4. T-9～13調査前現況（北東から）



5. T-23～8調査前現況（南西から）



1. SX01 (北東から)



2. T-24 (南東から)



3. T-2 (南から)

PL_3



1. SX02検出状況（北から）



2. SX02検出状況（西から）



1. SX02断面（北西から）



2. SX03断面（北東から）



1. SX04窯体（西から）



2. SX04窯体（南西から）



1. SX04北半縦断土層（東から）



2. SX04焚口横断土層（南から）



3. T-20（南東から）



1. T-20・23調査前現況（東から）



2. T-20西壁（東から）



3. T-20東壁（西から）



4. T-23（西から）



5. T-23（南から）



6. T-23前庭部（南から）



1. SX05 (東から)



2. T-21 (SX09) (南西から)



1. T-21・22調査前現況（西から）



2. T-22（南から）



3. T-21下位造成面（西から）



1. T-12・26調査前現況（東から）



2. T-12 (SX06) （南から）



3. SX06断面（南から）



1. T-26 (南から)



2. T-26東壁 (南東から)



3. T-26前庭部 (南から)



1. T-25調査前現況（東から）



2. SX07北半縦断土層（西から）



3. SX07窯体内検出状況（南から）



1. SX07窯体内検出状況（西から）



2. SX07瓦出土状況（西から）



3. SX07「伊賀作瓦」検出状況（南から）



1. T-25物原 (SX08) 検出状況 (西から)



2. T-25物原 (SX08) 検出状況 (南から)



3. T-25物原 (SX08) 上面土層 (西から)



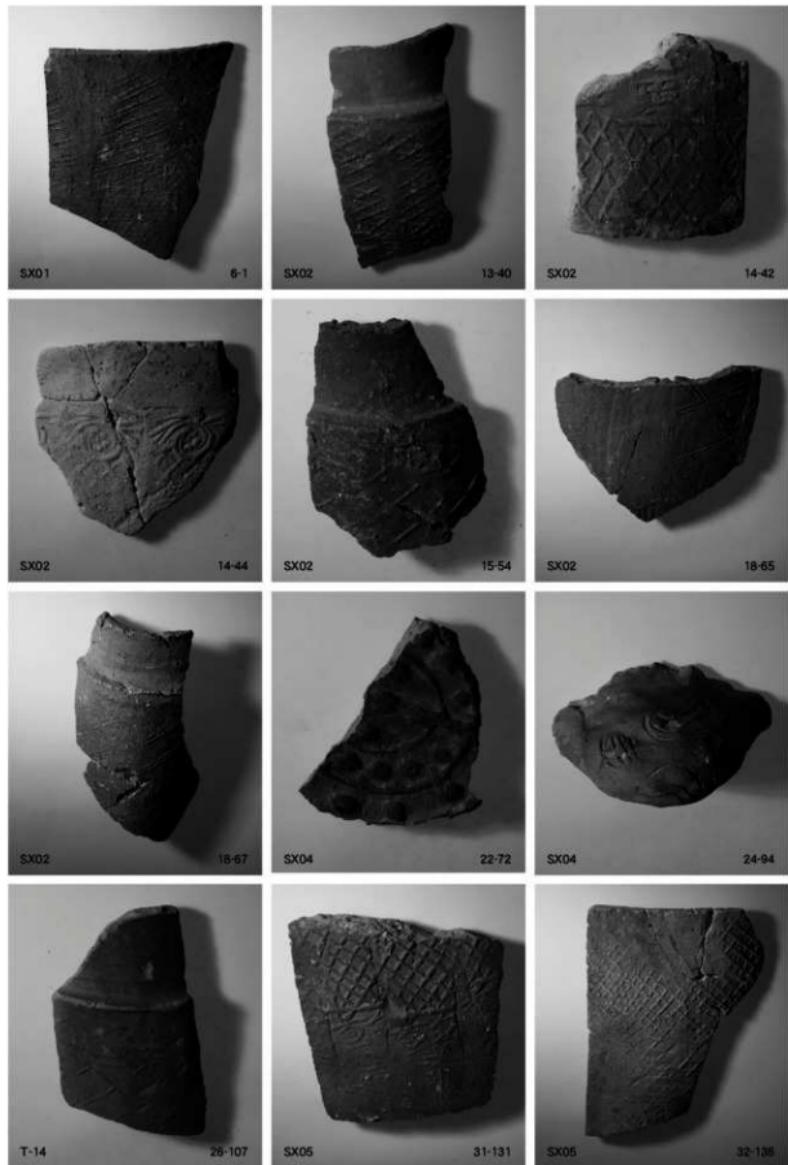
4. T-25物原下面土層 (南東から)



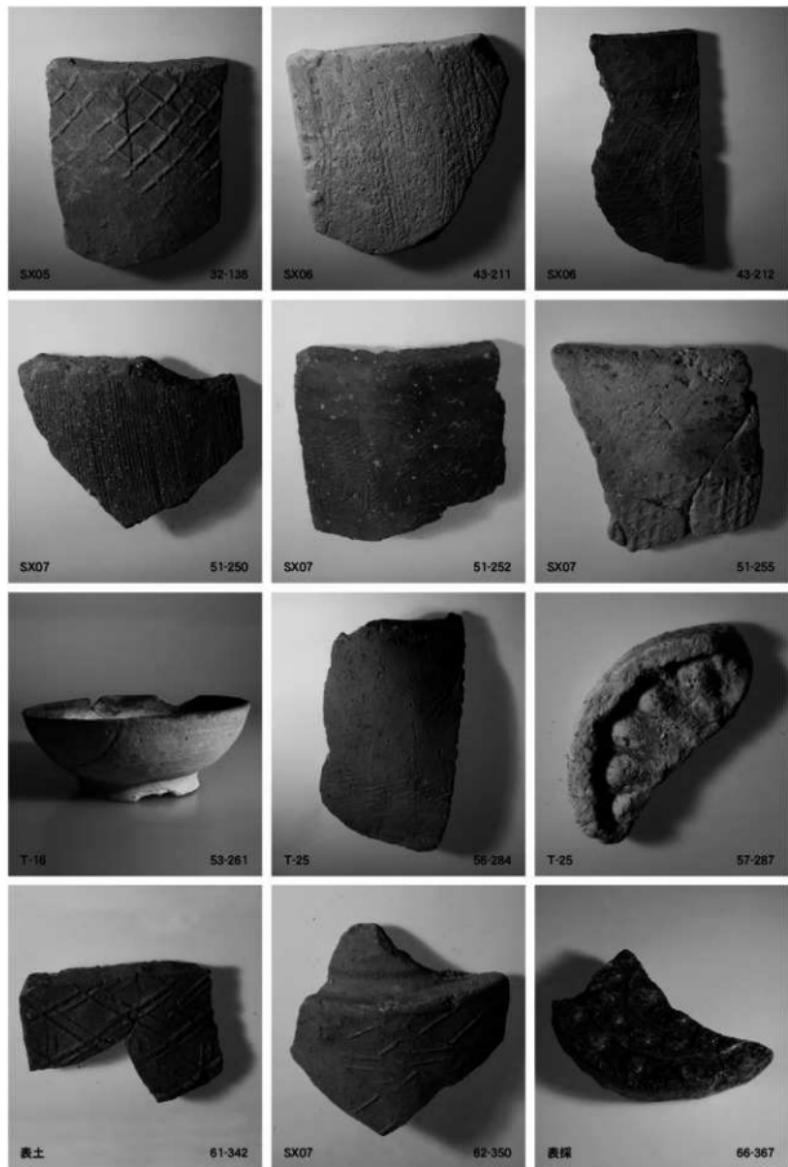
5. T-25物原 (SX08) 「今行」瓦 (南から)



6. T-25物原 (SX08) 軒丸瓦当 (南東から)



出土遺物.1



出土遺物2

報告書抄録

ふりがな	ななめがうらかわらがまあと						
書名	斜ヶ浦瓦窯跡2						
副書名	斜ヶ浦瓦窯跡第2・3次調査報告						
卷次	2						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	1233						
編集者名	加藤良彦						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL092-711-4667						
発行年月日	2014年3月24日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
斜ヶ浦瓦窯跡 第2次	福岡市西区 生の松原 4丁目2番	40135 0515	33° 34' 28"	130° 17' 59"	1996.11.08 1996.12.27	310	保存目的
斜ヶ浦瓦窯跡 第3次	福岡市西区 生の松原 4丁目2番	40135 0515	33° 34' 28"	130° 17' 59"	1997.12.18 1998.03.25	90	保存目的
種別	生産						
主な時代	古代						
遺跡概要	瓦窯跡7+瓦溜まり2+炉1+溝2						

斜ヶ浦瓦窯跡2

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第1233集

平成26年3月24日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 セントラル印刷株式会社
福岡市中央区大宮1丁目5番13号